

<u>第一話 働け勇者</u>	2013/05/04
<u>第二話 仲間の条件</u>	2013/05/18
<u>第三話 第一次魔宮作戦</u>	2013/06/01
<u>第四話 三本の矢さんなのです</u>	2013/06/16
<u>第五話 東の魔王</u>	2013/06/29
<u>第六話 青汁ファイター</u>	2013/07/23
<u>第七話 第二次魔宮作戦</u>	2013/08/04
<u>第八話 対話</u>	2013/08/25
<u>第九話 『姉妹』の結末</u>	2013/09/19
<u>第十話(最終話) 世界の中心で茶碗と叫ぶ謙吾</u>	2013/10/03

[本文1](#)

<u>第一話 働け勇者</u>	2013/05/04
<u>第二話 仲間の条件</u>	2013/05/18
<u>第三話 第一次魔宮作戦</u>	2013/06/01
<u>第四話 三本の矢さんなのです</u>	2013/06/16
<u>第五話 東の魔王</u>	2013/06/29
<u>第六話 青汁ファイター</u>	2013/07/23
<u>第七話 第二次魔宮作戦</u>	2013/08/04
<u>第八話 対話</u>	2013/08/25
<u>第九話 『姉妹』の結末</u>	2013/09/19
<u>第十話(最終話) 世界の中心で茶碗と叫ぶ謙吾</u>	2013/10/03

勇者佳奈多と百万円の壺

勇者佳奈多と百万円の壺

第一話 働け勇者

「うーうーうーうー！！！！ 緊急はるちんが通りマス！ 緊急はるちんが通りマス！！」
「待ちなさい葉留佳、廊下を走っては駄目よ！」

自分の口でサイレンを鳴らしながら廊下を疾走する三枝葉留佳。それを、姉の二木佳奈多が全力で追っていた。教室の廊下側の窓から、大勢の生徒が何事かと顔をつきだしている。やいのやいのと騒ぎ出す。

「ああ、また三枝だよ。今度は何やらかしたのかな」

「しかし追ってるのって二木だろ？ 風紀委員辞めたって聞いたんだが」

「ああ、それがな。二木が辞任した後、風紀委員会の治安維持能力がガタ落ちしてな。権威が失墜して生徒達が言うこと聞かなくなってますます治安が悪くなると思う、負のスパイラルに陥ってしまったらしい。これを打開すべく、引退していた二木元委員長に頼み込んで、特任即応予備風紀委員として、再任用することにしたんだとか」

「元とは言え、氷の風紀委員長が復活したとあればそれだけで震え上がる奴も多い。あっという間に校内の秩序が引き締まって、今じゃ反乱を起こすのはあの三枝ぐらいなものなんだそうだ」

「でも三枝って最近以前よりはおとなしくなってなかったか？」

「情報処理室にこもりきりで、ペンタゴンのシステムを破壊する研究をしてたりとか、そんなことやってたな」

「それおとなしくなったって言うのか」

「一般生徒に迷惑かけてるわけじゃないしなあ」

「だが、二木が特任即応予備風紀委員になったことで、自分と遊んでもらえなくなると思った三枝は不満を持ったらしい」

「それでまた暴れるようになったのか」

そんな生徒達の噂や陰口をよそに、葉留佳は廊下を走り続けた。姫君に恋したバイクが一番大切なものを盗み取っていったかのよう。

「はるちんは緊急車両に指定されたのでサイレンを鳴らしていればスピードを出してもいいことになっているのデス！」

「あなたは車じゃないでしょう！」

「デスカラ、緊急はるちんだと言ってるじゃないデスカ」

「屁理屈を言うのはやめなさい。あなた、全教室の花瓶に青い色素入れて回ったでしょう？ 白いバラが青色になって、大騒ぎになったのよ！」

「実現不可能といわれた青いバラの品種改良に成功した、まさに日本の技術力の象徴ですネ」

「あれは遺伝子導入の特許技術よ、青い色素なんて昔からよくあるペテンの一つじゃないの」

「はるちん実はペテンとか大好きなんデス！」

そう言いつつ葉留佳は廊下の角を急カーブし、その先にあった階段を滑り降りるかのようには高速で降りていった。佳奈多は慣れた足付きで角を曲がり、ステップを踏む勢いを使ってそのまま跳ね上がり、空中を階段に向かって突進していった。そのころ葉留佳は既に踊り場を過ぎて、1階に向かう階段を疾走しだしていた。佳奈多は降りる直前にそれを視認し、咄嗟に右手を伸ばして階段の欄干を掴み、右腕に力を入れて手すりを飛び越えるように体を空中で回転させ、反対側の階段に一気に降り立った。が、葉留佳の足の方が一歩早く、降り立った場所は葉留佳の真後ろだった。足場が不安定な階段の途中で佳奈多が体勢を立て直している間に、葉留佳は校長室の方に駆けて行ってしまった。佳奈多もすぐにそれを追った。

走り去ろうとした葉留佳は、校長室の前でふとあるものに気づき、それを持ち上げようとした。台の上に置かれた、人の身長2/3程もある大きな壺だった。陶製らしく、簡単には持ち上がらない。諦めた葉留佳は、代わりにポケットから小袋を取り出し、その中身を壺の中にぶちまけた。その一部始終を、追っている佳奈多は見ている。

「はるかっ！ あなた何をしたのっ！？」

「見ていたのでしょうか？ この壺の中に、例の青い色素を入れたのデスヨ」

「あ、あなた...それ校長先生の壺でしょっ！？ なんとということをして...」

「これから校長室の前に牛けられる花は全て青色になるのデス。空のあを、海のあを、花のあを

うん、ナカナカいい言葉デスネ、後で美魚ちゃんに聞いて貰おう」

「無言の罵りを受けるだけだからやめなさい。そしてさっき投入した色素は壺の中から回収すること」

「えー。この壺おっきいし、そこまで手届かないし、回収なんて無理デスヨ」

「無理とか言わないの。何とか知恵を絞って回収しなさい」

「はるちんの知恵はもっと人類の発展とか世界平和に資することに使いたいデスヨ」

「だったら最初からそういう方面で有意義な活動をするようにしなさい。あなたが自分でできたことなのよ、ちゃんと責任持って始末しなさい」

「ワカリマシタヨ。では、幸い今この壺他に何も入ってないことですし、中に水を入れてさっきの色素流してしましましょう」

そう言って葉留佳は、バケツに水をくみ、戻って来た。

「あ、でもこれ、壺の口の位置が高すぎて水入れられないデスネ」

「下に降ろせばいいじゃない」

「そうなんですケド、さっき見てたからわかると思うけど、これ結構重いんですヨ」

「そう。じゃあ手伝ってあげるから二人で降ろしましょう」

「え？ 手伝ってくれるの？」

葉留佳の顔がぱっと明るくなった。佳奈多は、自分の顔が緩んでいないかが気になり、咄嗟に顔をそむけた。

「じゃあお姉ちゃん、一緒に持ち上げますヨ。いいー？」

葉留佳は確認をとったが、既に壺を持つ体勢に入っていたため、佳奈多がまだ顔をそむけたままな事に気づいていなかった。

「ええ、いいわよ...」

佳奈多は返答を返した。その返事は、手伝ってくれるのかという葉留佳の問いに対するもののもりだったのだが、既に葉留佳の行動はその次に移ってしまっていることに佳奈多は気づいていなかった。

「よおし、じゃあ一気に持ち上げちゃいますヨ。せーの！」

葉留佳は勢いよく、壺の片側を持ち上げた。反対側で佳奈多が支えていると信じて。だが佳奈多は、壺ががたりと動いたときようやく葉留佳が何をしようとしているかに気づいたぐらいで、壺の片側を押さえるなどという事は全くしてはいなかった。

はたして。壺は葉留佳が持ち上げた分だけそのまま傾いてしまい、そして重力にひかれてそのまま反対側、佳奈多のいる方向に倒れていった。

ばしゃあん。廊下のコンクリートの上で陶製の壺が激しく割れる音が響いた。

「お姉ちゃん、大丈夫！？」

葉留佳は佳奈多に駆け寄った。倒れてくる壺を避けた佳奈多は、床に手を付けて這うような体勢をとっていたが、怪我は無いようだった。

「大丈夫。それより壺は...」

佳奈多が後ろを振り向くと、そこには叩きつけられて割れた壺の破片が散らばっていた。

「...」

「...」

二人とも暫し無言だった。と、その時、校長室の扉が開き、中から校長が出てきた。

「随分大きな音がしたが、何事ですか？」

そう言って校長は佳奈多と葉留佳を見、そしてその脇に散らばっている壺の破片を見た。校長は一瞬顔をしかめ、そしてそばで倒れそうな体勢になっている佳奈多に声をかけた。

「大丈夫ですか君...二木佳奈多さんだったね、怪我は無いかな？」

「ええ...怪我は大丈夫です」

「そうですか。破片が体に入ったら大変だからね」

破片という言葉聞き、佳奈多ははっと気づいて、立ち上がり校長に向き直り頭を下げた。

「申し訳ありません。この壺は私が割りました」

「え。待って、でもその壺は私が...」

「葉留佳は黙ってなさい」

おろおろする葉留佳を、佳奈多は頭を下げたまま押しとどめた。

「責任は私にあります。...私が弁償します」

それを聞いて、校長は少し顔をしかめた。

「弁償...ですか。この壺はある生徒から寄贈されたものなのですが...それを、一生徒が易々と弁償できると思うかな？」

「...いくらなんでしょうか」

「幾ら...ですか。百万円...と言ったら、どうするつもりかね？」

「ひゃく...」

金額を聞いてまた葉留佳が慌てた。葉留佳の不安を感じ取った佳奈多は、それを断ち切るように校長に返答を返した。

「...私が返します。時間はかかるかもしれませんが、必ず返します」

校長はうーんと唸った後、佳奈多に返した。

「事故があった直後で君も冷静では無いのだろう。落ち着いたら...そうだね、一週間くらいしたらまた来なさい。ああ、片付けはやっておいてね」

「はい...」

校長は部屋に戻ってゆき、佳奈多と葉留佳は割れた壺を片付けて教室に戻っていった。

「いつになく浮かない表情をしていますね、二木さん」

教室に戻って席で沈んだ表情をしている佳奈多に、おなじクラスの有月初が話しかけた。

「そんなに暗い表情に見えるかしら？」

「私がわざわざ声をかける程度には」

「...そう」

「三枝さんの姿がありませんね。それでですか？」

「そうね。そうかもしれないわ...」

「...壺の件ですか？」

壺という言葉聞いて、佳奈多はびくっと肩をふるわせた。

「なんでも大金が必要だとか」

「ええ...そうよ、そうなの...」

「おうちの方は当てに出来ないんですか？」

「金額が金額だし...それにまた葉留佳が怒られるわ。せめて半分くらいは自分で返す算段を付けないと...」

「そうですか。それで西園さんはこれを私に...」

そう言って初は、一枚の紙を佳奈多に渡した。

「求人票...？」

「時給がいいので本当は私がやりたいくらいなんです...採用条件が合わないの」

そう言われた佳奈多は、求人票の時給欄に目をやった。時給2200円。完了時に別途賞与支給。

「...こういうのの時給ってあまり詳しく無いのだけど...これはかなり待遇がいいのかしら？」

「良すぎるくらいですね。初心者歓迎でこの時給だったら、逆に疑わないといけないレベルです」

「これは初心者ではダメ、と...。私アルバイトの経験は無いのだけど...」

そう言って佳奈多は、条件欄に目を移した。年齢16歳以上。リーダーシップのある方。武術とマネジメント能力あれば尚良し。勇者又はラスボス経験は必須。

「は...？」

目を疑った佳奈多は右手で目をこすり、もう一度求人票を見返した。勇者又はラスボス経験必須。確かにそう書いてある。

「二木さんって確か、ラスボス経験ありましたよね」

「え！？ ええと何のことかしら...」

「隠さなくていいですよ、みんな知ってますから」

「そう...そうなの。と言うか、そもそもラスボス経験を要求される仕事って、一体何なのよ...」

そう言って佳奈多は、職種欄に目を移した。こう書いてあった。大魔王棗恭介討伐任務。

「え...？」

大魔王棗恭介が直枝理樹をさらって自分の館に連れ込んだため、大魔王を倒して直枝理樹を救出する。4人一組で任務に当たる為、そのリーダーを務めて貰う(4人分の給与支給)。他3人のメンバーはリーダーが選任。

「先にこっちを見ておくべきだったわ...」

佳奈多は机に突っ伏してしまった。時給とか条件以前に、内容がばかばかしすぎる。誰かのいたずらだろうか？ 疑いの目で求人票を見ながら、佳奈多はそんな事を考えていた。

「西園さんは是非やって欲しいというようなことを言っていましたよ。不満かもしれませんが、一度話してみた方がいいんじゃないですか？」

「西園さんかあ...」

西園美魚。E組の秀才で、葉留佳がいつも世話になっている、物静かなくせ者。

「無視するわけにも行かないか...」

佳奈多は席を立ち、美魚と話をするためE組の教室に向かった。

E組の教室に入った佳奈多は、自席にいた美魚に話しかけた。

「西園さん」

「そうです、私が西園美魚です」

「この事なんだけど...」

佳奈多は初から受け取った求人票を美魚に見せた。出だしでボケたつもりだった美魚は、それを無視された事が少し不満そうだったが、何も言わず求人票に目をやった。

「ああ、これですか。引き受けてくださるのですか？」

「いや...むしろ逆の気分なんだけど」

「何故ですか？ 給料も悪くないですし、それに、あなたにしか出来ないやりがいのある仕事ですよ」

「そんなこと言われても...なんというか、ばかばかしすぎるし」

「なにがばかばかしいと？」

「棗先輩が大魔王で直枝をさらっていったとか...」

「夢が広がりますよね」

「え？ う、うん、確かにファンタジーよね...」

「夜陰に紛れて直枝さんを連れ去った大魔王恭介。照明も無く月明かりだけがさす部屋、大魔王恭介はそこに置かれたベッドに直枝さんを横たえ...」

美魚はあらぬ事を妄想してうっとりしていた。

「私、是非直枝さんが連れ込まれたという大魔王の館に行ってみたいです...」

「そんなところ行ってどうするのよ...」

「二木さんは人が悪いですね...人の多いこんな場所で、そういう事を私に口走らせたいと」

「あなたが何を言ってるのかわからないわ...ううん、わかりたくない」

「成る程。二木さんにはそういう趣味はない、と」

美魚は一呼吸置いてから続けた。

「確かに二木さんは直枝さん一筋ですものね」

「な...！」

動揺した佳奈多はつい声を大きくしてしまった。教室中の注目が佳奈多と美魚に集まり、佳奈多は声を潜めて美魚の耳元で言った。

「変な事言わないでくれる!？」

「私が何も知らないとでも？ うふふ...」

「な、なによ...脅迫でもするつもりかしら？」

「別にそんなつもりは...ただ私は、二木さんにこの仕事を引き受けて貰って、私を仲間に加えて欲しい。そう願っているだけですよ」

「...。」

佳奈多は苦虫を噛み潰したような顔をしています。

「お給料も入りますし、直枝さんも助け出せますし、二木さんにとっても悪い話では無いと思うのですが」

「だから直枝は...関係ないわよ...関係ない」

「そんな口をとがらせなくても...微笑ましくて私の方が表情が緩んでしまいます」

「もういいわ。あなたと戦っても意味無いもの」

「そうですよ。戦うべき相手は、大魔王、棗恭介です。さあ勇者よ、共に立ち上がりましょう」

美魚は椅子から立ち上がり、佳奈多の手を取りながら言った。また教室中の視線が二人に集まった。

「ねえ西園さん、どこか別のところで話した方がいいんじゃないかしら？」

「この仕事を引き受けてくださると約束すれば」

佳奈多は一瞬渋い顔をしたが、すぐに結論を出して返答を返した。

「わかった。引き受けるという方向で、でもそうね。詳しい話を聞かないと」

「...って、おこへつてこ...」

「そうですね。では、移動しましょうか」

美魚は佳奈多を連れて教室から出た。

挨拶労働部。そう書かれた紙が貼ってある扉の前で、佳奈多は美魚と一緒に立ちすくんでいた。

「...なにこれ」

「英語に直訳すればいいんじゃないでしょうか」

「こんな部、うちにあったかしら？」

「最近出来たそうですよ。厳しさを増す学生の就職活動を支援し、就職やアルバイト先の紹介仲介を行うのが目的なのだとか」

「どうしてうちの学校はこう変わった部活動が多いのかしらね...」

「その求人票も、ここで貰ってきたものなのですよ」

「だから内容がうさんくさいのかしら...」

そう言って佳奈多は、扉を開けた。

「あ、佳奈多さんなのです。はろー、うえるかむわーく！」

「...クドリャフカじゃない。こんなところで何してるのよ」

「挨拶労働部のお仕事で雇用相談員をやっていますです。なんでも気軽に相談してくださいねー」

「ブラック企業の蔓延は社会経済全体にとってもマイナスになるから、何とかして欲しいんだけど」

「...そういう規模の大きいお話は、本物のハローワークに相談して欲しいのです...」

「職業安定所って基本仕事紹介するだけの所だから、そっちに相談してもあまり意味は無いのだけどね...」

佳奈多はやれやれという表情をしてから、思い出したように話を切り替えた。

「そんな話をしに来たんじゃ無いの。西園さんが貰ってきた、大魔王討伐とかいう求人の事なんだけど...」

「ああ。あの、業務委託で持ち込まれたお仕事ですね。あれは確かに佳奈多さんにぴったりのお仕事ですよー」

そう言いながらクドは傍らのパソコンを操作し、情報を引き出ししていた。

「こちらは挨拶労働部が直接請け負った仕事なので、挨拶労働部が雇用する形になりますねえ。時給とか諸条件は佳奈多さんが持ってる求人票の通りです。社会保険は雇用保険だけで厚生年金と健康保険はつかないですけど...それでもいいですか？」

「雇用保険がつくというだけで驚きなんだけど...」

「3ヶ月以内に大魔王討伐が終わる保証は無いですからねえ。あ、でも契約は1ヶ月毎の更新になります。大魔王討伐が終わったら契約終了という事で。ああでも、早く任務が終われば賞与が出ますから」

「うん、そういう事は実はあまり気にしてない...」

「何かご不明な点がありますですか？」

「そもそも大魔王って、これ一体何なのよ？」

「恭介さんですけど？」

「うん...そうね、そう書いてあるものね」

「他に何か？」

「直枝って何でこうすぐ捕まるのよ...」

「直枝さんって、以前にも捕まったことありましたっけ...？」

「...ううん、何でも無い。今のは私の質問が悪かったわ」

「あまり普通のお仕事ではありませんから、いろいろ不安になるのはわかります。引き受けた後でも疑問に感じた事は何でも訊いていただいてもかまいませんよ」

「うん、普通の仕事じゃないって認識があるだけでもちょっと安心した」

「でも人のためになるいい仕事だと思いますよ」

「そうね...巻き込まれてるなら助けないといけないし」

「ではこの仕事、引き受けてくださいますか...？」

引き受ける、と答えようとして、佳奈多はためらった。本当にこの仕事を引き受けていいものなのか、理屈にならない迷いが佳奈多の中にあった。

「あの...もしかして、3人仲間を集めないといけないとこで迷っておられるのでしょうか...？」

「え？ ううん、そういうわけでは無いわ...西園さんが仲間になってくれるって言うてるし」
「そうでしたか。それは心強いですね。西園さんはアドベンチャーコンサルタントの資格を持っていますし」
「何？ え？ アドベンチャーコンサルタント？ 何それ国家資格？」
「国家資格ではありませんが...最近この分野で注目されている資格の一つです。持っておけば名刺の肩書きが一つ増えますし」
「そんな名刺貰っても、って気もするけど...」
「時代の過渡期にはよくある事です。よくわからないけど知らない方が無知なだけなのでは無いかと思わせてしまうカタカナ職業の氾濫。...後々まで残るのはほんの僅かですが」
「それはつまり役に立たないと言う事ではないの？」
「そんな事は無いと思いますよ。西園さんのアドバイスはきっと佳奈多さんに役に立ちますし、残り2人の仲間もすぐ見つかるようになりますよ」
「そう。それは心強い事ね」
「では。西園さんと組んで、この仕事はお引き受けくださるという事でよろしいですか？」
「二木さん。先ほども言いましたが、私、この仕事やりたいです」
二人に迫られた佳奈多は、観念したかのように目を閉じ、そして小さく頷いた。
「引き受けてくださいますか。わふー。では早速手続きをしてしまいますね」
はあ〜、と佳奈多は大きく溜息をついた。とうとう引き受けてしまった。でもこれで壺を弁償できれば。しかし何故自分はこんな事をしているのだろう。
「時給制ですので、毎日勤務時間を申告して貰います。業務報告もお願いしますね。勤務時間は自由ですけど、大魔王はちゃんと倒せるように計画してください。佳奈多さんなら大丈夫だと思いますけど」
クドの説明を聞きながら、佳奈多はぼんやりと窓の外を眺めていた。学校の裏手にある小さな山が見える。大魔王と戦う前から既に負けた気分だ、と口にしようとして、しかしそれをすんでの所で思いとどまった。

次回

勇者の仕事を引き受けた佳奈多。しかし大魔王を倒すには4人の力が必要だった。既に仲間になった西園美魚の他に、あと2人仲間を集めなくてはならない佳奈多。友達のいない佳奈多に代わって美魚が選んだのは...

次回 勇者佳奈多と百万円の壺、第二話「仲間の条件」

勇者佳奈多と百万円の壺

第二話 仲間の条件

「では早速、残りの仲間を探しに行きましょう」

手続きを終えて外に出た佳奈多と美魚は、歩きながら残り2人の仲間を集める相談を始めた。「早速アドバイスさせていただきますと...二木さん自身既に十分な能力をお持ちですし、際だったスキルが無くても、二木さんを補佐できるだけの力があれば十分かと思います。ですのでこういう場合、元から気心の知れた友人に頼むのが一番よいのですが...」

美魚は一呼吸置いて佳奈多の顔を見てから、また続けた。

「そのような方はどなたか」

「いないわ」

「そんな即答されても」

「だっていないものはいないんだもの。他にどう答えろと？」

「確かにそれはそうですが...」

「西園さんの知り合いで誰かいい人いないのかしら？」

「私もそんなに交友関係が広い方では無いので、人選は限られますが...」

美魚は暫し考えて、そして言った。

「やはりこういう場合、魔法使いが仲間にいた方がいいですよ」

「魔法使い...」

「二木さんは今、30歳になった恭介さんを想像しましたね」

「...そんなにわかりやすかったかしら」

「私も同じことを考えたので」

二人はしばし無言になった。

「まあ、それはこの際どうでもいいとして」

気まずいものに触れるのを避けるかのように、佳奈多が話の方向性を変えた。

「誰か魔法使いに適任な人がいるのかしら？」

普段の佳奈多なら決して口にしないようなファンタジーな台詞だった。

「実力のほどはいかほどかしれませんが、どう考えても魔法使いとしかいいようがない人に一人心当たりがあります」

「そう。じゃあ、紹介してもらえるかしら」

「この人です」

「ふええ」

「...」

佳奈多は小毬を紹介されていた。

「あの...確認していいかしら？」

「はい」

佳奈多は美魚を少し離れたときに引っ張ってゆき、問い詰め始めた。

「魔法使いなのよね？」

「はい」

「その魔法使いというのは、もしかして、夢の世界を操るとか、パーソナルリアリティとか、そっち系の意味での魔法使いなのかしら？」

「そっちというのがどっちなのかよくわからないのですが...」

「だから、最近だと眼帯つけて傘振り回したり...」

「何の話でしょう。古式さんと私をごっちゃにしてませんか？ それは確かに、無印発売直後は時々混同されましたけど...」

「ううん、もういいわ...いえね、私は、神北さんが自分で自分のこと魔法使いと名乗っちゃって、るイたい子なんじゃないかということを知ったかっただけで...」

「ふええ、私、イたい子だったんだ...」

...だった。はい、...」

いつの間にか後ろで聞いていた小毬が落ち込んだ。

「私、二木さんにそんなふうに思われてたのかあ。ショックだなあ。そりゃあ私だって空からお菓子が降ってきたらいいなあとか妄想することはあるけど、それくらいは許されると思ってただけどなあ。それに、二木さんだって魔法のバトンで変身して大きなお兄さんをしばき倒す魔法少女とかやってたって聞いたのに...」

「...何の話かわからないわ」

「ええ、何の話かわかりませんね。うふふ」

美魚は妙にうれしそうだった。

「なによ」

「何でもないと言っているではありませんか...うふふ」

「だったらそうやってニヤつくのはやめて」

「そうだよ美魚ちゃん。人には誰だって触れてほしくないことがあるんだから。どうして二木さんがそっち系のことにやけに詳しいのかとか、そういうことをいちいち詮索したりしてはいけないのです」

「な...あなた、一体何を言って！」

「ほえ！？ は、わわ、ごめんねえ、今のは私、悪気があって言ったんじゃないんだよお？」

「悪気がない方が対処がしづらいとはよく言うけど...」

「うん、ごめんね私うっかりさんだから。空から紅茶が降ってきてもよけられないし」

「...。」

「二木さん、どうかしたのですか？」

「え、えっと、え？ 何だったかしら」

「何か心にやましいものを抱えている顔をしていますか？」

「みおちゃん。さっきも言ったけど、人には誰だって触れてほしくないことがあるんだかよ。だからそういうの、いちいち気にしてはいけないのです。寮長室から紅茶をぶちまけたのが誰かとか、知らないことにしておいた方が幸せなのです」

「...あの、神北さん、もしかして、あなたに紅茶かけたのが私だって知って...」

「ふええ！ 私に紅茶かけたの、二木さんだったの!？」

「...くっ」

佳奈多は口の奥で歯ぎしりしていた。お世辞にも完璧でない自分、でも完璧で無ければならない自分、そして完璧とはほど遠い事をしでかしてしまった自分。佳奈多は当時の事を思い出し、苦いものが口の奥からこみ上げてくるような感覚に耐えていた。しかし目を閉じて数秒考え、意地を張ったりごまかしたりしないことがあらゆる点において最善の行動であると判断し、自分の中にある全ての感情に言い聞かせて、小毬に頭を下げた。

「そうです。私が紅茶をかけました。ごめんなさい」

「わわわ、私別にそんなことしてほしかったわけじゃ...ああ、こうなるから黙ってたのになあ」

「全然黙ってませんでしたけど...」

「ほえ？ わ、わ、わ、私、何か言っちゃった？ うん、言っちゃったから指摘されてるんだよね...。ああ、こういうのが口に出ちゃうなんて、私って実はいやな子なのかなあ...」

そう言って小毬は、佳奈多の両手を取り、言った。

「二木さん、顔を上げて」

「神北さん...」

「今、私もいやな子だということが判明しました。だから。二木さんがいやな子でも、それをいちいち気にする必要は無いのです。むしろいやな子同士、これからは仲良くしましょう」

「二木さんがいやな子というのはすでに確定なんですね...」

「そそそそんなことないですよー。私はただ二木さんと仲良くしたいというだけで、他意は無いんですよ」

「...ええ、気にしてないわ。自分でもそう思ってるし」

「そうだ、仲良しの印に、名前呼びましょう。二木佳奈多だから...かなちゃんと呼んでいいですか？」

「かなちゃんって呼ばないで!!!」

佳奈多の怒声に小毬はたじろいだ。

「ふええ、なんかすごい怒られたよお...」

「逆鱗に触れてしまったようですね...」

「やっぱり私、何かしでかしたのかなあ？ だからあのときも紅茶が空から...」

「ち、違うのよ。そもそも私が紅茶を窓から捨ててしまったのは...」

そこで佳奈多は、当時の状況を思い出した。直枝理樹に私はかなちゃんじゃないと言い張って

いた、あの恥ずかしい状況を。

「...やっぱりその呼び方が原因だったわ」

「ふええ！？ そうなんだ...。そっか、じゃあ私マイカップいつも持参してるわけじゃ無いからあんまり紅茶に降ってきて欲しくないし、出来るだけかなちゃんとは呼ばないようにするね」

「マイカップ持参してるなら降ってきてもいいんですか...」

マイカップという単語に佳奈多はまた反応しそうになったが、そこはさすがに耐えた。

3人とも気分を落ち着かせるために、自販機前に移動した。美魚がわざとらしく紅茶を買ったことに佳奈多も小毬も苦笑しつつ、それぞれに買った飲み物を飲みながら一息付けていた。

「それでええと、魔法使いでしたっけ？」

「西園さんが言うには、あなたは魔法使いに適任だと。...ええと、いきなりこう言っても意味不明ね。大魔王恭介を討伐する仕事というのがあって、それを私が引き受けたんだけどあと3人仲間が必要なの。で、1人は西園さんになったのだけど、あと2人必要だから、神北さんにやって貰えないかと」

「ふええ。つまり、恭介さん倒しちゃうんだあ」

「まあそういう事になるわね」

「恭介さん何か悪い事したの？」

「直枝理樹を連れ去ったわ」

「ほえ？ 理樹君連れ去られちゃったの？」

「ええ」

「それが許せないと」

「まあ、そうね」

「それはつまり、嫉妬ですか？ ジェラシー、ですか？」

「違うわ」

「ほえ？ 違うの？」

「社会正義の観点からそういう行為が許せないだけよ。後はお金の為」

「恭介君が理樹君を連れ去るのは社会正義に反すると」

「そうよ」

「二人は幼なじみですよ？」

「幼なじみでもよ。そういうの...良くないわ」

「良くないのですか？」

「良くないのです」

「うーん...。ホントに嫉妬じゃないの？」

「嫉妬じゃないわ」

「そうなのかなあ...」

考え込む小毬。それを横で見ていた美魚が小毬の肩をちょんちょんと叩き、そっと耳打ちした。

「...そういうことにしておいてあげて下さい」

「ああ！ そういうことかあ。うん、わかったそういうことにしておくね」

納得した小毬は、表情を取り繕ってから佳奈多に質問した。

「恭介さんを倒したらどうするんですか？」

「そうねえ...どうしたらいいかしら？」

「それはもう。4の倍数で切り刻んで二度と日の当たらない場所に封印、とかではないですか？」

「え？ 何もそこまでするつもりは無いんだけど」

「何故です？ 相手は直枝さんを連れ去ったにつつき大魔王ですよ？」

「だからってそこまでするつもりはないわ」

「私の理樹君に手を出さなければそれでいい、と」

「そうじゃないって言ってるでしょっ！」

「ふえ。そうでした」

「そうよ。私はただ、男の子を連れ去っていかがわしいことをするのは良くないって言いたいだけ。別に、恋敵だとか、直枝を助けて恩を売りたいとか、そんなのじゃ無い」

「誰もそんなこと訊いてませんけど...」

佳奈多はしまったという表情をした。だが美魚がそれ以上何も言わないので、佳奈多も黙って

はかばかしくいったこと、小毬も聞いていた。たぶん、小毬も聞いていた。間にいた小毬はうんうんとうなずいていた。

「まあ、だいたいの話はわかりました。要するにこれは、人助けですね。うん、人助けなら協力しないわけにはいきませんねえ。むしろ協力させてくださいっ」

「...あ、うん。ありがとう」

こうして、小毬が仲間に加わった。

「残るは一人ね...。仲間を増やしたらクドリヤフカの所に登録しに行かないといけないのだけど...全員集めてからの方がいいかしら？」

「神北さんが能美さんと話し込みそうですし、時間を無駄にしたくないならまとめて登録しに行った方が良くないか？」

「うわーん。私、時間泥棒みたいな扱いされたー」

泣き声の小毬をよそに、佳奈多は美魚と話を進めていた。

「ま、確かにあと一人だし、いちいち戻るよりは次を探した方が良さそうね」

「二木さんに友達がいれば探す必要も無いんですけど」

「...それはもう言わないで」

「四葉さんは友達では無いのですか？」

「残念ながら。決して仲が良かったわけではないし。それにあの子、最近生物部に入ったとかで忙しそうだし。なんか昆虫採取とか言って、憑きものが取れたみたいに網持って校内を走り回ってるわよ」

「それは違う方向で心配ですが...まあ今は置いておきましょうか」

「そうね。今は目の前の課題を片付けないと」

ふう、と佳奈多は息をついた。

「で、次は誰がいいかしら？」

「そうですね。妥当なところでは力のある人か賢者、と言ったところですが」

「賢者なら美魚ちゃんじゃないかな。いつ、くうればー！」

立ち直った小毬が話に割り込んできた。

「私はくうればーではありません、アドベンチャーコンサルタントです」

「ふええ？」

「私はくうればーではありません、アドベンチャーコンサルタントです」

「そ、そうなんだ、職業選択の自由は日本国憲法で認められた権利だもんね」

「そうです、日本国憲法は世界で最も自由主義な憲法なのです。日本国憲法がある限り共産主義は実現し得ないのです。ですが近年日本共産党が日本国憲法護持を掲げる一方で新自由主義を標榜する諸政党は憲法改正を声高に叫んでいます。この状況は、歪みが生じているのは日本国憲法などでは無くむしろ日本社会そのものであるということを示しているのであり」

「...美魚ちゃん。今ここにいるの私と二木さんだからいいけど...そうやってすぐ演説とか物語り始める癖直した方がいいよ」

「そ、そうですね。これは失礼しました」

「で。あと一人は誰がいいのかしら？」

佳奈多は何事も無かったかのように話を戻した。

「賢者か力のある人、だったよね。だったら、その両方を合わせてけん 力 しゃ！ なんてどーでしょう？」

「...」

美魚は何も言わず、ジト目で小毬を見ながらつまらないアピールをしていた。佳奈多は顎に手を当てて目を閉じ、何かを考えているようだった。仕草は違うが二人とも何も言葉を返さないため、小毬はしばらくそのままだったが、しばらくしてまた言った。

「けん 力 しゃ！」

「何度も言わなくてもわかります」

「わかってるなら何か言ってよ...はずしたかと思っちゃうじゃない」

「いや、はずしてるんですけど...」

「...権力者なら心当たりがあるんだけど」

考え込んでいた佳奈多が口を開いた。小毬の顔が明るくなり、美魚はぎょっとした表情をした。

。「二木さん、これは神北さんに付き合う必要は無いところですよ？」

「そうかしら？ 有用な意見だと思うけど」
「すみません、今私の中の常識が激しく揺らぎました...」
「私の知り合いの方がいい、と言ったのはあなたじゃないの」
「確かにそうは言いましたが...」
「なら問題なしね」
「しかし権力者って...どんな権力者か知りませんが、そんな人を仲間にしようとあなたは？」
「そうよ。何しろ大魔王を倒すんでしょ？ だったらむしろそれくらいの覚悟は持っておくべきじゃない？」
「はあ...。すみません私こう見えても小市民なので...」
「それに権力と言っても様々だし。私が知ってる人は、まあそんな大した権力持ってるわけでもないんだけど。棗恭介...大魔王恭介に対抗するんだったらむしろうってつけの人材だと思うわ」
「はあ。そういう事でしたら」
「とりあえず話をつけに行きましょうか」
「行きましょう。れっつごー！」
佳奈多と美魚と小毬は、4人目の仲間を見つけるために自販機前を旅立った。

「4人目という事は、フォースチルドレンですね」
寮長室の前で、美魚が突然そんな事を言い出した。
「...誰を誘おうとしてるかかった途端、急に軽口叩くようになったわね」
「権力者と聞いたら普通は怯えるじゃないですか...部活の顧問レベルでも結構怖いものですよ」
「体罰なくならないしね」
そう言って佳奈多は、寮長室の扉を開けた。中では男女二人の寮長が机に向かって執務を行っていた。そのうちの女子の方が入ってきた集団に目をやり、佳奈多を見つけて言った。
「あら、かなちゃん。ようやく寮長引き受けてくれる気になった？」
その場の空気が凍り付いた。特に小毬は、驚愕の色を隠せない目と口の開きようであり、そして慌てふためいて女子寮長の元に駆け寄った。
「だだだ駄目ですよ、二木さんの事そう呼ぶと、それはもうすごい怒るんですよ！ 怒られるのです！」
「うん。知ってる」
「だからその...謝っておいた方がいいと思うのです、たとえ上級生でも」
「でも普段からそう呼んでるし...かなちゃんて」
小毬の表情が、尊敬の念を含んだ驚愕に変わった。
「ほええ。権力者ってすごい...！」
「ん？ 権力者？」
女子寮長が、何言ったのよと言わんばかりに佳奈多の方を見ます。
「はい。あーちゃん先輩は権力者という事で、それを前提にお願いにきました」
「アタシが権力者？」
「ええ。寮会と言えはこの学校では生徒会と並び立つ権力機関ですし、その長である寮長は権力者と言って差し支えないと思いますけど？」
「ああ、うん、まあ。それはそうよね」
「その実力を見込んで、お願いがあります」
「なあに、権力争いとかそういう話？ だったらやーよ、なんかつまんなそう。アタシ忙しいし」
「大魔王棗恭介が反乱を起こしました」
「なにそれ何の話すごい面白そう詳しく聞かせて！」
「...こっちがひいてしまうくらいの凄まじい食いつきっぷりですね」
「あ、あらアタシとした事が...。ええと、詳しく聞かせてくれる？ ええ勿論、寮の治安を預かる責任者として事情を把握しておく必要がある話だと判断したからよ。で、なにになに？」
佳奈多ははあと小さく溜息をつき、そして続けた。
「大魔王棗恭介が直枝理樹をさらって自分の館に連れ込んだため、それを討伐する任務のの求人が出ました。私が引き受けましたが、全部で4人の仲間が必要との事なので探しています。西園さんと神北さんが仲間になってくれたので、あと一人なんです」
「へー」

「何にやついてるんですか」
「かなちゃん引き受けたんだあ、って思って」
「いけませんか？」
「ううん、全然。で、なんだっけ？ あと一人必要だから、それをアタシに頼みたい、と」
「はい」
「そして棗君を倒しちゃおうと」
「まあ、そういうことになりますね」
「そうかあ。棗君を押し倒しちゃうのかあ」
「そんな事は言ってません」
「あらそう？」
「言ってません」
「聞き間違いかなあ。ああ、そうか、棗君の部分が間違ってるのね。直枝君を押し倒すの間違いだと」
「どうしてそうなるんですか」
「じゃあ誰を押し倒すのよ」
「押し倒すから離れて下さい」
「押し倒すんじゃなく普通にいちゃいちゃちゅっちゅすると？」
「意味がわかりません」
「だって勇者がお姫様を助け出すのって、そういうのが目的な事が多くない？」
「私はそういう目的ではありません」
「でも直枝君を助け出して、恩を売って、そのまま仲良くなっていちゃいちゃしたいんじゃないの？」
「そんな姑息な事考えてません」
「じゃあ姑息でなく正々堂々と直枝君と仲良くなっていちゃいちゃしたいと」
「いちゃいちゃしたいなんて言ってないじゃないですか」
「いちゃいちゃすっ飛ばしていきなり押し倒したいと」
「すっ飛ばすなんて言ってません」
「すっ飛ばさずに押し倒したいと」
「どうしてさっきから押し倒す方向に持って行くんですか」
「え？ だってかなちゃんが直枝君を押し倒すのって仕様でしょ？」
「かなちゃんって呼ばないでください！！！」
「ほら！ 怒られちゃいましたよ！」
小毬が佳奈多とあーちゃん先輩の会話に割って入ってあーちゃん先輩を黙らせ、美魚は佳奈多をどおどおとか言いながらなだめていた。
「これくらいいつもの事なんだけどねえ」
「...わかっていますが、このままでは肝心な話が進まないの...」
「そおお？ じゃあ、その肝心な話をさっさと進めて貰おうかしら」
佳奈多は深呼吸をし、息を整えてから言い直した。
「大魔王棗恭介が反乱を起こしました」
「うん、それは聞いた。」
「さっさと大魔王を倒して直枝理樹を助け出したいので手伝って下さい」
「なるほどねえ。で、なんでかなちゃんは直枝君を助けたいの？」
「かなちゃんじゃないです...助けたいのは、その...お金のためです」
「またまたあ。かなちゃんがお金のために動くとか」
「これは本当です。校長室の前に大きな壺があったじゃないですか。あれをその...割ってしまっ
て」
「あらま」
「弁償しないといけないので困っていたところに、挨拶労働部...そういう部活が出来たみたい
です、そこに大魔王棗恭介から直枝理樹を助け出す、という依頼があって。時給が良かったので
」
「ああ、そういうことねえ...」
あーちゃん先輩は傍らにいる美魚と小毬を見ながら、納得したかのようにうんうんと頷いて
いた。
「ま、そういう事ならむしろ協力しないわけにはいかないわね」
「いいんですか？」
「いいんですかと言われちゃうと、じゃあ報酬を、と要求したくなるわね」

「メンバー全員時給2千円出ます」
「そういう報酬じゃなくて...例えば、倒した大魔王はアタシの好きにしていとか」
「そういうのは大魔王と直接交渉して下さい」
「直接交渉かあ...。それが出来るなら最初から戦う意味無くない？」
「でも戦ったりするより交渉で解決できるならその方がいいですよ〜」
「そうよね〜。あ、でも大魔王と直接交渉する勇者ご一行って聞いた事無いんだけど、有りなのかなあ...」
「ご安心下さい、そういうときのために私アドベンチャーコンサルタントが同行しています」
「あら素敵」
「交渉で不利にならないよう、事前準備のお手伝いから同席しての的確なアドバイスまで、懇切丁寧にフォローいたします。時給の1割を成功報酬という事で如何でしょう？」
「これがうまく行くなら2割でも3割でもあげるわよ。...あ、ちょっと別の場所で話さない？」
そう言ってあーちゃん先輩は、ずっと部屋の隅の席で黙って聞いていた男子寮長に目をやった。気づいた美魚と小毬は驚愕の表情を浮かべた。
「ほええ！ いたんですか！」
「いたんですよ」
「すみません、全然気づきませんでした...」
「埋伏は風紀委員の必須スキル、と言った人がいてね。それに習ってみただけだよ」
「誰ですかそんなイタイこと言った人は...」
あーちゃん先輩と男子寮長の視線が佳奈多に注がれた。佳奈多は目を逸らしたまま、何も言わなかった。美魚と小毬の表情は納得の表情になっていた。部屋を出た後みんなが佳奈多を見る目は、どこか優しかった。

佳奈多達4人は寮長室を出て、話し合いの出来る空き教室へと校舎内を移動していた。その途中で、あーちゃん先輩が佳奈多の袖を引っ張った。
「どうしたんですかあーちゃん先輩？ お化けでも出ましたか？」
「もし仮に出たとしてもかなちゃんの方が怖いから気にしてないわよ」
「お化けで遊び倒した挙げ句冷凍庫に放り込みかねないあーちゃん先輩に言われたくありません」
「あら、再利用はエコの基本よ」
「自動車などは、古い車を使い続けると却って環境に悪いですが...お化けの場合はどうなんでしょうね」
「お化けのエネルギー源を自然エネルギーに変えればいいんじゃないでしょうか」
「え？ お化けって元々自然エネルギーで動いてるんじゃないの？」
小毬が驚愕していた。
「あ...そうか、もしかしたらそうなのかも。どっちなんだろう」
「お化け本人に訊いてみては如何でしょう」
「...あーちゃん先輩、どうなんですか？」
「何故そこでアタシに振られるのか、全く以てわかんないんだけどお？」
「そうですか。わからないならいいです」
佳奈多は話を打ち切って、先に進もうとした。その佳奈多の袖を、またあーちゃん先輩が掴んだ。
「なんですか。バット持って暴れている葉留佳でも出ましたか？」
「バットは持ってないけど、三枝さんならそこにいるわよ」
「え？」
佳奈多が振り向くと、後方に柱の陰から4人の様子をうかがっている葉留佳の姿がそこにはあった。
「...仲間にして欲しそうにこっちを見えていますね」
「...」
佳奈多はちらりとだけ葉留佳を見、視線を戻して少しだけ考えた後、言った。
「行きましょう」
「えええええっ！！？」
佳奈多の言葉を聞いた葉留佳は、慌てふためいて柱の陰から飛び出してきた。

「ちょっとちょっと、その発言はいくら何でもあり得くないデスカ!？」
「だってあなた、仲間にして欲しいんでしょう？」
「そうですヨ。だからデスネ」
「だったら放って置いておいて行くしか無いじゃない」
「え!？ いや、はるちんちょっと疲れてるのかなあ、お姉ちゃんの理屈が理解できません。何故仲間にして欲しいような事がわかってるのにおいていくんですカ」
「だって仲間にする気無いもの」
「そ、そんなはっきりと...」
「事実を曖昧にするのキライだから」

葉留佳は絶望にうちひしがれたかのように崩れ落ち両手を床に付いた。それを見た小毬が、佳奈多を咎めた。

「かな...二木さん、はるちゃんも仲間にしてあげられないのかな？」
「できないわ。...葉留佳を危ない事に巻き込めないもの」
「それは私達は危ない事に巻き込んでかまわないという意味ですか？」
「そういう意味では無くて。...責任を果たせるかどうか、という話よ」
「はるちんそんなに無能じゃないデスヨ？」
「.....そうね」
「わざとらしく間を置かないで貰えますかネ」
「それに、定員4人だし」
「あ、そうか...」
うーん、と小毬は考え込みだした。
「どうして4人なんだろうね？」
「それは...こういうのは4人一組、と昔から決まってるからではないでしょうか」
「それって霞ヶ関の弊害って事？」
「いえ...そういうわけでは...」
「コンピュータゲームだとだいたいそうなってる、って話じゃないかしら」
「そうですね。昔はハードウェアの制約が厳しかったと聞きますし」
「じゃあ、4人をオーバーしたらどうなるのかな？」
「よくわからないけど...コンピュータゲームなら規定のメモリ領域から溢れるわけだから、バッファオーバーフローという事になるのかしら」
これを聞いていた葉留佳が急速に立ち直った。
「バッファオーバーフロー! セキュリティの脆弱性という時によく出てくるあれデスネ! はるちんそういうの大好きデス!!!」
「いや...大好きになられても」
「じゃあ小好きでいいデス」
「そんな定食のご飯みたいに言われても」
「ご飯おかわりっ! という事で、バッファオーバーフロー扱いではるちんも仲間に入れて貰えませんか？」
「いや...それいろんな意味でかなり問題有りなんだけど...」
「リトルバスターズ! カードミッションだってデッキから溢れたメンバーが戦力にカウントされてるじゃないデスカ!!!」
「だってあれはそういう仕様だし...」
「このパーティもそういう仕様にしてくれないですか？」
「...仕様の問題は私の一存では決められないわ」
「じゃあ、決められる人の所に行くべきではないでしょうか」
小毬の言葉に、佳奈多はそれもそうかと考え込む仕草をした。
「まあ、それはそうね。どうせ後で行かなければいけないところだったし...挨拶労働部に行きましようか」

「5人目というのは想定していなかったのです...」
戻って来た佳奈多達から葉留佳を5人目として入れられるかを訊かれたクドは、困惑した表情を示していた。
「5人目、どうしても必要ですか？」

クドからのその質問に、佳奈多は一瞬うろたえた。必要無い、と言いきってしまうのは簡単だった。だがその言葉が脳裏に浮かんだ瞬間、佳奈多の中にはそれに対する拒絶の感情が強く現れていた。葉留佳を必要無いと言うことは佳奈多には出来なかった。

「必要...と言えないこともないわ」

それが佳奈多の出した結論だった。

「聞きましたかクド公、はるちは必要不可欠な存在なのデス。とっとと5人目として認めなさい」

「そうなのでしょうか...」

「...何事にもはっきり白黒付けたがる二木さんが日本人よろしく曖昧な表現をしている事の意味を少しは考えた方がいいのでは？」

「ええっ!? それってどういう...」

「以前も言いましたがあなたには姉の苦勞というものが...」

「その姉の苦勞を軽減してあげたいという妹心がわからんのでスカッ！」

言い合いをしている美魚と葉留佳を見ながら、クドは困惑したまま決断をしかねていた。見かねたあーちゃん先輩が、口を挟んだ。

「能美さん。自分で決断できないなら、上に相談してみてもどうかしら？」

「あ、そ、そうですね」

クドは携帯を取りだし、どこかにかけて話をし始めた。その様子を佳奈多は見守るでも不安がるでもなく、ただ見つめていた。やがて、クドが話し終えて通話を切った。

「バッファオーバーフローなら仕方ない、とのことですよ」

「やったあ！」

「これを素直に喜べるって羨ましいですね...」

バンザイして抱きついてくる葉留佳に、美魚はそう言った。その様子を、佳奈多は無表情を装って見ていたが、口元から笑みがこぼれるのをクドは見逃さなかった。

「良かったですね、佳奈多さん」

「え? ええ、そうね...」

「じゃあ、この5人で登録しておきますので。勤務報告は佳奈多さんが5人分をとりまとめて下さいね」

「うん。わかった」

「これ、勤務表です」

クドから、それぞれの名前が入った5人分の勤務表を受け取ったとき、佳奈多は思った。もし立場が逆だったとき。自分には、こうして理屈抜きで協力したくなるような、そんな人は果たしていただけるか、と。

次回

大魔王棗恭介が潜むという山を突き止めた佳奈多。恭介に知られる前に行動を起こすべく、急襲をかける佳奈多だったが...

次回 勇者佳奈多と百万円の壺、第三話「第一次魔宮作戦」

勇者佳奈多と百万円の壺

第三話 第一次魔宮作戦

『リキから佳奈多さんにメッセージが届いています。早く助けて欲しいんでしょうかねえ』
その台詞と共にクドから渡されたメモリーカードを、佳奈多は指でもてあそんでいた。今後を話し合うため集まっていた空き教室で、話し合いもせずずっとそうしていたため、他の4人も一体何なのかと佳奈多を訝しがっていた。葉留佳が佳奈多の手元をのぞき込んで言った。

「見ないんデスカ？」

「ええ...そうね」

「直枝君からのメッセージだから、見る前からお腹いっぱいになっちゃってるんじゃない？ 意外とうぶねえ」

「な、何言ってるんですかっ！」

そう言って佳奈多は、大慌てて携帯電話を取りだし、スロットにメモリーカードを差し込んだ。カードの中身は動画ファイルが一つ、それを佳奈多は再生した。他の4人も後ろから覗き込む形で一緒に見始めた。映像には、森の中に立つ直枝理樹の姿が映っていた。

『佳奈多さん。僕は今、森の中にいるよ。そこで偶然見つけたんだ。これ、コケモモの木。英語だとクランベリー。そのまま食べるとすごく酸っぱいんだ。でもじっとかみしめるとほのかな甘みを感じられて。それが、まるで自分だけが知ってる小さな幸せみたいにも感じられて。コケモモってまるで、佳奈多さんみたいだなあ、って思うんだ』

佳奈多は携帯を閉じた。

「何言ってるんだか...」

「20年前のサントリーのCM？」

あーちゃん先輩が口を挟んだ。

「違います...と言うか私そのCM知らないです」

「あらそう」

「と言いますか...あーちゃん先輩が何故20年前のCMを知っているのか非常に疑問なのですが...」

美魚の疑問に葉留佳と小毬がうんうんと頷いた。

「え？ いや、それは...ほら、あれよ、再放送、再放送で見たの」

「CMの再放送なんて聞いた事無いですが...」

「え、そう？ やーねえ、この歳でもう記憶障害かしら」

それ以上は、もう誰も何も言わなかった。

「じゃあ、行くわよ」

妙にうれしそうな顔をしながら、佳奈多はパーティメンバーを急かした。メンバーは動こうとしなかった。

「待って。行くってどこに行くのよ」

あーちゃん先輩が苦情を申し立てた。

「愚問ですね。直枝の所に決まってるじゃないですか」

「はあ。いきなり直枝君の所に行くの？」

「直枝がコケモモ持って私を待ってるんです」

「...。」

佳奈多以外の4人が一斉に黙った。雰囲気を感じた佳奈多は、慌てて訂正した。

「直枝が捕まってるから助けに行くんです。大魔王棗恭介に捕まった直枝理樹を助けるのが、私達の目的じゃないですか」

「ああ、そういえばそうだったわね」

美魚が挙手して発言許可を求めた。

「ただ直枝さんを助け出すだけならいいのですが、大魔王棗恭介がそこにいるかもしれない、というか多分いますよ。どうするんです？」

「もちろん倒すわ」

「...そんなあっさり」
「あの、トレーニングとかレベル上げとか、大魔王倒すって行ったら普通そういうの積み重ねた上でやるものじゃないんですか？ 私らまだそういうの全然やってないんですけど...そういうの無しでいきなり魔王倒しに行くんデスカ？」
「そんなもの必要無いわ」
「必要無い。うーん、必要だと思うなあ...」
「そうかしら？」
「一般的には必要かと思われます...」
「一般的、ねえ」
佳奈多は他4人の顔を見渡してから、続けた。
「訓練しなければ目的を達成できない状況なら、勿論そうするわ。でも訓練無しでも出来る見込があるのなら、一度トライしてみた方が時間を無駄にしなくて済むんじゃないかしら？」
「まあ、出来る見込があるならね...で、大魔王棗恭介を倒す事は出来るの？」
「この顔ぶれなら出来ると思いますけど」
佳奈多の言葉を聞いて、5人は互いに顔を見合わせた。
「...では、ちょっと顔ぶれを整理してみましょうか」
美魚は黒板の前に立ち、上から順にメンバーの名前と職業を書き連ねていった。

名前	職業
二木佳奈多	勇者
神北小毬	魔法使い
あーちゃん先輩	権力者
西園美魚	アドベンチャーコンサルタント
三枝葉留佳	バッファオーバーフロー

書き終えた美魚は、チョークを持ったまま4人の方向に振り返った。
「...不思議な事ですが、私も行けそうな気がしてきました」
「確かに、他の目的ならともかく棗君を倒すのにはこれ以上無いという面子ね」
「よくわかりませんが、この5人は、テキトーに選んだように見えて実は大魔王棗恭介を倒すために選ばれし5人だったというわけデスネ！」
「え、ええ...勿論そのつもりで選んだわ」
「そうだったんだあ。やっぱり二木さんできる人だね、すごいすごい」
「わかって貰えたのなら、先ほどの話をご理解いただけるかしら？」
佳奈多は一同を見渡した。今度は誰も反対するものはいなかった。
「では、行きましょうか」
「待って。このメンバーで棗君倒せそうなのはわかったけど、だからってどこに行くというのよ」
「直枝の捕まっていそうなところですよ」
「だからどこよそれ」
「直枝の捕まっている場所は近くにコケモモが生えていると見て間違いないでしょう。だって直枝がそう言ってるんだもの。市内でコケモモが生えていそうな場所は4カ所程度だから、そんなに多くはないわよ」
「多くはないですが遠いんじゃないですか？ 仮に市域の端から端までだとかなりありますが...」
「それもそうね...手分けした方がいいかしら？ 5人いるんだし」
「でも、具体的にどこかまだ聞いてないですけど、バスで行けないところもあるんじゃないんですか？」
「そうね...森林公園はバスが出てるけど、丸歎山と箒中学校のあたりはバス停無いわね。ま、歩けばいいんじゃない？」
「丸歎山って確かバス停から5Kmくらいあるじゃないデスカ...」
「5Kmくらい歩きなさいよ」
「往復だと10Kmじゃないデスカ...体力はともかく気力が持ちませんヨ」
「気力がない？ 気力がないですって？ 何故？ 何故無いの？ 私は今すごく満ちあふれてるのに？ あなたと私に一体どんな差があるというの？」
「理樹君からビデオメールもらったか否かという差ですヨ」
「えっ！

「あなたは直枝さんから励ましのビデオメールもらってやる気十分でしょうけど、私たちはそれを横から覗き見してただけですし」

「そもそも私達宛じゃないしねえ...」

「見せつけられた方はむしろ負の感情でやる気削がれちゃったわよねえ」

「顔で笑って心で泣いて、という言葉の意味を辞書で引け、ってとこですヨ」

4人にやいのやいの言われた佳奈多はしよげた。

「ごめんなさい...」

「いや、そこまでしよげられるとなんかこっちが悪いみたいな気になるじゃないデスカ...」

「でも私、調子乗ってた。直枝を助けるためなら5Kmくらい歩けだなんて...」

「いや、ほんとにそこに理樹君が捕まってるなら5Kmくらい歩きますけどネ」

それを聞いた小毬が少し考えて、言った。

「やっぱりもう少し絞り込んだ方がいいんじゃないかな。あと、かな...二木さんはさっき、3カ所しか名前挙げなかったけど、全部で4カ所あるんだよね？ もう1カ所はどこ？」

「もう1カ所はその裏山よ」

佳奈多以外の4人が一瞬凍り付いた。

「裏山ってアンタ...だったら、まずそこ調べて違ったら他の場所探す検討すればいい話じゃないデスカ」

「本当にそうね...その通りだわ。私どうかしてた」

「二木さんはたぶん、みんなで裏山を調べた後で三枝さんの言ったとおりにするつもりだったのではないのでしょうか。手分けすることになったから話がおかしくなっただけで」

「うん、そう、その通り。西園さんありがとう」

「こんな事で姉の威厳が崩れるのは悲しいでしょうから...」

「え？ 今のってじゃあ、一方的に責め立てたりしたはるちゃんが悪者って事ですか？」

「まあ、そのあたりはお姉さんとよく話し合ってもらえばいいのですが。神北さんがもっと絞り込もうと提案しているのを無視しているのはいただけませんね」

「ううっ、面目ない...」

「謝罪と反省それに自己批判と今後の再発防止策を」

「あわ、私は別にそんな...美魚ちゃんはおはるちゃんがかわいそうだよ」

「え、えーっと、とにかく、もっと情報を集めて徒労をなくすことが肝要かと存じマス...具体的に情報を集める方法まで言わないと駄目デスカ？」

「駄目といえますか...三枝さんなら、追いつめればいい知恵の一つや二つ出てくると踏んでいたのですが...」

「美魚ちゃんが私をどういう人間と思っているのか時々わからなくなる...」

「ごめんなさい葉留佳、実は私もあまりよくわかってない...」

「うわ、ひどっ！ アンタ、そんなんでよく妹に変装とか出来ましたネ！」

「あれは...違うの、あれは...」

「はるちゃん、過去をほじくり返すようなことは駄目！」

議論は不毛な言い争いになりつつあった。これを傍観していたあーちゃん先輩は、ふと携帯をとりだし、誰かに向けてメールを打ち始めた。

「何してるんです？」

「んんー？ ま、ちょっと情報源に思い当たってね」

「え、私達があれだけ情報源を議論しても思いつかなかったのに、すごい、ねえこの人やっばりすごいよ！」

「そんな大したものでもないんだけどね...あとあんた達議論なんかしてなかったでしょ」

そう言ってあーちゃん先輩はメールを送信した。送信してしばらくすると、校舎の陰から現れた鈴が駆け寄ってきた。

「お呼びでしょうか姉上」

鈴はあーちゃん先輩にかしづいた。驚いた佳奈多は鈴を抱き起こそうとした。

「ちょっとあなた、何やってるの！」

「我が偉大なる姉上様に敬意と服従の意を示している。何かおかしいか？」

「誰にも懐かないことで有名なあなたがこんなことしてたらおかしいでしょう!？」

「それは間違いだ。悪意と偏見から来る誤解だ。あたしは以前から姉上様に懐いている」

「...そう、それは申し訳ないわ。いやでも服従って...それに敬意ならもっと他に示し方があるでしょう？」

「姉上様の使い魔として心さわしい敬意の示しかただと思ったのだが」

「...あなた何を言って...」

佳奈多はあーちゃん先輩に詰め寄った。

「ちょっとあーちゃん先輩、何やってるんですか！」

「何って、何が？」

「何がじゃないです！ 後輩に姉呼ばわりさせるに飽きたらず、使い魔扱いとか！」

「え？ 最近は後輩を使い魔にするのって普通じゃないの？」

「普通じゃないです...」

「でも妹や弟を子分にして町を闊歩するとか、よく子供がやるじゃない」

「うん、それはうちの兄もやってたな」

「私はやってません...」

「やってくれてもよかったんですけどネ」

「やらないわよ...」

「というよりこの方法使えば、表向き私をいじめてるように見せかけて一緒に遊ぶことが出来たじゃない！ お姉ちゃん何で気づかなかったの！」

「え？ それはその...ごめん」

「いや、ここはそんな素直に謝ってほしかったんじゃないんデスガ」

佳奈多と葉留佳の会話が妙な言い合いになりだしたのをよそに、あーちゃん先輩はしゃがみ込んで鈴に尋ねた。

「あなたのお兄ちゃんがどこにいるか知らない？」

「私のお兄ちゃんなどという生き物はこの世に存在しません。バカ兄貴のことですか？」

「...うん、バカ兄貴」

「バカ兄貴なら、裏山で秘密基地...じゃなかった、魔宮作ってます」

「魔宮？」

葉留佳と取っ組み合いになりかけていたところを小毬と美魚に制止されていた佳奈多が口を挟んだ。

「うん、魔王の宮殿だから魔宮なんだとか言ってた。なんのことかよーわからん」

「うん、まあ...知らないなら知らないままの方が幸せかもね」

「とにかく棗君...えっと大魔王だっけ？ の居場所はわかったでわけね。ほら、役に立ったでしょ？」

「まあ...役に立ったのは認めます」

「でかしたぞ我が忠実なるしもべ棗鈴、勇者様も満足しておられる。ほら、褒美の品だ」

「ありがたき幸せ」

鈴はあーちゃん先輩からモンペチを受け取った。

「もう行ってもよろしいでしょうか？ 早くこのモンペチを猫たちに配給したいので」

「相変わらず猫思いねえ」

「それもあります。最近猫のリーダーがモウタクトウに交代して猫達が造反有理とか叫ぶようになったので、反乱が起きないように配給は速やかに行わねばならないのです」

「それは大変。早く行ってきなさい」

「はっ」

鈴はモンペチを抱えて去っていった。

「棗先輩...じゃなかった大魔王恭介が裏山にいるって事は、理樹君が捕まってる場所も裏山で確定なんじゃないですか？」

「そうね、私もそう思うわ。まず裏山を探そうと思うんだけど、みんなはどうかしら？」

「いいと思います」

「むしろ何か不都合があるのでしょうか」

「異論は無いけど...なんだかあっさり解決しそうでつまらないわ」

「遊びでやってるんじゃないんです、あっさり解決した方がいいに決まっています」

「そうかなあ？ 楽しい事はずっと続いた方がいいと思うけど」

「はるちんその意見には大賛成デス！ 姉にもこの考え方を見習って欲しいものですヨ」

「そう...わかったわ、じゃあ、この作戦名を『第一次魔宮作戦』にしましょう」

「既に二回目があること確定ですか...」

「だって葉留佳がそう言うんだもの。あとあーちゃん先輩も」

「ずっと続いた方がいいとは言ったけど、二回目をやりたいとまでは言ってないわよ ？」

「じゃあ、『永遠の魔宮作戦』にでもすればいいんですか？」
「それってなんか辛いことばかりで楽しくなさそうだよ...」
「わかったわよ...じゃあ、ただの魔宮作戦でいいわね」
「ねえあーちゃん先輩...なんかあの人、どうあっても魔宮作戦って言葉使いたいみたいですケド」
「かなちゃんそういうの好きだから...あ、でも言ったらダメよ、ムキになって否定するから」
「聞こえてるんですけど」
「ありゃま」
「あーちゃん先輩は葉留佳に余計なこと言わないで下さい。葉留佳は黒板消しとして」
「妹の素朴な疑問を悪用して平然と雑用を押しつけるこの姉...いつか下克上してやるウ」
そう言いながら葉留佳はクリーナーを手に取り、黒板の前に立った。字を消そうとしたところで葉留佳の視線が自分の名前のところで止まり、手が止まった。
「あの...美魚ちゃん？ チョットいいですか？」
「なんででしょうか？」
「えっと、さっき見落としてしまったので少々言いづらいのデスガ...なんか私の職業がバッファオーバーフローになってるんですケド？」
「はあ。何か問題でも？」
「いや、問題というか...バッファオーバーフローって職業じゃないですよネ？」
「今更そんなこと言われても困るんですけど」
「えええ。今更というか、だって常識で考えてくださいよバッファオーバーフローは職業じゃないですヨ」
「あなたが常識とか言いますか」
「いや、...今そういうこと持ち出しますか？」
「そもそも、あなたがバッファオーバーフローということにしてくれと言うから、そういう扱いで5人目にしたんですよ？」
「ええ！？ いや、まさかそれを職業にされるなんて思わなくて...」
「だいたい、私に苦情を言われても困ります。文句があるならリーダーである二木さんに言ってください」
葉留佳は戸口で待っていた佳奈多に泣き付いた。
「お姉ちゃ〜ん、美魚ちゃんがいじめる...」
「ええ、聞いてたわよ。あなたが悪いわ」
「うわ、ひっど」
「だいたい、クドリャフカの所に行ったときに職業名も登録したんだから、何故その時に気づかなかったの？」
「はるちゃん、その時美魚ちゃんとなんか言い争いしてたから...」
佳奈多ははあと溜息をついた。
「しょうの無い子ね...変えたいのなら登録し直さないといけないから、職業名考えておきなさい」
「よおし、とびきりカッコイイ職業名考えてやるぞ...見ている美魚ちゃん！」
「はあ。見てるだけならかまいませんが」
佳奈多はやれやれと首を振った。その後ろから、ずっと聞いていたあーちゃん先輩が佳奈多の肩を叩いた。
「かなちゃん、アタシも職業名変えようと思うんだけど」
「そうですか」
「知りたい？」
「そうですね、登録し直さないといけないですし」
「愛天使アーマードあや、にしようかと思うんだけど」
「長すぎないですか？」
「...そういう反応して欲しかったんじゃないんだけどなあ」
「どういう反応して欲しかったんですか...」
「ねえ、早く行かないと日が暮れちゃわないかなあ？ 暗いとさすがに探せないと思うんだ」
「あ、そうね。行きましょう」
小毬に急かされて、佳奈多達は裏山に旅立った。

裏山に入った佳奈多は、一行を引き連れて裏道をどんどん歩いて行った。通常通る道を早々と外れて、獣道のようにになっている狭い通路を佳奈多が先導して進んでいった。

「あの、お姉ちゃん？　なんか目的地が既にわかっているかのようにどんどん先に進んでいきますけど...こっちでいいんですか？」

「棗先輩が秘密基地を作るのってだいたいこの辺りなの。パターンがあるから」

「詳しいのねかなちゃん...もしかして棗君に興味があるの？」

「裏山を散策しているとよく見かけるだけです」

「よく見かけるんじゃない秘密基地でも何でも無いですネ」

「ほら、今は秘密基地じゃなくて、魔宮だから」

「そうだったわね...ええと、大魔王棗恭介が魔宮を作るのってだいたいこの辺りなの。パターンがあるから」

「二木さん、別に言い直さなくていいですよ...？」

「そうなの？　こういうのってちゃんと言わないといけないかと思って...」

そうこうしているうちに、一行はコケモモの木が生えている場所に着いた。そこからさらに少し進むと、開けた場所にブルーシートで覆われたテントとおぼしきものが設営されているのを発見した。

「あれが...魔宮...！」

葉留佳がそう言った他は、誰も言葉を発しなかった。しばらくそこに立ちすくんでいた。そよ風が吹き、小鳥が数羽飛んでいった。遠くから季節はずれのわらび餅売りの声が聞こえてきて、一行は我に返った。

「とりあえず中に入ってみましょうか」

「気をつけた方がいいよ」

「わかってるわ。私が先に行くから、みんなもついてきて」

大魔王棗恭介は、魔宮の中でくつろぎのひとときを過ごしていた。

「雑誌の名前が『革命』だからてっきり政治雑誌かと思ったら漫画雑誌だったぜ...まあわかって買ったんだけどな」

よくわからないことをいいながら、魔宮に持ち込んだベッドに寝そべて漫画を読んでいた。そこに入り口にに取り付けている鈴が鳴る音がしたので、恭介は顔を上げた。

「おいおい誰だ？　入るときは合い言葉を言えとっておいただろう？」

「済みません。合い言葉を知らないものですから」

恭介は慌てて飛び起きた。

「お前、二木佳奈多！　なんだお前、何でこんなところにいる！」

「いたらいけませんか？」

「いかんわっ。男の子の秘密でものぞきに來たのかっ」

「そんなものに興味はありません」

「アタシはあるけどねえ」

佳奈多の後ろに隠れていたあーちゃん先輩が顔を覗かせ、そして恭介の表情が青ざめた。

「げっ...」

「げって何よ。失礼な子ねー」

恭介は何かの精神的ショックに必死に耐えているかのような表情をしていたが、やがて多少は立ち直ったのか、言葉を発し始めた。

「おい、お前ら...何いきなり來てんだよ。非常識だと思わないのか」

「思いません」

「事前に電話ぐらいしろよっ」

「事前に魔王に電話する勇者なんて聞いたことありません」

「魔王？　魔王だと？」

恭介は何かを思い出しかけていて、しかしなかなか言葉が出てこない様子だった。見かねた佳奈多が自分から用件を伝えた。

「直枝理樹を返してもらいに來ました、大魔王棗恭介」

「理樹を...？　ああ、ああ、あの話か」

恭介は今思い出したというふうに相槌を打っていた。

「いや、何だ。こんな早く来ると思ってなかったのな。何の準備もしてなかった」

「だったら準備中の札でもかけておくべきでは無いでしょうカ」

「うむ。それもそうだな」

頷いた恭介は、魔宮の隅にあるはこの中をあさり始め、木製の札を取り出して、それを手に持ったまま外に出た。佳奈多達もつられて外に出た。「準備中」と書かれた札が入り口にかけられていた。

「そういうわけだ。まだ準備中だから帰ってくれないか？」

「帰れと言われて帰る勇者がいると思いますか？」

「まあ、それもそうだな。だったらこういうのはどうだろう。見逃してくれれば、この秘密基地...いや違った、魔宮の半分をやろう」

「いりません。私は遊びに来たわけでは無いので」

「そんなもの誰が欲しがりますカ」

「マジかよいらないのかよ」

「世界の半分ならまだしも、魔宮の半分とか言われてもねえ」

「しかもお城みたいな建物じゃなくて、これ、テントだし」

「テントとかいうなっ。それなりに苦労して作ったんだっ。だいたい何だお前らっ、いきなりやってきて言いたい放題」

「恭介さん落ち着いて下さい」

美魚になだめられて恭介は少し落ち着きを取り戻した。その間に魔宮の中に戻っていた小毬が、お茶を用意していた。

「水出しですけど、お茶が入りましたよ。どうですか〜？」

「いや、お前...なに人んちで勝手にお茶入れてるんだよ...」

「はわわ!? い、いけませんでしたかっ!？」

「いやもういいよ...」

恭介はその辺に座り込み、湯飲みを手にとってお茶を飲んだ。佳奈多達も適当に座ってお茶を飲んでいた。

「大魔王の拠点でゆっくりお茶飲んでる勇者ご一行ってのもどうなんですかネ...」

「ああ、そういやそうだ。お前ら、用が無いなら帰れ。さっきも言ったようにこっちはまだ準備中なんだ」

「用ならあります。直枝理樹を返してください」

「返してください...か」

「な、なんですか」

「断る！ 理樹はお前には渡さん！」

「理樹君は渡さんじゃなくて直枝さんデスヨ」

「三枝さん...今そういう茶々を入れるのは正直どうかと...」

「美魚ちゃんがニヤついてたからわざと言ったんですヨ」

美魚と葉留佳が言い合っているのをよそに、佳奈多は再び恭介に要求を告げた。

「直枝を返してください」

「お前のものじゃないだろう」

「あなたのものでもありません」

「理樹は俺が育てた」

「だからこそいい加減あなたから自立すべきだと思います」

「お前が代わりに保護したいだけなんじゃないのか」

「保護しますよ。風紀委員ですから」

「そうじゃない、個人的に保護したいんじゃないのかって話だ」

「個人的に保護って...そんないやらしいこと考えてないわ...」

「保護がいやらしいという発想は無かったな...やはりお前のような女に理樹は渡せない」

「違うわ、私はただ...」

「ちょっと。何親権争いしてる離婚夫婦みたいな会話してるのよ」

あーちゃん先輩が嫉妬気味に口を挟んだことで、佳奈多も恭介も我に返った。

「つい熱くなっちゃったぜ...」

「そうですね...でも直枝は返して貰いますよ」

「まだ言うか」

「これが仕事ですから、それに幼なじみだろうがなんだろうが、生徒が連れ去られたとあっては

「...は...」

「そうか...しかし、そう言われてもここにはいないしな」

「確かに、ここにいる様子はないですが...一応確認してみます」

そう言って佳奈多は、漫画本の山をどかしたりベッドの下を覗き込んだり炊飯器の蓋を開けたりして、理樹がいないことを確認した。

「本当にいないようですね」

「うん、いや、あのな。わざわざ確認しなくても、炊飯器の中に理樹がいる訳ないだろう...」

「電気も来てないのに炊飯器を何に使ってるのか興味があったんです」

「自転車こいでご飯炊くつもりだったんだよっ！」

佳奈多は呆れた表情で、やれやれとでも言うように手を広げた。ずっと苦笑していた小毬が佳奈多に話しかけた。

「理樹君いないならどうするの？他を探す？」

「そうね、素直に直枝の居所を吐く大魔王棗恭介とも思えないし。でも」

佳奈多は魔宮の中をぐるりと見渡した。

「ここは撤去しておかないとね」

「なに...？」

恭介の顔が歪んだ。

「今、なんて言った」

「ここは撤去する、と言ったんです。設営許可とってないですよ？」

「秘密基地作るのにいちいち許可なんか取るわけ無いだろう...」

「そうですか。無許可なら撤去します」

「これ作るのにどれだけ時間かかったと思ってるんだよっ！」

「知りません。あなたこそ、いつも勝手に作られた違法構造物を撤去するのに私の時間がどれだけ費やされてると思ってるんですか」

「作っても作っても毎回いつの間にか撤去されてるの、お前の仕業だったのか...ッ！」

「仕事ですの」

「仕事というか、これはもはやイジメだぞっ！それが勇者のすることか！」

「これは特任風紀委員の仕事ですので。勇者とか関係なく」

「権力か！ 権力を笠に着るといふのか！ そうだよな、勇者ってのはいつもそうだ。所詮勇者などという存在は権力の走狗でしかない！」

「そうですか。ではお望み通り、権力に相応しく強制執行を行います」

そう言って佳奈多は携帯を取りだし、どこかに電話をかけた。会話を終えた佳奈多は恭介の方に振り返り、宣告した。

「風紀委員会の執行許可は下りました。これより違法構築物の撤去を行いますので、退去してください」

「待て、俺は承諾していない！」

「異議申し立ては風紀委員会審判部会に行ってください。そこでの審決が不満な場合は司法委員会に提訴することも出来ます。認められるかはともかく...何にしる、私に文句を言っても決定は覆りませんよ」

「この鬼！ 官僚主義者！ お前は勇者なんかじゃない、ただの悪魔だ！」

「大魔王に悪魔呼ばわりされるとは思いませんでした...」

「まったく、見苦しいわねこの子は」

そう言ってあーちゃん先輩が恭介の肩を掴み、外に引っ張り出そうとした。恭介は抵抗したので、なかなか動かせなかった。佳奈多が無言で近づいてもう片方の脇を抱え、葉留佳と小毬もそれに続いてそれぞれ右足と左足を持ち上げた。恭介は宙に浮いた。女の子4人に抱えられている恭介の姿を美魚が写真に撮った。

「おい、何の辱めだこれは！」

「辱めではありません、撤去の邪魔だからどいて貰っているだけです」

「写真に撮る事無いだろう！」

「...訴訟になったときの証拠になりますので」

「その理由今思いついただろう！？」

恭介は抵抗虚しく魔宮の外に連れ出されてしまった。

「じゃあ撤去にかかるわよ。柱は竹だし、倒れても中の物はそのままで問題無いわね。まずビニールシートを外したいから、葉留佳と神北さん、西園さんは手伝って。あーちゃん先輩はそのまま大魔王棗恭介を押さえておいて下さい」

「りよおかい」
「おい、待て！」

恭介はあーちゃん先輩に取り押さえられていて動けなかった。佳奈多と他3人は、魔宮を覆う青い幕をはずすため、4隅に散らばって作業を始めた。あーちゃん先輩は恭介の服の中に手を入れていた。

「おい、何をする」
「役得役得～」
「お前、ふざけんな...」
「じゃあ真剣に触るわね」
「そういう意味じゃねえ...」
「どうして欲しいのよ」
「だから、触るなって...」
「かなちゃんに恭介押さえとけて言われてるしなあ。それは無理」
「だったらせめて猥褻行為はやめてくれ...」
「んまっ。猥褻行為ですって！ アタシそんなつもりないのに、恭介はそういう気分になってた
って言うのっ！？ んもう、きよお～すけ～のス～ケ～ベ～♪」

佳奈多と葉留佳と小毬と美魚が、一斉に恭介の方を向いた。

「違う！ 俺はスケベなんかじゃ...」
佳奈多と葉留佳と小毬と美魚は、何も言わず作業に戻った。
「待て！ お前ら誤解している！ 話を聞いてくれ！」
「作業の邪魔しちゃだめよ恭介」
「作業より俺の名誉の方が大事だっ」
「とっくにホモだのシスコンだの言われてるのに、今更なにが名誉よ」
「お前...どこまで俺の心をくじくんだ...」

恭介が泣いている間に、佳奈多達は解体作業を終えていた。
「それじゃあ、葉留佳と西園さんはこっち来て。神北さん、一緒に引っ張るわよ」
「おっけー。せーの、っ！」

佳奈多と小毬がビニールシートを引っ張り、シートが引きずり下ろされると共に引っかかっていた竹の柱が倒れていった。その光景を恭介は眼を見開いて見続けていた。大した音はしなかったが、恭介の耳にはそれが轟音を上げて崩れていくように見えた。心の轟音を打ち消すかのように、恭介は叫んだ。

「うあああああああああっっっ！！！！！！」

恭介の叫びをよそに、佳奈多は後片付けの指示をしながら自らも魔宮の残骸のチェックをしていた。

「これも備品...これも備品じゃないの。全く、どれだけ勝手に持ち出してるのよ...」
「ビニールシート、畳み終わりました」
「ありがとう。それはそのまま下に持っていくから...一人で持てそうならそのままおりていいわよ」

「他にも荷物いっぱいあるよ？」
「私物はいいわ、学校の備品だけ持って行きましょう」
「それでも結構あるわねえ」
「そうですね...仕方ありません、持てるだけ持って行くことにしましょう」

佳奈多達は備品を選別し、それぞれ持てる物を携えて、山を下りていった。恭介は、魔宮跡の傍らでずっと泣き崩れていた。そこに、美魚が戻って来て、そっとビニールシートを差し出した。

「西園...もしかして、秘密基地の再建を手伝ってくれるのか？」

美魚はゆっくりと首を振った。
「恭介さんの私物...特に漫画本、そのままだと雨が降ったとき濡れてしまいますから。今日中に一人で持ち出すのは無理でしょう？」

「...」
「漫画といえど、本が傷むのは悲しいですから。それだけです。ビニールシートはちゃんと返しておいて下さいね。私が怒られてしまいますから」

そう言って美魚は、再び去って行った。恭介はその後ろ姿を見送った後、再び泣き崩れた。

第一次魔宮作戦 終了。

次回

大魔王棗恭介の魔宮を破壊した勇者佳奈多、しかしそれは数ある魔宮のうちの一つでしかなかった。そして何より、理樹を救出できていない。大魔王討伐のため再び裏山に向かおうとする佳奈多達一行の前に、恭介の手下が立ちふさがる。

次回 勇者佳奈多と百万円の壺、第四話「三本の矢さんなのです」

勇者佳奈多と百万円の壺

第四話 三本の矢さんなのです

A組の教室で三枝葉留佳は、あやとりを披露していた。ぎこちない手つきで対して巧くも無かったが、だやめる事は無かった。やめることができなかつた。誰かにもういいよと言って貰えるまで止められない自己制御の効かない状態に陥っていた。周りで見えていた相川や有月はと言えば、それを止めるようなことはしなかつた。決して意地悪などではなく、もうやめろなどという普通ならば酷になる台詞を言えないだけだつた。優しさと後ろめたさが、負のスパイラルを招いていた。

二木佳奈多はと言えば、自分の席からずっとその様子を見守っていた。佳奈多は、葉留佳が何を望んでいるかわかっていた。しかしその一方で、自分が口を出せば葉留佳は逆に意地になってあやとりをやめようとしなくなり、逆効果であるということも承知していた。だから口を出せなかつた。

誰でもいい、誰か第三者の介入を。教室中がそんな空気に溢れていた。

そして天使は現れた。

「佳奈多さん、勤務表を提出して下さい」

能美クドリャフカが佳奈多の脇に立っていた。それまで教室を包んでいた空気と比べるとあまりに場違いな発言だったため、全員の視線がクドに集まった。クドは想定外の注目を浴びて狼狽した。

「あ、あの、私何かおかしいことを言ったでしょうか...？」

どちらかというとおかしいことである、何故ならここはどこかの事業所では無く教室なのだから。そう思った者もいたが、しかしそれを指摘することはなかつた。おかしいのは自分の方なのかもしれないのだから。

「ああごめんなさい勤務表ね忘れていたわ、葉留佳もこっちに来て書きなさい」

「やははしょうがないなアじゃあ続きはまた今度ということで」

葉留佳は好機到来とばかりに佳奈多とクドの元に移動した。

「神北さんと西園さんとあーちゃん先輩はここにいないけど、私が代わりに書けば良いのかしら？」

「はい、代わりにかまわないですよ」

「えっ、じゃあ私の分も代わりに書いてよ」

「そう。自分で書きたくないというのならば、さっきまでいたあの場所に戻ってさっきまでやっていたことを続きから再開する事ね。私はかまわないわよ？」

「いいえ、是非自分で書かせてくだサイ」

そんなやりとりをしている間に、佳奈多は自分の文を書き終え、2人目の分に取りかかっていた。

「書き終わりましたか。ちょっと見せて下さい」

クドはそう言って、佳奈多の記入した大魔王棗恭介討伐任務の勤務表を読み始めた。

「魔宮解体（30分）、とありますけど...？」

「ああ、それね。棗先輩...大魔王棗恭介が勝手に秘密基地、じゃなかつた魔宮を作ってたから、壊してきたわ」

「えっ。じゃあ大魔王棗恭介は...？」

「その場で前のめりに倒れ込んでたわよ」

「ガーン！ もう大魔王倒してしまつたですかっ!？」

「えっ？ いや、倒したというか...。まあかなりショックは受けてたみたいだけど」

「そうですか。それで恭介さん今日学校に来ていないのですね...」

「えっ、そうなの？」

「はい。ですので、きっと佳奈多さんが何かやったのだらうと思って確認がてら来てみたのですが」

「何かやまつたって...そんな悪い事したみたいな」

「あっ、あっ、そういう意味では無いのです。ただお仕事の方に何か進展があつたのかな、と」

「仕事としては、魔宮を一つ壊しただけで、棗先輩...大魔王棗恭介には何も手出ししてないわ」

「うん、確かにお姉ちゃんは何もしてないデスネ」
「そうなのですか...じゃありキが恭介さん...大魔王棗恭介の所にいるのも、純粋な看病というわけでは無いのですね...」
「なんですって!？」
佳奈多が大声を出して机に手をついて席を立ったため、クドも葉留佳も驚いた表情で暫し無言になってしまった。佳奈多は気まずそうな顔をして、自分を落ち着かせるために深呼吸を一つした。
「えっと。直枝が、大魔王棗恭介の所にいるですって？」
「はい。直枝さんも教室にいなかったので電話してみたら、『よくわからないけど恭介が寝込んでしまったから看病してるよ』と...」
「それは罨デスネ」
「罨ですか？」
「『看病なんだから問題なし』と勇者を安心させて手出しさせないようにして、その間に理樹君を食っちまおうという大魔王棗恭介の狡猾な陰謀デスヨ！」
「な、なんて卑劣なっ！」
「そうですヨ！ 卑劣で卑猥な行為が行われているのデス！」
「許しがたき大魔王棗恭介！」
「今すぐ助けに行くべきデスヨお姉ちゃん...いや勇者佳奈多！」
クドと葉留佳に割と真剣に詰め寄せられた佳奈多は、やれやれと言うように首を振った後、返答した。
「わかったわ。放課後にみんなで集まって対策を練りましょう。今すぐは無理」
「わかりましたっ。小毬さんと西園さんとあーちゃん先輩にもお知らせしておきますっ」
クドは教室を飛び出していった。
「...クドリャフカ、かなり真剣だったわね」
「そういうお姉ちゃんはよく落ち着いていられますネ」
「え？ いやだって私は、直枝のこと信じてるし」
葉留佳は、ケツとでも言いたそうな表情をして、そのまま黙ってしまった。

放課後。空き教室に、佳奈多・美魚・小毬・あーちゃん先輩・葉留佳・クドの6人が集まっていた。
「能美さんは依頼主の代理？ のはずだけど、ここに集まってていいの？」
「緊急事態ですゆえっ」
興奮しているのか、クドの口調が少しおかしくなっていた。
「...話はだいたい聞きましたが...直枝さんが棗先輩...大魔王棗恭介の看病をしていることが、そんなにいけないことなのですか？」
「いけないことなのですっ！」
「いかがわしいことしてるかもしれないんですヨ!？」
「それはわかります、でも何故それがいけないことなんですか？」
「学校休んでそういう事してるってのと、直枝君はかなちゃんの恋人だからそういう事するのは浮気になる、って所じゃなかしら」
「かなちゃんって呼ばないで下さい、...それと...いえなんでもないです」
「えっとねえ、看病って言ってるのにどうしてそういう発想になるのかが、わたしにはよくわからないなあ...」
「たかが寝込んだ程度で学校休んで丸1日看病してるという事自体既に異常なんですヨ！」
「う〜ん...まあ、それはそうかも」
「きっと異常な事してるんですヨ！」
「ダビデ王の息子のようハート型の菓子とか作らせてるのですよ！」
「そもそも」
佳奈多が、興奮気味のクドをなだめるように話しかけた。
「大魔王棗恭介は何故寝込んでるのかしら？ 確かに魔宮を破壊したけど、それはいつも私がやってるのとそう変わらないはずなのよね」
「私も、私なりに気を遣ったつもりだったのですが...」
「...ほんとに寝込んでるのかしら」
「ほら、やっぱり怪しいデスヨ！」

「現地に行って確認して見た方が良くないかしら？」

「そうね。どちらにしても、直枝は一度救出しないとイケないし。行きましょうか」

勇者一行は大魔王棗恭介が眠る場所へと旅だった。

男子寮の看板は、大魔空亜空間魔宮城という名前に書き換えられていた。入り口では、井ノ原真人が壁により掛かって腕組みをしながら佳奈多達を待っていた。

「待ってたぜ勇者さんよ」

「別にあなたと待ち合わせをした覚えは無いのだけど。それとも何、女の子を待ち伏せ？ いい趣味してるわね、裁判所に提訴して半径50m以内に近づけないようにして貰おうかしら？」

「普通に用があるから待ってただけだよ！ そんなストーカーみたいに言わないでくれよ！」

「じゃあ勿体ぶらずにその要件をさっさと行って頂戴」

「あ、いや、そんな改まって言えと言われると大したことじゃ無いんですが...えっと、ここは通しません」

「何故？」

「大魔王様に、えっとなんだっけ、我が目覚めの時まで何人たりともここを通すなかれ、だっけか、そう言われたから」

「宅配便が来ても？」

「オレが受け取れと言われた」

「宅配ピザでも？ 代金は？」

「半分食っていいから立て替えておけと言われた」

「ボールが中に入ったから取らせてくれと言われたら？」

「遺失物として警察に届けろと言えと言われた」

「隙が無いわね...」

「いや、どう考えても隙だらけでショ！？」

「とにかく。あんた達を通すわけにはいかねえ。どうしても通りたきゃオレを倒してからいきな」

真人は入り口に立ち塞がり、その巨体で佳奈多達の通り道を完全に塞いだ。

「クド公なら、隙間から抜けられそうじゃないですか？」

「抜けてその後どうするのです？」

「それは勿論、色仕掛けで倒すのさッ！」

「葉留佳さん。私に仕掛けられるような色が無いことを承知で、そのようなことを言っているのですか？」

「怖っ！ クド公怖っ！ 目が据わってるよ！」

「ですが、隙間から抜けるという考え自体はそんなに悪くないかも知れません。抜けた人だけ先に行って、様子を見てくればいいのですから」

「おお、それぞれ。私もそれが言いたかったのデスヨ」

それを聞いていた真人は、ごろりと寝そべって下の方の隙間を塞いだ。

「どうだい。これで隙間から抜けることはできないだろう」

「あんたバカですか。それだと上ががら空きなんだし、跨いで通れば済む話じゃ無いですか。ねえ？」

葉留佳は一同に同意を求めた。しかし誰も何も言わず、服の端をつまんだりしているばかりだった。佳奈多が呆れたように言った。

「葉留佳。あなたは、スカート姿のままであの男の上を跨いで通るつもりなの？」

「えっ」

葉留佳は慌ててスカートを押さえた。

「井ノ原君のスケベ！ ヘンタイ！ ドヘンタイ！ ローアングルマニア！ そんな人だと思わなかった！！！」

「ちょっと待て何勝手な事言ってるんだ。オレはただ、空でも飛ばなきゃ上の方は通れないから、下だけ塞いでおけば大丈夫、って思っただけだよ！」

「何故そんな思考に...」

「と、とにかくだ。これでお前らはここを通れない。通りたければオレを倒すしかねえぜ」

「もう倒れてますけど？」

「自分で倒れただけでお前らに倒されたわけじゃ無いからいいんだよ！」
「どうするの？ いろいろ屁理屈こねてるけど、アタシらが通れないのは事実なわけだし」
「倒された、と納得させるしか無いようね...」
「お姉ちゃんの容赦なき罵倒で精神的にブツ倒す、という方向でどうでしょうカ？」
「うーん。言葉で倒してもあの場で茫然自失となって弁慶の如く動かなくなるだけじゃないかな...」

「厄介な子ねー」
「どうだい風紀委員長さん...いや今は特任風紀委員だっけか？ いや勇者か、まあなんでもいいや。あんたは、しょっちゅう理樹を押し倒してるみてえだが、どうだい、このオレは簡単には倒せないだろう？」

「な...何を言い出すのあなたっ！」
「ちょっと、今の話どういう事デスカ!？」
「お二人はあくまで健全な関係だと思って見守っていたのにっ！」
「かなちゃんったら...」
「大魔王棗恭介のことをどうこう言っている場合では無くなりますね...」

「ち、違うのっ！ 違うのよ...」
勇者一行が仲間割れを起こしたかの如く口論を始めた姿を見て、真人はほくそ笑んだ。
「所詮はその程度の結束力か...。なあ勇者さんよ、仲間を率いるなんて無理なことは諦めて、いっそ一人でオレや大魔王を倒す訓練でもした方が良くねえか？」

「それは違うよ井ノ原君」
それまで口論をなだめるのに徹していた小毬が、真人の話を聞いてずいと前に歩み出た。

「神北さん...」
「いいから、任せて」
小毬は真人の前にまで歩み寄って、語り始めた。
「井ノ原君。毛利元就と三本の矢を知ってますか？」
「いや、しらねえ」
「ではどういう話か実践してみましょう。ここに、矢があります」

小毬は一本の矢を真人に渡した。
「折ってみてください」
「これ弓道部のだろ？ 折っていいのか」
「古式さんから古くなって処分する物を譲り受けました。大丈夫、折ってみてください」
「あの子いつの間に...」

真人は矢をへし折った。
「折れたぜ」
「では、今度は2本同時に折ってください」

小毬は矢を2本真人に渡した。
真人は矢をへし折った。
「折れたぜ」

「では、今度は3本同時に折ってください」
小毬は矢を3本真人に渡した。
真人は矢をへし折った。

「折れたぜ」
「うわあ。あいつ、矢と一緒に話の腰までへし折りやがりましたヨ」
「アベノミクス並みに脆い矢だったのかしらねえ」
「あっちはただ3本目...というか1本目の矢が用意してなかっただけだし」
「神北さん、どうするつもりでしょうか」

小毬は動じていなかった。
「井ノ原君。その矢は、どうして折れたと思いますか？」
「え？ どうしてって、それはオレが力を入れたから...」
「その通り。井ノ原君の筋肉が、矢を折ってしまったのです」
「はは、その通り。オレの鍛え抜いた筋肉なら、矢の3本や5本折るなんてなんて事無いぜ」
「では、どこの筋肉ですか？」

「どこの筋肉...か。いいことを訊いてくれるぜ。素人はここで腕の筋肉って答えるんだけどな、こういうときには背筋も結構使うんだ。あと腰回りの筋肉も結構重要だな」
「はい。ではその筋肉のどれか一つでも欠けたら、どうなりますか？」
「ん？ そりゃあれだな。他の筋肉に異常な負荷がかかっちゃうから。最悪筋断裂とかになりか

ねないな。うん、こういうのはバランスよく鍛えないとダメなんだぜ」
「そうです。どれか一つだけではダメなんです」
小毬は一呼吸置いて、真人をじっと見た。
「こういうお話なんです。わかりましたか？」
「あ、ああ。目立つとこだけ鍛えてたんじゃダメって話だよな」
「二木さんも。一人で何でも出来る勇者さんですけど、結束力をないがしろにしてるわけじゃないのです。喧嘩してるように見えてもちゃんとみんなのことを気遣ってくれるし、ほんとはなかよしさんなのです。だからわたしも、二木さんのことをかなちゃんと呼んでいいのです」
「なんかどさくさに紛れて呼び名を変更されかかってますけど、いいんですか？」
「...今この状況で口を差し挟めるわけ無いじゃない...」
「いいじゃない、いい加減受け入れたら？」
外野をよそに、真人は小毬の言葉を聞いて感涙にむせんでいた。
「チクショウ...オレは、なんてバカだったんだ...。筋肉をひとりぼっち扱いするような、それと同じようなことをオレは言っちゃってたなんて...ごめんよ、すまねえよ筋肉...」
「大丈夫。初めは誰でも筋力が無いんだよ？ 筋肉は助け合って成長していくんだよ？」
「うおおおお、なんていい台詞だ...！」
「だから。井ノ原君も私達のこと、助けてくれないかな？」
「ああ、オレの筋肉を存分に役立ててくれ！」
「うん、じゃあね、大魔王棗恭介の所に案内して」
「ああいいぜ。オレの筋肉の力でどこへでも連れてってやる。さあ乗りな」
真人は四つん這いになった。
「乗っていいって」
「...さすがにそれは遠慮しておくわ」
「情け深い勇者様だ...さっきは酷い事言っただけで悪かったな」
「うん、まあ、あなたがそう思いたいのなら別にそれでいいわ...」
真人は普通に勇者一行を大魔王棗恭介の部屋に案内した。

階段を上る途中で、真人の携帯が鳴った。
「おう、理樹か。今から勇者一行をそっちに連れて行くから、恭介にもそう伝えて...いや、ただの見舞いみたいなもんだって、勇者様は慈悲深いからそんなことしねえって大丈夫だって」
「...何の話してるんでしょうね」
「病人の部屋で暴れたりしないとか、そういう心配なんじゃないの？ 普通に」
「はるちんいくら何でも病人に部屋でそんなことしませんヨ」
「アタシもそこまで馬鹿な女じゃないわ」
「誰のことを言っているのかちゃんと自覚があるなら、まあいいわ」
「チクショウ！ 私は自覚した上で行動する女になってやる！！！」
そんな葉留佳を横目で見ながら、真人が携帯を顔から離れた。
「ええと、全部で何人いる？」
「数えればわかるでしょう、あなたも入れて7人よ」
「そんなにいるのかよ...」
真人は再び携帯を顔に当て、理樹との会話を再開した。
「ええと、7人。誰と誰がいるか？ ああ、まずは、お前のことが大好きでたまらない二木佳奈多に」
佳奈多は真人から携帯を取り上げた。
「俺の携帯返してくれよう...」
佳奈多は真人を無視して、自分で理樹と話し始めた。
「直枝？ そう、私よ。さっきの馬鹿の発言は、その、気にしないで。うん、棗恭介がどういう状態になってるのか、一応確認しておきたいの。...ええそうよ、もちろん勇者として。何か文句ある？ ああそう、そうなの、ほんとに寝込んではいいるのね。...ええそっちに行くわ。あなたを信じていないわけではないの、一応自分の目で状況を確認しておかないとね」
佳奈多は一瞬携帯を顔から離し、そして持ち替えた
「どうかしたの？」
「なんか、『本当は早舞いを受け入れる気分などでは無いが、二木佳奈多が本気で心配してい

「...さあ、それこそが、この世界で生きていくための唯一の方法だ。『...というのなら、棗恭介の王者の矜持にかけて敢えて見舞いを受け入れてやってもいい』と

か言ってるらしいわ」

「元気そうね、安心したわ」

佳奈多は再び理樹と話し始めた。
「今日はお見舞いということでもいいわよ。え？ 私の他にいる人？ ここにいるのは...まず葉留佳でしょ、西園さんに、クドリャフカ、神北さん、ああ井ノ原真人も入るわね。あと、あーちゃん先輩」

理樹が後ろにいる誰かと話している様子が、佳奈多の耳に伝わってきた。次いで、物が落ちる音何かが崩れる音ぶつかる音怒号叫び声そういったいろんな音が、携帯の電波を通じて佳奈多の耳に入ってきた。

そして電話は切れた。

「どうかしたの？」

「...何かあったみたい」

「何かというと...何でしょうか」

「美魚ちゃんが期待するようなものでは無いと思いますヨ」

「騒がしい音がして電話が切れたから...良くないことが起きた気がするわ」

佳奈多は携帯をポケットにしまい込み、早足で歩きだした。

「佳奈多さん待ってください」

「緊急事態なの。急いで行く必要があるわ」

「そうではなくて。井ノ原さんが携帯返してって泣いてます」

佳奈多は踵を返し早足で真人の元に戻り無言で真人の携帯を突き出した。

「おお、おお、よく返ってきてくれた我が愛しの理樹と繋がる携帯よ」

「お姉ちゃん、わざと間違えましたネ？」

「うるさい」

佳奈多達勇者一行は恭介の部屋の前に立った。全員が自然に目を合わせ、佳奈多は真人を目で促した。真人はドアを数回叩いた。反応はなかった。

「理樹、オレだぜ。...恭介でもいいぞ、いるなら返事してくれ」

返事はなかった。

「...まずいぜ、こりゃ」

「ドアは鍵がかかっているわね」

「...踏み込まれたらまずいことでもしてるのでしょうか。二人で」

一同は顔を見合わせた。

「ぶち破りまショウ！」

「ぶち破っちゃえー！」

「ぶち破るのです！」

煽られた真人は佳奈多の顔を見た。佳奈多は頷いた。

「もしかしたら人命に関わることも知れないし。後始末は私がするから、遠慮無くやりなさい」

「オーケー、じゃあ遠慮無く」

真人はドアノブを破壊した。佳奈多は相田アナに手を差し込んでドアを開き、部屋の中に飛び込んだ。

「直枝っ！」

理樹はいなかった。

「誰もいませんネ」

「窓が開いてる...まさかあそこから逃げたのかしら」

「書き置きがあるみたいだよ？」

小毬が机の上に残されていた紙を手に取り、一同は一斉に覗き込むようにしてそれを見た。

【探さないでください 棗恭介】

「...リキは？」

「いっしょに連れて行かれたんじゃないかなあ」

「...」

「駆け落ち...という事ですか？」

「理樹姫は再び大魔王棗恭介に連れ去られた、ということじゃない？」

佳奈多は、無言で肩をふるわせていた。

「棗...恭介...！」

佳奈多の携帯が鳴ったのは、それからしばらくしてからだった。

次回

再び理樹と引き裂かれてしまった勇者佳奈多。理樹を連れ去った大魔王棗恭介は拠点に自らの手勢を集めて、勇者への反攻を開始する。大魔王棗恭介の人望の前に窮地に立たされた勇者佳奈多は、より強力な援軍を求めて東方の地へと赴いた。

次回 勇者佳奈多と百万円の壺、第五話「東の魔王」

二木佳奈多が現場に到着したときには、山道の入り口は赤い腕章をつけた風紀委員で固められていた。山側ではその進路を阻むように一般生徒数名が陣取っている。「決起」「棗恭介」等と書かれた、即席とおぼしきのぼり旗まで立っている。

「これは...」

佳奈多の後に付いてきた葉留佳が息をのんだ。同じくついてきた5人も、等しく言葉を失っている。佳奈多の姿を認めた現・風紀委員長が、佳奈多の元に駆け寄ってくる。

「よく来て下さいました。我々では到底対処できる事態では無く...」

「ねえ、これはどういうこと？」

現風紀委員長と話をしている佳奈多の後ろから、あーちゃん先輩が顔を覗かせて問いかけた。その後ろにいる一同も、無言で頷きながら説明を求めている。佳奈多はそれを理解して、現風紀委員長に説明を促した。

「私は電話で簡単に説明を受けたけど...改めてどういう状況なのか、説明して貰えないかしら？」

「直接の原因はわかりませんが、棗恭介が直枝理樹を連れて裏山の中にある自分の陣地に立てこもり、腹心の何名かに、解放のために行動を起こせ、というような指令を送ったようです。それが一般生徒の間にも伝わり、従前から棗恭介にシンパシーを抱いていた生徒達が続々と裏山に集結し、一部生徒が先鋭化して決起を主張し始め、それを受けて棗恭介が解放区の設立を宣言した...のがつい20分前の話です。我々が到着したのはその直後だったので、既に群衆の興奮を沈静化させることなど出来ず...」

佳奈多は振り返って、井ノ原真人の方を見た。真人が照れているので、違う違うと手を振って否定し、携帯を耳に当てる仕草で意図を伝えた。真人は自分の携帯を取りだして、開いた。

「お。恭介からメール来てるわ...」

「どれどれ...あー、確かに、解放作戦決行、というタイトルになってますネー」

「でもこれって...」

後ろで議論を始めている一行をよそに、佳奈多は表情を陰しくさせていた。

「自分一人で勝手なことをやるだけならいざ知らず、直枝まで巻き込んでこんな事始めるなんて...」

「その直枝君なんですか、二木さん、あなたは彼の連絡先をご存じですよ？」

「え？ え、ええ、そうね、知っているわよ」

「彼は今、棗恭介と一緒にあの集団の中心にいます。何とか協力を要請できませんか？」

「そうね...でもどうやって？」

「え？ いやだから、彼の携帯番号、お持ちですよ？」

「持ってるわよ。それがどうかしたの？」

「だから、そこにかけて下さいと」

佳奈多はきょとんとした。数秒、間が空いた。そして佳奈多の顔が赤くなった。

「あああああ、あなた、私に、直枝に直接電話をかけるというのっ!？」

「え!？ いや、そうですけど...あの、何か問題でも？」

「大ありよっ! 男女が電話で会話だなんて、そんな、冷静さを失った恋人みたいな真似...」

佳奈多はうつむいて顔を逸らしてしまった。現風紀委員長はしばらく啞然とした後、頭をかいて、葉留佳の元に歩み寄り肩を叩いた。

「はい？ なんでしょうカ？」

「君のお姉さんのことなんだが...直枝理樹と付き合ってるんじゃないのか？」

「大変むかつき腹立たしく認めたくすら無い事実デスガ、付き合ってますヨ」

「直枝君に電話をかけるのは嫌だ破廉恥だと言い出してるんだが...」

「あー。その件デスカ...」

葉留佳は、言ったものかどうか判断に迷う、そんな顔をしてから、気まずそうに事情を話し始めた。

「前にデスネ。理樹君からかかってきたんだっただけかな...夜中に電話してたんですヨ。もう姉が大喜びしちゃって、でもあの姉でしょう、冷静ぶっちゃって堅めの話ばっかしよとして、剰余価値とエントロピーについて語りましょうとか言い出すモンだから、端で聞いてた私がさすがにもっと恋人らしい話しろって言ったら、今度は理樹君が理想的な男になる為にはどうあるべきかとかいうのを延々、それこそ徹夜ペースで説教始めちゃって...」

「うわあ。それはきついねえ...」

横で聞いていた小毬が溜息交じりに言った。

「理樹君4時ぐらいまではずっと聞いてたらしいんですケド、その後寝ちゃって。その寝たのが、普通に眠くなって寝たのか、例の発作が起きて寝たのか、その辺がよくわからないんですヨネ。それで姉は、今度はすごい取り乱しちゃって」

「自分の説教のせいで発作が起きたんだとしたら、穏やかじゃないよねえ」

「そういう事があったので、姉にとって理樹君との電話という行為は、一種のトラウマなのですヨ」

「そういう事か...」

現風紀委員長は少しばかり落胆したような表情になり、言葉も少なくなった。他のその場にいる面子もみな黙ってしまった。後ろの方にいた真人が、携帯を手に持ちながら身を乗り出してきた。

「理樹の番号なら俺も知ってるんだが...」

「ああそうか、君たちは友達だったな」

「だがさっきからかけてるんだが、ずっと繋がらねえ」

それを聞いた葉留佳が自分の携帯を取りだし、理樹の番号を表示させて発信ボタンを押した。コール音も鳴らないうちに回線は切れてしまった。

「あー。これももしかして輻輳状態になってるかもしれないデスネ」

「ふくそう？」

「非常時とかで電話を使う人が多いと、回線の取り合いになって結果的に全部使えなくなってしまうことがあるんですヨ」

「おー。確かに、だんだん騒ぎが大きくなってきてるしなあ。見ろよ、TV局が来てるぜ」

真人の指さす方には、地元のケーブルTV局のカメラクルーがいた。

「じゃあ、理樹君と連絡とる方法は無いって事？」

「メールなら時間が経てばそのうち届くでしょうケド、今すぐというわけには」

「直枝さんにもウィルコム持っておいて貰えばよかったです...」

「一箇所に人が集まってる時は意味無いですヨ」

「矢文や伝書鳩なんてどうでしょう」

「伝書鳩って自分の基地に戻るだけで、どこにでも手紙送れるわけじゃ無いのよねえ」

一同がやいのやいの議論している、その前で佳奈多はずっと黙って腕組みをしていた。そして、何かを決心したかのように一瞬目を閉じ、隣にいた風紀委員からメガホンを奪い取って叫んだ。

「直枝理樹！！！」

その場にいた、裏山に立てこもる群衆も裏山を取り囲んでいた風紀委員も、一斉に黙ってしまった。佳奈多は繰り返し叫んだ。

「直枝理樹！！！ いるんでしょ、出てきなさい！ あなたにまだ私のものだという自覚があるなら、棗恭介の元から逃げ出して、今すぐ顔を見せなさい！！！」

佳奈多が言い終えると、静寂がその場を包んだ。誰も何も言えなかった。暫くして佳奈多達の頭上の絵だが音を立て、人の声が聞こえてきた。

「やれやれ。相変わらず真面目そうな顔してとんでもないことを言うお嬢様だ」

姿を見せたのは理樹では無く、理樹を連れ去った恭介だった。入り口近辺を一望できる木の枝の上で、傍らの枝に捕まりバランスを取りながら腰掛けていた。

「棗恭介...！」

佳奈多の拳に力が入った。後ろにいた葉留佳が一步前に、佳奈多の少し前に出て、恭介に向かって叫んだ。

「恭介さん、これどういう事デスカ！？ なんか話が違くないですか！？」

「話を違わせてしまったのはそちらだろう...」

恭介は、葉留佳と佳奈多の後ろにいる一団に目をやった。その中の一人であるあーちゃん先輩が笑いながら恭介に手を振り、恭介は悔しそうに目を逸らした。佳奈多は一度溜息をつき、そして表情を戻して恭介に宣告した。

「なんであれ、このような騒ぎを起すのは許されません。要求があるのなら話し合いますから

、今すぐ解散させなさい。それと、直枝理樹を解放しなさい！」

「解放しろ、か...」

恭介は、フッ、と笑った後、続けた。

「違うな。俺が理樹を、否ここにいる同志諸君全てを解放したのだ」

「は？ 何を言って」

「人は何故働くのか。多くのものにとってそれは、食うためであろう。だがそうやって働いたところで、コメすら満足に買えやしない。発展途上国の話では無い、この日本でだ。そう言うと、権力者はこう言うのだ。もっと働けばいい、そうすればコメでも牛肉でも、好きなものが買えると。身を粉にしなければコメも食えない現状などおかしい、我々は言う。すると彼らはこう言うのだ、よろしいならばコメの値段を下げよう。これを素直に喜んでいいのか。我々が被っていた負担をコメ農家に転嫁しただけでは無いのか。ここにはただ、ひたすらマイナスを押しつけあうという発想しか無い。まともに働けばまともにコメの飯が食える、そんな当たり前を実現しようとして我々はそう言っているだけだ。しかしこれを言うと、彼らは犬を放ち、我々を国家に反逆する存在として駆逐しようとする。そして権力者の意志が民衆の意志であるかのような幻想を振りまくのだ。そう、国家は人民のものであるという発想が、彼らの中には根本的に欠如しているのだ！」

「そうだ！」

「我々は人間だ！ 部品じゃ無い！」

「眠けの中で働いても結果など出ない！」

「現実を直視できないものに上に立つ資格があるか！」

「政治が悪い！ 政府が悪い！」

「棗！ 棗！」

「「「「棗！ 棗！ 棗！ 棗！ 棗！ 棗！」」」」」

恭介の演説に対し、周りに集まった群衆が次々と主張や怒りの声を上げていく。その声はだんだんと大きくなっていき、もはや何を言っているのかすら判別できないまでになっていた。佳奈多はしばらく黙っていたが、群衆の声が理性を失いかけた頃合いを見計らって、再びメガホンをとった。

「静粛に！ 今彼は、私と話をしています！」

群衆の叫び声が小さくなり、僅かばかりの会話の声のみになっていき、次第にそれも収まっていった。それを確認するように佳奈多は群衆を見渡し、そして恭介の方を向いて、話し始めた。

「こんな大きな騒ぎにまでして... どういうつもりですか」

「最初はただ、俺と理樹が逃げ出せばそれでよかった。だがここまで話が大きくなってしまった以上致し方ない、俺は理樹と共に地上の人民全てを解放する」

「馬鹿ですか？ たかが裏山を占拠したくらいで」

「今はまだこの裏山だけが解放区だ。だが俺は、俺と同志諸君の持つ全ての力を行使して、全世界を解放区にしてみせる！」

「随分と大きく出ましたね。聞きようによってはそれは、世界征服の宣言にも聞こえますが？」

「かまわん。そもそも俺は、大魔王棗恭介だからな」

「...そうだったわね。ごめんなさいすっかり忘れていたわ。え、ええ？ ええと」

佳奈多は、返す言葉を探しているうちにだんだん顔がうつむいていってしまった。そもそも自分の目的が何だったのか、よくわからなくなって軽い混乱状態にあった。その様子を見て恭介の表情は少し勝ち誇ったものになった。

「どうだ。大人しく理樹のことは諦めて、引き下がったらどうだ？」

「な、直枝は関係無...いえ関係あります、直枝は引き渡して下さい！」

「駄目だ。理樹は俺のものだ」

「直枝は何と言ってるんです？ 本人の意思を尊重するべきだと思いますけど」

「ハンデを抱えた人間が競争で押しつぶされない社会を作るために俺に協力してくれと言ったら、快諾してくれたぞ」

「そんな、卑怯な...ッ！」

「なにが卑怯だ、経緯はどうあれ本気で言っていることだぞ」

「...あなたはいつもそうだわ、そうやって言葉巧みにみんなを利用していく...」

「そういうつもりでは無いんだがな... どうやら平行線だな」

恭介は一度目を閉じ、そして全体を見渡した。群衆の中に佳奈多が孤立しているかのように、恭介にはそう見えた。

「一度引いてはどうだ？ アのまま睨み合っているも、お互い得るものなど無い」

「...確かに、睨み合っている時間も時間の無駄のようですね」

佳奈多は現風紀委員長の方を向いて、言った。

「ごめんなさい、私は一度撤収します。あなた達は——」

「警戒を解くわけにはいきません。が、事態に進展が無いなら人数は減らしましょう」

「そうね。休ませてあげて」

「それは風紀委員をですか？ 彼ら裏派をですか？」

「両方よ。...両方」

そう言って佳奈多は立ち去っていった。少し遅れて、葉留佳達もあとをついていった。

「どこへ行く二木」

裏山から寮の方向へ向かって歩いていた佳奈多を、宮沢謙吾が呼び止めた。

「どこって...そうね、食堂でも休もうかしら」

「休むんなら自室に戻った方がいいんじゃないのか？」

「...少し休んだら打ち合わせとかしたいし。ああ、わかるかしら、裏山のあれ。一応、何とかしないと」

「それは知っている。だが、誰と打ち合わせする気だ？」

「それは...」

佳奈多は振り返った。丁度葉留佳やクド達が追いつくところだった。

「置いてけぼりにして一人だけさっさと行ってしまった仲間と打ち合わせ、か...」

「...」

佳奈多は気まずそうにうつむいた。追いついた葉留佳がどしたの？ と佳奈多の顔を覗き込み、真人は謙吾をにらみつけた。

「おい、何したんだよ」

「何もしとらん、ほんの少し皮肉っただけ...のつもりだったが」

謙吾は佳奈多の様子をちらりと見て、言葉が続けた。

「...思った以上に弱っているようだな」

「恭介がやらかしてくれたからな」

そこで真人ははたと気づいたように言った。

「お前、こんなところで何してるんだよ。恭介から招集があったんじゃないのか」

「お前こそ何をしている」

「オレは...その、メール見そびれてる間になんか話がでっかくなっちゃまって。今更向こうに行くのもなんだしと思ってよ」

「そうか...。まあ、俺もそんなところだ」

「お前、今までずっと一人だったんじゃないのかよ」

「どうだかな」

自販機のある方角から、飲み物を抱えた小毬と美魚が走ってきた。あーちゃん先輩がありがとうと言って受け取り、全員に配り始めた。

「とりあえず、これ飲んで落ち着きましょう」

「座る場所があると良かったんだけどねえ」

「今から探して歩くのも何ですし」

「ここで呼び止められてしまったのだから仕方ないですよ」

「お前、もっと呼び止める場所選べよ」

「こんな事まで想定して呼び止めるか普通」

「はい、お姉ちゃんの方」

葉留佳は飲み物の缶を佳奈多に手渡した。佳奈多はラベルを確認した。恋するリンゴとトマトの心、と書かれていた。葉留佳は佳奈多に、ニコッと笑いかけた。

「クドリヤフカ、交換して」

「いいですよ」

「ええっ！ なんでっ？」

佳奈多は葉留佳には答えず、クドから受け取ったグレープジュースの栓を開けて飲み始めた。飲んで一息ついたところで、謙吾に問いかけた。

「呼び止めた理由を聞いていなかったわ。なあに？」

「恭介を止めて欲しい」
「言われなくてもそのつもりだけど」
「何があったかは知らんが、今のあいつは冷静さを欠いている。訊いても理由を教えてくれない」
「そう...」
佳奈多は事情を全部話すべきかどうか、迷った。
「今はまだ裏山の秘密基地に立てこもる程度で済んでいるが、ほっとくとそのうち何をしでかさかわからん。だが、俺が何を言っても聞く耳を持ってはくれない——だろう」
謙吾は、美魚と葉留佳をちらりと見た。
「だが、あいつが、大魔王の恭介が自分と同じかそれ以上の実力があると認めた二人、その二人が力を合わせれば、彼を止めることも出来るのではないか、そう俺は思った」
「急に思考の軸がずれたのね」
「——まあ、俺はそういう男だからな。で、だ。その二人とは、一人は勇者二木佳奈多、お前だ」
「まあ、そんなところだと思った。で、もう一人は？」
「東の魔王、と呼ばれる人物だ。聞いたことはあるか？」
佳奈多は振り返って、後ろにいた葉留佳達に無言で知ってる？ と問いかけた。葉留佳と小毬は手を振って、知らないと答えた。代わりに美魚が口を開いた。
「ここより東の地に...美しき音色を奏でる聡明で見目麗しき女の魔王がいる、という話を聞いたことがあります。その方のことでは無いかと」
「大魔王の次は東の魔王、ねえ.....魔王の多い世の中だこと」
「英雄がいなければ代わりに魔王を求める...いずれにせよ大衆の自信のなさの表れよ」
「...ま、いいか。で？ 勇者と、その、東の魔王？ とが手を組めば、大魔王棗恭介を倒せる、と」
「倒すと言うより、改心させて欲しい。仮にも盟友だ、恩情をかけて貰えるならそれに越したことは無い」
「恩情をかけるなんて余裕があるのやら...私とその、東の魔王に」
「俺は出来ると信じている」
「はあ...」
佳奈多は溜息をつき、考え込み始めた。正直な話、どこまでが茶番でどこからが想定外なのか。クドリャフカの顔を立てて茶番に付き合いだしたのはいいけど、どうもややこしい話になり出してしまっている。...ううん、佳奈多は首を振った。ややこしくて想定外になっているからこそ、自分に解決を求められているのでは無いか。結局やることは同じだ。
「実際に出来るかどうかはともかく、今のままでは何も出来ないのは確か、ね...」
佳奈多は意を決して、言った。
「行きましょう、その、東の魔王の所へ」
「よくぞもうされました勇者殿。では私が案内します...」
そう言って美魚が先導を始めた。佳奈多達はその後についていった。

佳奈多達は放送室の入り口の前に立っていた。
「そうね。こういうことね。こういう事なのね...」
「何か不満でも...？」
「東の地とか言い出すから、もう少し遠いところ、せめて校外かなと思ってたんだけど」
「ここは校長室より東側なので」
「校長室が基準なのですか？」
「JRではもう基準が変わってしまったようですが...昔の国鉄では、駅のホームの番号を振るときは、駅長室に近い順から1番瀬、2番線、と付けていったそうです。駅の責任者である駅長のいる場所を基準にしたのですね。それを考えれば、学校の場合は学校の責任者の部屋である校長室を基準に考えて然るべきかと」
「えええ。そういうものなんデスカ？」
「はい。そういうものです」
「じゃあ図書室が新しくもう一つ出来て、それが校長室より東側だったら、そこにいる図書委員

「...東の魔王の助力を頼りたいのか？ 豊富な知識を当てにして参謀役に据えたいのか？ それともいっそ、自分の代わりに指揮官の役割を担わせたいのか？」

「東図書委員になるの？」

「そういうこともあるんじゃないでしょうか」

「...かなちゃん、西園さん放っといういいの？」

「割といつものことですから」

そう言って佳奈多は放送室の扉を開けた。中では椅子に座って足組みをしながら待ち構えている来ヶ谷唯湖の姿があった。唯湖は座ったまま佳奈多に語りかけた。

「東と付けると何でもかっこよく聞こえてしまうのは、東京一極集中がもたらした弊害の一つだとは思わんかね？」

「思いません」

「そうか...」

唯湖は特に動じることも無く、ただ薄い笑みを浮かべていた。

「何なんですいきなり？」

「いやなに、扉の向こうから東の地がどうか聞こえてきたものでな」

「来ヶ谷さんは東の魔王ということになっているらしいので」

「うむ。知っている」

「では、大魔王棗恭介の事もご存じですか？」

「裏山でなにやら騒ぎになっているようだな。あれは一体どういうことだ？」

唯湖はちらりと葉留佳を、続いて美魚と小毬を見た。三人とも作り笑いをするだけで何も答えなかった。

「ふむ。想定外の事態、という奴か...」

「ええ。ですから尚のこと早めに沈静化したいのですが...私一人では手に余る事態なんです」

「なるほど、私一人、か...」

「宮沢のアドバイスで、来ヶ谷さん...東の魔王の助力を請おうと思って、やってきました」

「うむ」

「ご協力願えませんか？」

「うむ、断る」

「即答ですか...」

「決まっている答えに勿体を付けても仕方が無いからな」

「それは仰るとおりですが...何故そう決めたのか理由を教えてくださいませんか？ ...その、私の頼み方が良くなかったのでしたら謝ります」

「いや、そうじゃない。そうじゃないんだ」

唯湖は今度は少し勿体を付けて考える仕草をしながら、再び語り始めた。

「佳奈多君は私の協力を得たとして、それで私に何をさせたいんだ？」

「え？」

「戦闘力の高さを見込んで大魔王棗恭介の陣地に切り込む先陣を切らせたいのか？ 豊富な知識を当てにして参謀役に据えたいのか？ それともいっそ、自分の代わりに指揮官の役割を担わせたいのか？」

「えっと、それは...」

「いや、こういうのをやりたくないと言っているわけじゃない。正直どれもこなす自信はある。他の事でもいい。ただ、佳奈多君の意志としては、私にどんな役割を期待しているのかと思っ

てな」

「...」

「たぶん、答えられない。そう思ったから私はもう答えを決めてしまった。それが理由だ」

「...すみません」

「いや、謝らなくていい。そもそも普通は、協力の約束を得てから役割分担を考えるものだしな」

「そうですね。...ですが、ここは一旦出直すことにします」

「...何も冷たくあしらってるつもりは無いのだぞ？ 確かにゆっくりしていけと言うような場所では無いが」

「いえ。私も落ち着いてきちんと考えたいことがあるので」

「そうか。なら止める方が無粋というものだな」

佳奈多は踵を返して扉に向かって歩いて行き、放送室を出て行った。

「あ、待って」

葉留佳が後を追いつ、残りの殆どもそれについていった。あーちゃん先輩だけが放送室に残り、唯湖と二人だけになった。

「...もしかして」

「...しんば...」

あーちゃん先輩が話しかけた。

「あなたの立ち位置をアタシに取られた、そう思っているのかしら？」

「...よしんばそうであったとしても、それが断った理由ではありませんよ」

「そっか。ならいいけど」

唯湖の答えを聞いたあーちゃん先輩は、放送室を出て行こうとして、戸口で立ち止まってぼそりと言った。

「楽しみたいのなら急がないと。このまま参加できずに終わる可能性だって、あるわよ？」

唯湖は返答しなかった。あーちゃん先輩は放送室を出て行った。

理樹から佳奈多宛のメールが届いたのは、あーちゃん先輩が佳奈多達と合流してからのことだった。理樹からのメールを見た佳奈多は、机に突っ伏して考え込んでしまい、そのまま眠ってしまった。

次回

恭介のことは心配しなくても大丈夫だから

根詰めないでお姉ちゃん、ほら、青汁

お友達になってください、とか、そういうのでは無いのか

最悪と最高、常にどちらの想定外もありうるということを前提に動いていますから

謙吾少年はどう動いたのか。その答えは見つけておいた方がいい

次回 勇者佳奈多と百万円の壺、第六話「青汁ファイター」

勇者佳奈多と百万円の壺

第六話

佳奈多の携帯に理樹からのメールが届いた。その場にいた全員が佳奈多の周りに集まってきた。

「その着メロ、直枝君ね」
「着うたでは無く着メロですね」
「どんな内容なのですか、早く見せるのデス」
「...私にもはやプライバシーは無いのかしら」
　　そう言いながら佳奈多は携帯を開いた。メールの内容は一文のみだった。

<恭介のことは心配しなくても大丈夫だから。>

「...」
　　一瞬、全員が無言になった。佳奈多はしかめっ面をして携帯を閉じた。そしてすぐにまた開いて、理樹に返信をした。

<誰も心配なんかしてないわよ>

送信すると佳奈多はすぐにまた携帯を閉じ、すぐそばの席に座って机に突っ伏してしまった。
「あー...もう！」
　　さすがに周りの誰も声をかけられなかった。突っ伏しているうちに、次第に溜まっていた疲労が押し寄せてきて、佳奈多はそのまま寝入ってしまった。

佳奈多が目を覚ましたときには、空の色が変わっていた。夕刻か、どれだけ寝たのだろう。起きたばかりで思考がはっきりしない佳奈多は、携帯のランプが点滅していることにはまだ気づかなかった。佳奈多が目覚めたことに気づいた葉留佳が席に近づいてきた。

「お目覚めでしょうか」
「...うん。随分寝てしまったかしら」
「多少。寝ている間に風紀委員の方達が来ましたが、もう帰りました」
「そう」
「私が姉に変装して対応しておきました」
「変装はしなくていいから」
「申し訳ありません、以後気をつけます」
「別にいいわ。なんて？」
「裏山に立てこもっている棗恭介一派ですが、大半は寮に戻ったものの、一部はこのまま棗恭介と共に裏山で夜を明かすつもりようです」
「自発的に戻ったのかしら」
「そのようです。夜が明けたらまた裏山に向かうのでは無いか、と」
「全滅を避ける為に体力温存か...思った以上に長期戦になりそうね」
「それと、寮に残っている中立派の学生を説得して取り込む動きもあると」
「人数が増えると厄介ね...」
「教職員の間では、彼らが勢いづいて、国会議事堂前でデモを仕掛けるような事態になるのでは無いかと、危惧する声も出ているそうです」
「東京まで歩いて3日かかるのよ？　さすがに杞憂じゃ無い？」
「ですが相手は棗恭介です」
「そうね...歩けば済む話だといえば、ついていく者もいるでしょうね...」
「そうなる前に手を打ちたい、と、相談に来たそうですが。寝ていましたので」
「それは悪い事をしたわね」

「顔洗って出直してこい、と言ってやりました」

「うん...そうね、ちょっと顔洗ってくるから、その後でゆっくり話をしましょう」

「その前にいいですか？」

「何？」

「私の口調に違和感を感じないのはまだ寝ぼけているからという認識でよろしいでしょうか」

「ああ。あなたもようやく改心して真面目になってくれたんでしょう？」

「いえ。そういうわけでは」

「助かるわ。ずっとそのままでいてね」

「え？ いやアノ」

佳奈多は顔を洗いに出て行ってしまった。葉留佳は悲しげな顔で後ろの美魚を見た。

「みおちん...」

「私にすぎるくらいなら最初からやらないで下さい...」

佳奈多が戻ってくると、さっきまで座っていた席の机の上に、青汁の缶が置かれていた。佳奈多は一瞥して、別の席に着いた。葉留佳が青汁の缶を手に取り、佳奈多にそっと差し出した。佳奈多は嫌そうな顔をした。葉留佳はニコッと笑いかけた。

「どうしたの、そんな難しい顔をして」

「難しい問題が多すぎるからよ。そう、例えば妹の行動とかね」

「根詰めないでお姉ちゃん、ほら、青汁」

葉留佳は青汁の缶を佳奈多の目の前に差し出した。佳奈多は缶を受け取り、大きく振りかぶって、葉留佳めがけて投げつける体勢を取った。

「美魚ちゃんバリヤー！」

葉留佳はそばにいた美魚を引き寄せ、佳奈多との間に割り込ませて盾にした。佳奈多はそっと手を下ろし、缶を美魚に手渡した。缶を受け取った美魚は、そっと振り返ってコツンと缶を葉留佳にぶつけた。

「美魚ちゃんが裏切った...」

「人を盾にしておいてなにが裏切ったですか...」

「だってこれはそもそも美魚ちゃんが...」

「私は、真心を持ってお姉さんに接してみてもどうですか、と言っただけですよ...」

「ですから、はるちんが真心を込めて姉に飲ませようといつも持ち歩いている青汁をデスネ」

「青汁が真心なのですか？」

「激務のくせにトマトを食べない姉の美容と健康をおもんばかってのことなのデス」

「トマトと青汁は違うと思いますが...」

「トマト嫌いにいきなりトマトジュースを飲ませようとしても拒絶されるだけですからネ。まずは青汁で野菜に慣れて貰うのデス。さあお姉ちゃん、この青汁を飲みなさい！」

「嫌よ...やめなさい！」

「やめません。はるちんは今、姉の美容と健康を守る使命感に燃えているのデス。戦士なのデス。そう、言うなれば、青汁ファイターなのデス！」

「あなたは一体誰と戦ってるの！」

「姉に甘い顔を見せてしまう己自身の弱さと！」

葉留佳は缶のタブを開け、佳奈多の口に青汁を流し込んだ。全てを飲まされて、佳奈多はむせかえった。

「勝った...！」

葉留佳は満足気に天井を仰ぎ見た。

「あ、そうだクド公。この勝利を機に、はるちんの職業変更して貰えませんかネ。職業バッファオーバーフローとかそろそろ嫌ですヨ」

「何と変更するのですか？」

「それはもちろん、青汁ファイターと」

「戦士は勇者とかぶりませんか？」

美魚がすかさず指摘した。

「む。じゃあ、ファイターじゃ無ければいいんデスカ？」

「他の人とかぶらなければ」

葉留佳は美魚、小珠、あーちゃん、先輩を順に見渡した。

「...」

真人は床に突っ伏してしくしく泣き始めた。

「...とりあえず直枝からのメール見せて貰えないかしら？」

真人は泣きじゃくりながら携帯を佳奈多に差し出した。佳奈多は真人の携帯を開き、理樹からのメールを探した。一覧にあるのは全部理樹からのメールだった。

「『マグネシウムを使わない豆腐は水ばかりでタンパク質が少ないから筋トレには役に立たないよ』...何これ？」

「それ一週間前のメール...」

「何の会話してたのよ...一番上のでいいのかしら？」

「うん、それ」

佳奈多は一覧にある一番上のメールを開いて読んだ。

<佳奈多さん怒らせちゃった、どうしよう>

「...は？」

佳奈多は思わず叫んでしまった。佳奈多の声に小毬の方がびくっとなり、美魚とあーちゃん先輩は何かとメールの中身を覗きに来た。

「...あー。あーあーあー、これか」

「何か知ってるんですかあーちゃん先輩」

「かなちゃん、起きてからまだメール見てないでしょ。寝てる間に何回か鳴ってたのよ」

「え？」

佳奈多は慌てて携帯を取りだした。理樹からのメールが3通来ていた。

<恭介、本当は佳奈多さんが来るのを待ってるんだよ。変な展開になっちゃったけど、やっぱり直接対決したいって>

<僕も佳奈多さんに早く来て欲しいな。恭介も大事だけど佳奈多さんも大事だから>

<気分を害すようなことを言ったのだったらごめん。謝るから早く来て>

「...。」

佳奈多は無言で携帯を見つめていた。

「まあ、かなちゃん寝てたんだし。しょうがないんじゃない？ 直枝君もせっかちよね～」

「内容にも多少問題が...いえ勿論私としてはこういう展開の方が大好きですけど」

はあ、と溜息をついた佳奈多は、携帯を閉じたしゃがみ込み、真人に手渡した。

「おう、返してくれるのか...」

「ねえ。訊きたいんだけど。棗恭介は一体何を考えているのかしら？」

「何って...オレは恭介じゃねえからわからねえよ」

「あなたはどう思うの？ 意見を聞きたいの」

「ナンデスカ！ この、最愛の妹にして頭脳明晰なはるちんを差し置いて、そこの筋肉バカに助言を求めるナンテ！」

憤慨する葉留佳に、佳奈多は振り返って言った。

「この中で棗恭介と一番つきあいが長いのが彼だからよ。いちいち嫉妬しないで」

「嫉妬！ 嫉妬だなんて、そんな嫉妬だなんて...」

葉留佳が口ごもっている間に、佳奈多は真人の方に向き直って、言葉を続けた。

「裏山にあれだけの生徒を集めて、彼は一体何がしたのかしら？ 感でいいのよ」

「何がしたいのかはわからねえ...ただ、成り行きでああなただけで、最初からこういう展開を望んでいたんじゃないはずだ」

「そう。じゃあ、何かきっかけがあれば、自発的に生徒達を解散させてくれるのかしら？」

「それも無いな。一旦面白い展開になった以上、奴はとことん遊び倒すはずだ」

「終幕を演出するしか無い、と」

後ろで聞いていた美魚が口を挟んだ。

「終幕、か...」

「真っ正面から妨害する恭介派の生徒達をなぎ倒してその勢いで恭介さん...大魔王棗恭介も倒すか、前回のように奇襲をかけるか。このどちらかだと思います」

「前回のあれは意図した奇襲では無かったけど...」

佳奈多は改めて、その場にいる全員を見渡した。

「この人数で真っ正面から当たるのは無謀すぎるわね」
「風紀委員を加えても、向こうは寮で待機してる援軍を呼ぶだけでしょうしねえ」
「明日の朝、奇襲をかける方向で行きましょう。葉留佳とクドリャフカは、秘密基地...ええと、魔宮？ そこまでのルート選定をお願い。神北さんと西園さんは、一度寮に戻って、明日午前中だけでも裏山には戻らないよう説得して。あーちゃん先輩は、私と一緒に来て下さい。話を付けておきたい人がいるので」

「オレは？」
「ごめんなさいまた忘れてたわ。ええと...とりあえず思いつかないから、一緒に来て」
そう言って佳奈多は踵を返し、教室を出て行った。あーちゃん先輩と真人は慌ててついていった。

「どこへ行くのよ？」
「放送室です」
「放送室ねえ。ええと誰がいるんだっけ？」
「来ヶ谷さ...いえ、東の魔王です」
あーちゃん先輩は満足気ににゅふふ〜と笑った。佳奈多は少し悔しそうだった。

放送室の前に立った佳奈多は、一呼吸置いてから軽く扉を叩いた。
「入りたまえ」
中からの声を確認して、佳奈多は扉を開いた。
「失礼します」
「うむ。失礼だと思ふのなら帰れ」
帰ろうとする真人の襟首を掴みながら、佳奈多は言葉を続けた。
「お願いがあって来ました」
「ほう...まあ、まずは聞こうか」
「明日の朝、大魔王棗恭介に奇襲をかけます」
「お友達になってください、とか、そういうのでは無いのか」
「いいえ。そういうのでは全くありません」
「受け取りようによっては傷つくぞそれは...」
「来ヶ谷さん...東の魔王には、待機していて貰いたいのです」
「君の冷静沈着ぶりは本当に容赦が無いな...何、待機!？」
「はい。ここでも風紀委員会室でも、どこでもかまいません。待機していて下さい」
「何もしなくていいということか？」
「何事も無く私達の行動がうまく行けば、何もしなくてかまいません。但し失敗したときには、来ヶ谷さんには、後を引き継いで貰う。その役割をお願いします」
「そんなにリスクの高い行動を取るのか。だったら私も加えて成功率を高めた方が良いのでは無いか？」
「それも考えました。ですが、それでは失敗したときに総崩れになって、目も当てられない惨状になりますので。後を任せられる人に残って貰いたいです」
「君は慎重なのか大胆なのか...よくわからないな」
「最悪と最高、常にどちらの想定外もありうるということを前提に動いていますから」
「そうか...」
唯湖は暫く黙って、じっと考え込んでいた。そして意を決したかのように頷いた。
「わかった。後ろは私に守られていると思って、存分にやりたまえ」
「ありがとうございます」
「なんだ、強がりの一つでも言うかと思ったら、随分素直では無いか」
「あ、あなたの事は頼もしく思ってますから...」
「む。そんな風にうつむかれるとこっちまで照れるな...」
照れ隠しに顔をそむけた唯湖は、窓の外から見える景色を見て、思い出したように言った。
「奇襲と言ったが、裏山をどう進むかとか、そういう経路は決めてあるのか？」
「いえ。今葉留佳とクドリャフカに検討して貰っています」
「そうか...」
唯湖は顎の手を当てて、暫し考え込んだ。
「謙吾少年は、私と同じ待機組か？」

「いいえ。どこにいるのかもわかりませんし、そもそも私達に味方してくれるのかすら」
「ふむ…。味方にするかはさておき、謙吾少年はどう動いたのか。その答えは見つけておいた方がいい」

「そうですか。助言ありがとうございます、しかしどこにいるのかもよくわかりませんし」

「今窓の外歩いて行ったわよ」

「えっ」

「井ノ原君！」

「ほい来た！」

あーちゃん先輩の声に押され、真人は部屋を飛び出していった。佳奈多も後に続こうとしたところで、唯湖に呼び止められた。

「一つ頼みがあるんだ」

「何でしょうか？」

「もしうまく行って、恭介氏を捕まえたら、私にも見せて欲しい」

「はあ…別に捕まえると決まったわけではないんですけど」

「なにっ。捕まえて裸に剥いて鎖で繋がれた恭介氏を見たくてみんな頑張ってるんじゃないのかっ」

あーちゃん先輩ががっしりと唯湖の手をつかんだ。

「あなた、わかってるわね！」

「…行きますよあーちゃん先輩」

佳奈多とあーちゃん先輩が真人を見つけて歩み寄ると、その視線の先には竹刀の上でコマを回す謙吾の姿があった。真人が何も言わずじっとそれを見続けているため、佳奈多とあーちゃん先輩も無言でそれを見続けた。謙吾も黙々とコマを回し続け、暫し宙に舞わせたりしていた。

やがて沈黙に耐えられなくなった佳奈多が口を開いた。

「…何をしているの？」

「謙吾がどう動くのかを見ている」

真人が答えた。

「動くって。いや、あの、そういう意味では無いと思うんだけど」

「そうなのか。奇抜な事してるから、てっきりあれが来ヶ谷の言う謙吾の動きなのかと」

「確かに、何してるのかしらねえ。おーい」

あーちゃん先輩が声をかけると、謙吾はコマを回していた手を止めた。そして両手に竹刀とコマを持って、歩み寄ってきた。

「何か用ですか」

「用というか、何してるのかなあとと思って」

「見ての通り、コマの練習ですよ」

「何のために？」

謙吾は質問には直接答えず、真人をライバル心むき出しで睨みつけて、言った。

「貴様には負けん」

「は？ 意味がわかんねえ…」

謙吾と真人は暫し睨み合った。暫く間を置いて、佳奈多が謙吾に問いかけた。

「宮沢に訊きたいことがあるんだけど」

「なんだ」

「あなた、棗恭介から招集されて、暫く裏山にいたわよね」

「——何故そう思う」

「棗恭介の様子を知っているからよ」

「俺達は幼なじみだ。察しくらいつく」

「そう。でも同じ幼なじみの見解は違ったわ」

謙吾は真人を睨みつけた。

「んだよ」

睨み合う二人をよそに、佳奈多は続けた。

「直枝からメールがあったの。心配しなくていいって。ただ遊びほうけているだけなら、そもそも心配の余地なんて無い。——けど宮沢が言ったような状況なら、直枝がそう言いたくなるのもわかるわ」

「理樹の名前を出されてはかなわないな」
謙吾は観念したように手に持っていた竹刀を地面に盾、それに体重を預けた。
「それで？ 質問はこれで終わりでは無いだろう」
「どうやって裏山から下りてきたの？」
「この二本の足でだ」
「そりゃそうでしょうね」
「風紀委員会の予算で簡易モノレールでも付けてくれていたなら、話は違ったが」
「二木の姉御、口車に乗っちゃあいけません。こいつはただ、モノレールに乗ってヒャッハウと遊びたいだけですぜ」
「言われなくてもそんなもの付ける気は無いわ...私が訊きたいのは、どの道を通ってきたのかということよ」
「普通の道を通って降りてきたのでは無い、と？」
「通り道は棗派の学生がいるし、出口は風紀委員が固めているわ。棗恭介の側近が山を下りたとなれば、多少は騒ぎになるはずよ」
「そこまで訊くからには、察しはついているのだろう。俺達しか知らない抜け道がある」
「その抜け道、教えて貰えるかしら？」
「そうだな...教えたら何をくれる？」
「二木の姉御、口車に乗っちゃあいけません。こいつはただ、モノレールに乗ってヒャッハウと遊びたいだけですぜ」
「...お前が遊びたいんじゃないのか？」
「順番くらい守ってやるから安心しろ」
「話を戻していいかしら？」
「む。何の話だった？」
「宮沢が私達を棗恭介の所まで案内するという話よ」
「そんな話だったか？ いや、まあいいか。すぐに出発するのか？」
「いいえ。明日の朝。今葉留佳とクドリャフカがルート検討をしているから、付き合わせて問題無いことを確認して、今夜はそれで休息にするわ」
「そうか。...待て、俺にあの二人と打ち合わせをしろと」
「ええ。今呼んだから」
佳奈多はメール送信済みの携帯を謙吾に見せた。
「二木の前で言うのも何だが...俺あの二人苦手なんだ...」
「別に3人だけにはしないから安心なさい。食堂で待ち合わせにしたから、行くわよ」
佳奈多は先に立って歩き出した。すぐ後にあーちゃん先輩がついてきた。
「かなちゃん、宮沢君にも容赦ないのねえ」
「隙を見せれば吞まれますので」
「そんな警戒しなくても」
「吞まれたくないんです。私は。誰にも」
佳奈多は歩きながら振り返り、あーちゃん先輩を見ながら言った。
「あなたにも」
「あらま」
佳奈多は早足で歩き始めた。あーちゃん先輩も、他の者達も、後についていった。もう日が暮れ始めていた。

次回

謙吾の手引きで大魔宮に辿り着いた勇者佳奈多一行。大魔王棗恭介との精神戦の果てに待ち受けていたのは、佳奈多が予想だにできなかった過酷な結末だった。

次回 勇者佳奈多と百万円の壺、第七話「第二次魔宮作戦」

勇者佳奈多と百万円の壺

第七話

翌朝。謙吾の案内で、佳奈多達勇者一行は大魔王棗恭介の魔宮の前まで来ていた。

「随分あっさり到着してしまいましたネ」

「知っていれば通りにくい道でも無かったですしね」

「あの道、謙吾君が作ったの？」

「ああ。秘密基地を作るときに資材を運びやすいように、整備しておいた」

「オレはあんな道知らなかったぞ」

「貴様にバレ無いような作り方をしておいたからな」

「てめえ...」

謙吾と真人が睨み合っているのをよそに、佳奈多は魔宮の入り口まで歩いて行った。入り口には扉代わりにすだれがかけてあり、その傍らには「準備中」の札が掲げられていた。

「...前回の件で学習したのかしら」

「前回何かあったのですか？」

「かなちゃんが、無神経にずかずか入り込んでいったから。勝手に入ってくるな、って札掲げてるのよ。かなちゃんってば、真面目ぶって非常識なところあるから」

「あーちゃん先輩だって棗先輩の服の中に手をつっこんでりしていたじゃないですか...」

「前回一体何があったのですか...」

「...とりあえず、準備が出来るまで待ちましょうか」

そう言って、佳奈多は腕組みをして待機の姿勢を取った。その場にいる他の面々も、それぞれの方法で時間つぶしを始めた。謙吾はコマを回し、葉留佳が喝采をあげていた。

「戦争なんてくだらねえみんな俺のコマさばきを見ろおっ！」

「地球が自転するプラネットダァンス！」

「てめえ...昨日から一体何なんだよ」

「貴様には負けん、と言ったはずだ」

その様子を、佳奈多は入り口の前に立ったまま見つめていた。そんな佳奈多にあーちゃん先輩がそっと声をかけた。

「仲間に入りたいの？」

「そういうわけではないです。葉留佳が楽しそうにしてるのは微笑ましいですけど」

「割とはっきり言うのね」

そう言ってあーちゃん先輩は、入り口をちらりと見た。

「...これだけ楽しげにしてるのに、中から出てくる様子が無いわねえ」

「あーちゃん先輩ならすぐ出てきそうですけどね」

「アタシ神話の神様じゃ無いわよ？」

「そういう意味で言ったんじゃないですけど」

「あらそう。しかし遅いわねえ、いつまで準備してるのかしら」

「飲食店とか、準備中と言いつつ実際には中に誰もいない、ということもよくありますよね」

「むしろそっちの方が多いけどね」

「確認した方がいいでしょうか？」

「どうやって？」

「呼びかけてみるとか」

「じゃあやって」

「...なんか恥ずかしいです」

「たぶん顔見知りしかここにはいないわよ？」

「だからこそです」

「困った子ねえ。じゃあ、ちょっとだけ中覗いてみたら？」

「お願いします」

「かなちゃんがやるのよ？」

「私がやったら、覗いた瞬間に、覗き趣味の変態少女とか言い出すつもりじゃないんですか？あとかなちゃんじゃないです」

「随分疑り深くなったのねえ」

「おかげさまで」

「しょうがないなあ、じゃあアタシが先にちょっと見てあげるわ」

そう言ってあーちゃん先輩はすだれをほんの少しだけずらして、中を見た。そしてすぐに顔を引っ込めた。

「かなちゃん。かなちゃん、ちょっと中見てみて」

「かなちゃんって呼ばないで下さい。なんですか一体」

「いいから。ちょっと見てよ」

促されるままに、佳奈多はすだれを押しつけて中を覗き込んだ。中では理樹が着替えをしていた。

「あら」

佳奈多は思わず声を上げた。理樹は佳奈多に気づいた。

「えっ。佳奈多さん!？」

「ん？ なんだ、二木が来てるのか？」

少し奥の方からもう一人の声がしたので、佳奈多がそちらを見ると、そこには椅子に座って腕と足を両方組んでいる恭介の姿があった。佳奈多は思わずすだれをかき分けて中に入っていった。

「ちょっと何してるんですか...直枝をこんなところで着替えさせて、それを観察していたんですか!？」

「え？ いやそういうつもりでは無いんだが...」

「椅子にふんぞり返って直枝の着替え見てたんじゃ無いんですか？」

「いや、たまたまこういう姿勢取ってたときにお前が入ってきたから、そのまま固まっちゃっただけだ」

「着替えを見てた理由にはなりませんけど」

「それは...違う、誤解だ。奥に鈴がいるし、見張っていただけだ。やましい気持ちやよこしまな感情など...無い。俺はただ純粋に理樹を見つめていた」

「ええっ!？ 結局見てたの!？」

驚きの声を上げる理樹をかぼうように、佳奈多が理樹と恭介の間に割って入る位置に立った。

「待て二木...お前は今、相当な誤解をしている」

「何が誤解ですか。準備中と言うから大人しく待っていたら、こんな...」

「だからそれが誤解だと...」

「かなちゃーん。なんか騒ぎになってるみたいだけど、大丈夫？」

外からあーちゃん先輩の声が聞こえてきた。その声を聞いて、佳奈多も恭介も一度呼吸を整えた。

「...一度外に出ないか？ 落ち着いて話をしよう」

「そうですね。さすがに外でならいかがわしいこともしないでしょうし」

「あの、僕まだ着替えの途中で...」

「ならさっさと着なさい」

「はい」

「私は先に出て待って...いえそれはだめね。棗先輩いえ大魔王棗恭介、あなたが先に出て下さい」

「そこまで信用を失っているのか...」

苦渋に満ちた表情で恭介が外に出ていき、それについて佳奈多も外に出た。外ではあーちゃん先輩と美魚が待機していた。美魚が目を潤ませながら佳奈多に話しかけてきた。

「中で何があったのですか？」

「たぶんあなたが想像している通りよ」

「...そうでしたか。私も様子を見に来るべきでした。コマなどに夢中になっていた私が馬鹿でした」

「待て。コマなど、とはなんだ」

謙吾が抗議の声を上げた。

「中で行われていた美しい行為に比べたら、コマなど取るに足りません」

「西園も二木も俺という人間を誤解している...」

「じゃあまず誤解を解きなさいよ。こっちは準備中とか言って散々待たされてたわけだし」

「準備中？ ああ、あの札のことか。いや、あれはだってお前らが前回...」

そう言って恭介は一度あーちゃん先輩の顔をちらりと見、そして苦痛の表情を浮かべた。あ

「...」
「あーちゃん先輩が苦笑いをし、暫しその場が静粛になった。」

それを引き取るように、佳奈多が続けた。

「準備中なら準備中でいいです。で、それはいつ終わるんですか？」

「...そこにいるあーが撤収するまで...」

「あーちゃん先輩帰って下さい」

「えー。何それ、かなちゃん冷たすぎない？」

「ごめんなさい私には無理でした他の条件を考えて下さい」

「くそっ...なんなんだお前ら」

「私はただ、その準備中の札をさっさと変えて欲しいだけです」

「札を変えればいいのか。変えればいいんだな？ だったらこうしてやる」

恭介は準備中の札を取り外し、代わりに別の札に何かを書き込んで、それを取り付けた。新しく取り付けられた札には「冷やし中華始めました」という一文が書かれていた。

「...ナンデスカコレハ」

「準備中だとうるさく文句を言う人がいるから、取り替えた」

「いつからここはラーメン屋になった」

「ドラッグストアで野菜を売る時代だぞ。大魔王の魔宮で冷やし中華出して何が悪い」

「別に悪いとまでは言いませんが...」

佳奈多は何も言わず腕組みをしていたが、暫くして口を開いた。

「そうですね。じゃあ、注文お願いします。冷やし中華、ここにいる人数分」

「えっ」

「冷やし中華を人数分です。ええと、私にあーちゃん先輩、葉留佳、西園さん、神北さん、クドリヤフカ、宮沢、ええと井ノ原も一人前に数えていいのかしら」

「おい、そりゃどういう意味だ」

「たくさん食べそうだから一人前で足りるのかしら、と思っただけよ。とりあえず8人前ね」

「いや、あの」

「何？ さっさと出して頂戴、冷やし中華」

「大変申し上げにくいのですが、材料が無いのです...」

「材料が無い？ 材料が無いですって？ 材料も無いのに冷やし中華始めましたなんて大口叩く内容の看板を出したというわけ？」

「その件につきましてはただいま担当の者が不在でして」

「看板変えたのあなたじゃ無いの。あなたが担当じゃ無いの？」

「上の者と相談しないと」

「あなた大魔王でしょう。ここで一番偉いんじゃないの？」

「一番偉くても材料が無いのはどうしようも無いんだ、わかってくれ」

「材料ならここにあるぞっ」

中から鈴が物資を携えて出てきた。

「小麦粉に、酢に、醤油。これだけあればできるんじゃないのか？」

「いや、待て鈴」

「...出来ないのか？」

「そういう問題では無く。俺に、作れと？ この場で、冷やし中華を」

「何よ恭介ったら。折角鈴ちゃんが材料見つけてきたのに、つまらない言い逃れしようというわけ？」

「妹の好意を無にするなんて殆ど犯罪ね」

「鈴ちゃんえらいよ鈴ちゃん」

「やめれ...」

「くそっ...何だこの展開は...ああ、わかったよ、作ればいいんだろう、作れば。冷やし中華8人分！」

「ボウルと麺棒もちゃんと持ってきた」

「ありがとよ鈴...」

「褒められた！」

恭介は少し涙目になりながら小麦粉をこね始めた。

「ほんとに作り出しちゃいましたヨ」

「いいじゃない。朝ご飯まだだったし」

「朝から冷やし中華ですか...。いいですけど、でもこのままだと具無しになりますよ？」

「さすがにそこまで文句は言えないわ」

「おお、大魔王様が自ら生地をのぼしていらっしゃる」
「なんと凜々しく神々しいお姿。ありがたやありがたや冷やし中華大魔王」
「お前ら...実は俺の事馬鹿にしてるだろう...」
「そんな事は無い。それよりこの後どうやって茹でるんだ？ 燃料が切れたけど買いに行く金が無いという話を聞いた記憶があるが」
「電気コンロがあるからそっちを使う...鈴、湯加減を見ていてくれ」
恭介は電気コンロを発電機に繋いで、自転車をこぎ始めた。
「火力足りないぞー。がんばれー。がんばって漕げー」
「くそっ...何で俺がこんな目に...」
「ごめんね恭介さん。たぶん自業自得だと思うの」
「今ここに俺の味方は一人もいないのか...」
「あたしちゃんと手伝ってるだろ」
「ありがとよ鈴...」
「褒められた！」
ちょっとした騒ぎの中、魔宮の中から理樹が顔を覗かせようとしていた。それに気づいた佳奈多は、入り口の所まで行ってそっと理樹を押し戻した。
「直枝は見ない方がいいわ...」
「えっ。どうして？」
「武士の情けよ」
「意味がわからないよ...」
「いいから中で大人しくしてなさい」
佳奈多は理樹を中に押し込み、蓋をするように入り口の前に立った。

暫くして、紙皿に盛った即席の冷やし中華を手を恭介がやってきた。
「冷やし中華... 8人前...お待ち...」
「随分とお疲れですね」
「当たり前だろう...お前...自転車でお湯沸かすのがどれだけ大変か...」
「そうですね。暫く座って休んで下さい。直枝、椅子持ってきてあげて」
理樹が椅子を持って中から出てきた。
「うわっ。どうしたの恭介、すごい汗だよ!？」
「ちょっとな...」
「着替えた方がいいよ。僕取ってくるから、恭介座ってて」
理樹は中に戻り、恭介は椅子に座った。椅子に座った恭介の服をあーちゃん先輩が脱がせ始めた。
「待て...お前...何をしている...」
「着替えるんでしょ？ 脱がないと着替えられないわよ」
「お前が...脱がせる必要が...どこにある...」
「疲れてるんでしょ？ 無理しないで、アタシが代わりに脱がせてあげるから」
「お前が脱がせたいだけじゃ無いのか...」
「だったら何なの？」
「否定すらしらないのか...」
「袖が引かかるわねえ。西園さんと神北さんちょっと手伝って。全部脱がせるから腕持っててあげて」
「いや...ちょっと待ってくれ...」
「なに。女の子3人に脱がされるのは嫌だって言うの？」
「...常識で判断してくれ...」
「アタシ一人に脱がせて欲しかったのかあ。ごめんね気づけなくて」
「なんでそうなる...」
「常識で判断しろって言ったじゃない」
「今の...俺が間違ってたのか...？」
「あらあ。自転車でお湯沸かすだけあって良い筋肉してるわねえ」
「俺の筋肉を褒めても何もでないぞ...真人は写真に撮るんじゃ無い」
「後でアタシにも送ってね」
「送らなくていい」

「恥ずかしがり屋さんねえ。照れちゃったのかしら、汗の量が増えたわよ」

「むしろ怒りの方だ...」

「冷ましてあげるわねー。ふー。ふー」

「やめる...服はまだなのか...」

理樹が中から出てきた。

「ごめん恭介、着替え、無かったよ...」

「今、なんと？」

「ごめん恭介、着替え、無かったよ...」

「待ってくれ理樹...俺にこのまま...上半身裸でいろと...？」

「仕方ないじゃない着替えが無いんじゃ」

「仕方ないで済むか...お前...お前らがいるのに...」

「あら。何か問題あるの？」

「え？」

「オレは普段から上半身裸でいること良くあるけどな」

「ほら。問題無いって」

「そうか...俺今疲れてるからな...ちょっと判断力が...」

恭介は頭を垂れて、暫し沈黙した。そしてゆっくりと頭を上げた。

「いや...やっぱりおかしいだろう」

「何がおかしいって言うのよ。恭介が裸でいて、誰か損する人でもいるの？」

恭介はゆっくりと周りを見渡した。誰も恭介に同意する者はいなかった。

「もしかして...俺がおかしいのか...？」

「恭介疲れてるのよ」

佳奈多は、その様子を見ながら黙々と冷やし中華を食べていた。全部食べ終えた佳奈多は紙皿と箸を重ねて捨てに行こうとした。

「ごちそうさま。ゴミ箱どこですか？」

「あらかなちゃんったら、恭介の裸見てごちそうさまだなんて」

「何を言ってるんですか？ 冷やし中華のことですよ」

「わかってるわよ。冷やし中華どうだった？」

「おいしくなかったです」

「待て...お前...人に無理矢理作らせておいて...おいしくなかっただと...？」

「嘘言っても仕方が無いじゃないですか」

「その割には全部食べたのですね...」

「残したら勿体ないし。ゴミ箱、中かしら」

佳奈多は中に入っていった。暫くしてすだれの隙間から顔を出して、理樹とあーちゃん先輩を手招きした。

「直枝、ちょっと手伝って。あーちゃん先輩も」

「え？ 何？」

「また勝手に学校の備品持ち込んでるみたいなの。解体する前に仕分けするから、手伝って」

その声に恭介が顔を上げた。

「待て...俺がこんな状態なのに...今そんな事をするのは卑怯だろう...」

「何が卑怯なんですか」

「だから...今俺...疲れてるし...裸だし...」

「だったら余計な邪魔されなくて済みますし、丁度いいです」

「だから...それが卑怯だと...」

「私が脱がせたわけじゃ無いですし」

「いや...それはそうなんだが...」

「恭介お兄さん、お水どうぞ。落ち着きますよ」

「ああ、ありがとう...」

「今バカ兄貴の顔がゆるんだ...きしょっ」

「いや...違うんだ...今のは違うんだ鈴...」

恭介と鈴が言い合いを始めたのをよそに、佳奈多は理樹とあーちゃん先輩に目配せした。

「さっさとはじめましょう」

「僕とあーちゃん先輩だけでいいの？」

「中狭いし、一目見てわかる人だけで手早く済ませた方が効率いいわ」

佳奈多と理樹とあーちゃん先輩は中に入っていった。

「ねえ。もしかして、もうこのまま終わっちゃうの？」
仕分け作業をしながら、あーちゃん先輩が佳奈多に問いかけた。
「そうですね。余計な邪魔が入らなければ、これで任務完了ですね」
「なんかつまらないなあ」
「あなたを楽しませるためにやっているわけじゃありません」
「そうかもしれないけど。もうちょっと派手に、勇者と魔王の戦闘とか、あると思ってたんだけどなあ」
「戦わずに勝つ方がいいに決まっています。無意味な戦闘など非効率です」
「アタシは効率より楽しさを重視したいんだけどなあ」
そこであーちゃん先輩は、何かを思いついたように顔を上げた。
「そうだ。ちょっと能美さんと話してくるわ」
「え？ ちょっと、あーちゃん先輩!？」
あーちゃん先輩は外に飛び出していった。

「あ、あーちゃん先輩。恭介さんだいぶ元気になりましたよ」
「そう。それはよかったわ」
「...このままでは終わらせないからな」
「ええ。アタシもそのつもりで戻ってきたの」
「何？ おい、何を企んでいる」
あーちゃん先輩は恭介の言葉には応えず、そのままクドのそばにいった。
「能美さん。今からクラスチェンジって出来る？」
「え？ クラスチェンジですか？ 今になってですか？」
「そう。今になって」
そう言ってあーちゃん先輩は恭介の所にゆっくりと歩み寄っていった。
「ここまで、かなちゃんと一緒に行動してきて、アタシも随分経験値溜まったと思うのねえ」
「おい...俺にまわりつきながら経験値とかいうのやめろ...誤解されるだろうが」
「あら、誤解じゃなくってよ」
「誤解じゃなかったら悪質なデマだっ！」
「もう。経験値って一体何だと思ってるのよ」
恭介は苦笑の表情で顔を逸らした。
「あの。それで一体、何にクラスチェンジするのですか？」
「そうねえ。今アタシ、権力者ってなってるから、レベルアップして最高権力者」
「わかりましたです」
クドはノートパソコンを取り出し、数文字打ち込んで登録作業を完了させた。数秒して恭介達の携帯が鳴った。
「登録完了しました」
「はい。それじゃあ、今からこの魔宮は、最高権力者となったアタシが接收しまーす」
「は？ お前、何をふざけた事を言っている」
「恭介にもアタシの指示に従って貰いますからね～」
「何を言っている、俺は大魔王棗恭介だぞ。貴様の指示になど」
「困るなあ、アタシの方が偉いんだから、ちゃんと従って貰わないと」
「なんでそうなるんだっ」
「あのねえ。最高というのは、一番上だから最高なのよ。魔王よりも神様よりも、最高権力者の方が上に決まってるじゃない」
「何だその言ったもん勝ちみたいな理屈はっ」
「大魔王だって似たようなモノでしょうが。さてと、勇者サマにもこの事実を伝えないとね～」
あーちゃん先輩は魔宮の中に入っていった。

「あーちゃん先輩何やってたんですか」
「ちょっとクラスチェンジをね～」
「は？ よくわかりませんけど」
「アタシは最高権力者になりました。大魔王棗恭介はアタシの配下に入り、この魔宮もアタシが接收しました」

「あの、意味がわからないんですけど」
「そういうわけだから、勇者様は出て行って下さいね～」
あーちゃん先輩は佳奈多の腕を引っ張り、そのまま背中を押して外に向かわせた。
「え？ ちょっとなんですか」
「勇者かなちゃんは勝利を目前に油断して、結局魔宮から追い出されるのでした～。そういうこと」
「かなちゃんって呼ばないで下さい！」
「はいはい、吠えるのは出てってからにしてね～」
佳奈多は魔宮の外に放り出されてしまった。

「あーちゃん先輩！ これ、どういうことですか！？」
入り口の外、これまで佳奈多と行動を共にしてきた一同が集まっている場所よりさらに外縁に押しやられた佳奈多は、大声であーちゃん先輩に抗議し続けていた。
「随分不満みたいねえ」
「当たり前じゃ無いですか！ 今までずっと一緒にやってきたのに！」
「だってかなちゃん、アタシの要望聞いてくれないんだもの」
「目的が違うって何度も説明してるじゃ無いですか！」
「目的って何よ」
「それは…」
「あー、そうか。直枝君を助け出すことだったわね。いいわよいいわよ、じゃあ直枝君はかなちゃんにあげる」
あーちゃん先輩は一度中に入り、理樹の手を引っ張って出てきた。
「え？ え？ え？」
「そおれ。かなちゃんの所に行けー」
あーちゃん先輩は理樹の背中を押した。バランスを崩した理樹は前のめりになり、は寝るようになって佳奈多の所まで進んでいった。
「おっと」
佳奈多は、自分の胸に飛び込む形になった理樹を受け止め、抱きかかえるようにして理樹の体を支えた。目の前にある理樹の頭を見て、佳奈多は無意識のうちに理樹の後頭部を撫でていた。
「ん…」
理樹は少しだけ声を上げた後は大人しくなり、そのまま動かなかった。一時、その状態が続いた。そして佳奈多は、はっとしたように周りを見た。全員が佳奈多と理樹に注目していた。
「ちょっと！ 何見てるんですか！」
「ええー。さすがにこの状況で、何見てんだとか言われても、ねえ？」
あーちゃん先輩が抗議の声を上げた。
「そういうのじゃありません！ 直枝も、いつまで抱きついているのっ」
「え？ あ、ごめん…」
理樹は佳奈多から離れた。佳奈多は姿勢を戻して、きっとあーちゃん先輩を睨みつけた。
「おお、怖。でも直枝君は返してあげたんだし、これ以上文句言われる筋合いは無いと思うけどなあ」
「そういう問題では無くてですね」
「何、まだ何か不満なの？ ああ、わかったわかった、じゃあ、三枝さんも返してあげるわ。あと、宮沢君もあげる。じゃあ、残りはアタシの所に集まって一、集合一！」

葉留佳と謙吾以外はあーちゃん先輩の元にわらわらと集まった。残された葉留佳と謙吾は、仕方なさそうに佳奈多の所まで歩いてきた。
「ねえちょっとどうするの？」
「どうするって…」
「一体どういう状況なんだ。何か聞いてないのか？」
「何も聞いてないわよ。私も何が何だか…」
佳奈多達は混乱で話し合いもまともに出来ない状態だった。その間に、魔宮の前に集まっていたメンバーは全員が中に入ってしまう、残っているのはあーちゃん先輩と恭介のみになった。
「全員入った？ かなちゃん達は入っちゃだめよー。ねえ恭介、ここってシャッター無いの？ ガラガラピッシャンってやりたいんだけど」
「魔王の館にそんなものがあるかっ。現実で考えろ」
「大魔王とか魔王の館とかいってる人に現実とか言われてもねえ。まあいいか、これでも貼っと

佳奈多たち4人は山を降りた。

「これからどうしようか」

「少し休んだ方がいいんじゃないか？ 差し当たり食堂にでも行って座った方がいいだろう」

「そうデスネ。お姉ちゃん、いこ」

葉留佳が呼びかけたが、佳奈多は話を聞かず、ふらふらと違う方へ歩いて行ってしまった。

「ちょっとちょっと、どこへ行くんデスカお姉ちゃん」

「葉留佳は心配しなくていいのよ」

「...イヤ、そんな意味不明な事言われるとかえって心配になるんですケド」

「こういう想定外のことが起きても大丈夫なように、私はちゃんと準備してきたの。非常事態だし。だから葉留佳も直枝も、何も心配しなくていいの」

「うん、わかったよ。でも僕たちもついて行った方が良さそうだね」

そう言って、理樹は謙吾に目配せした。謙吾はやれやれといった感じで首を振り、それでも理樹達について行った。

「東ローマ帝国を継承したのがロシアだと知ったときのような、何とも言えない顔をしているな」

放送室。佳奈多達を迎えた唯湖は、いすを勧められてもただ座るだけで惚けたままの佳奈多を見て、そんな台詞を言った。他の3人も何も言わなかった。

「とりあえず事情を聞きたいのだが...。疲れているのなら無理にしゃべらせるのは確かに酷だとは思いますが...」

唯湖は4人の顔を順番に見渡した。佳奈多、理樹、葉留佳、謙吾。あーちゃん先輩に放り出された4人が、狭い放送室の中で雁首をそろえていた。唯湖はため息をついて、そして葉留佳に言った。

「葉留佳君、クドリャフカ君をソ連人呼ばわりしていじめるのはやめた方がいいと言っただろう」

「はるちんそんな事してませんヨ...」

「やっと反応したか」

「何ではるちんにだけそんな意地悪するのデスカ」

「佳奈多君はどう考えてもクドリャフカ君をソ連人呼ばわりしそうにないからな」

佳奈多は反応しなかった。

「ふむ。佳奈多君のイメージカラーはクリムゾンレッドらしいがこれはソ連の国旗の色でもあるから、佳奈多君もソ連人だな」

佳奈多は反応しなかった。

「...姉御、もしかしてそのソ連人という言い方気に入ったのですか？」

「まんざらでもない」

「貴様が呼ばれてるわけでは無いだろう...」

「私もクドリャフカ君のようなプリチーソ連人になりたいのだ」

「自分でプリチーとか言うかこの女...」

謙吾が呆れたように吐き捨てた。その様子を見て、唯湖は笑みを浮かべてうんうんと頷いた。「いつもの調子を取り戻してきたようだな。どうだ、そろそろ何があったのか、私にも話してもらえないか？」

理樹がほうけた顔で聞き返した。

「えっ。来ヶ谷さんはずっとそれを待ってたの？」

「そうだが？ 一体なんだと思ってたんだ？」

「中国かぶれの佳奈多さんにソ連の話を持ち出して嫌がらせでもしてるのかな、とか...」

「中国かぶれ？」

「...やめて直枝、あの服の話は...しないで」

ようやく佳奈多が口を開いた。

「正直何の話がよくわからんな...」

「どうせ二人でコスプレプレイでもしてたんじゃないですか？ ケッ！」

「違うの...いたる先生が...」

「あー」

しばし気まずい沈黙が流れた。違う話題を探しても頭が回らない、回らないのをいいことに沈黙している。しかし沈黙も飽きて全員が時計の針の音が気になりだした頃、唯湖が動いた。

「どうやら私一人では荷が重いようだな」

そう言って唯湖は全館放送のスイッチを入れてマイクに向かって話し始めた。

「私は、東の魔王・来ヶ谷唯湖である。今、勇者二木佳奈多が私の元で保護されているが、落ち込んでいて私の手に負えない。誰でもいい、手を貸して欲しい。私は、東の魔王・来ヶ谷唯湖である」

そう言って唯湖はスイッチを切った。

「...姉御はいつも堂々としてますネ」

「いや、実を言うと結構恥ずかしい。人様に顔向け出来ないな。これでたくさん人が来てしまったらどうしようと思っている」

たくさん来てしまった。

「放送室は広くないんだぞ、窮屈では無いか」

「あなたに呼ばれたから来たのではありませんか」

「いや、こんなに呼ぶつもりは無かった...」

「あの二木佳奈多に高値で恩を売りつけられるいい機会だと聞けば、集まる人も多いんじゃない？」

「うむ、どうやら話の趣旨が間違っって伝わっているようだ」

「じゃあどういう意味なんですか」

「佳奈多君と愉快的仲間達が大魔王討伐に行ったら凹まされて帰ってきたから事情を聞きたい、という趣旨だが」

「放送の内容と大して変わらないじゃ無いですか」

「...変わらないと何か問題でもあるのか？」

「放送したのが来ヶ谷唯湖ですし」

「私はどういう人間に見られているんだ...」

唯湖はちょっと凹んだ。

「要するに。あの例の裏山の騒ぎで一体何があったのか、聞き出したいということですか？」

「まあ、そういうことだ」

「宮沢様、話して下さいませんか？ 私の顔を立てて」

「俺が話さない程度であなたの美しい顔が潰れたりすることは無いでしょう」

佐々美が黙ってしまったので、古式が交代した。

「話してくれないのなら、私、また屋上に行きます」

「もうそういう事はしないと約束したじゃ無いか」

「神北さんが何をしているのか気になります」

「大したことはしてないと思うが」

「神北さんはよく転ぶので、私も巻き込まれて、屋上から転げ落ちるかもしれません」

「そうならないよう気をつけてくれ」

「神北さんが転ぶのを黙ってみていると、宮沢さんはそう仰る」

「そうは行ってない...何故そう神北にこだわる」

「真剣白刃取り、私には教えてくれなかった...」

「いや、あれは...」

「だったらせめて、裏山で何があったかくらい教えてくれてもいいじゃないですか！」

「何故そうなる...」

謙吾は反論出来なくなった。しばらくむずかしい顔をした後、語り始めた。

「まあいいだろう、元々隠すような事じゃない」

「なら最初から話せ」

「長々と説明するのは苦手だ。だから簡潔に説明する。秘密基地...いや魔王の館と言うだったか、その魔王の館が準備中だったから待機していたら冷やし中華が出てきて、だがまずかった。恭介が脱がされて二木は魔王の館に入っていった。理樹とあーちゃん先輩も入っていったが、あーちゃん先輩が二木と理樹を放り出した。よくわからないが、俺も放り出された。ついでに三枝

も放り出されたので、4人で山を降りてきた。以上だ」

「え？ ちょっと今の説明だとはるちんがかなりついでのおまけポインですよケド」

「葉留佳君はおまけでかまわんが、今の説明では結局事情がよくわからん。理樹少年、君の口から説明してもらえないか」

「うーん。あんまり内容が変わらないと思うけど…。じゃあもう少し前から説明するね。ずっと魔王の館に泊まり込んでたから汗くさいなーと思って、でも鈴の目の前で着替えるのもなんだから入り口に近いところで着替えてたら恭介が社会に対する不満を未消化のまま終わらせても停滞を招くだけだと思うけどどうかとか話しかけてきたから着替えながら話してたら、誰かに覗かれた感じがしたから入り口を見てたら突然佳奈多さんが入ってきて」

「やるなあ佳奈多君」

「ち、違うんです！ たまたま、ほんとにたまたま直枝が着替えてただけ、というかその最初に覗いたのあーちゃん先輩で、あーちゃん先輩が中を見ろって言うから、私も！！！」

「そんな必死に抗弁しなくても…」

「それで恭介と修羅場になったのか」

「だからそれは…棗先輩、いえ大魔王棗恭介が、直枝のこといかがわしい目で見るのがいけないんです！」

一同は一瞬沈黙した。

「…今ここに美魚ちゃんがないのが残念ですヨ」

「え？ え？ 今、私、もしかして変な事言った！？」

「いいや」

「しかし佳奈多君も意外と可愛い考え方をするものだなあ」

「え？ ええー！？」

「大丈夫だよ佳奈多さん、僕は恭介のこと大好きだけど、恋人として見てるのは佳奈多さんだけだから」

「と、突然何を言うのよ！」

「え、ごめん。佳奈多さんに余計な心配して欲しくなくて」

「そ、そう。ありがとう」

佳奈多と理樹がいい感じになったので葉留佳がふくれっ面になった。取りなすように唯湖が話を戻した。

「で、だ。私が聞きたいのは確かにそういう話だが、そこから先何があったのかも一応把握しておきたいんだが」

「うん。恭介が持ち込んだ備品を僕と佳奈多さんとあーちゃん先輩で整理してたら、突然あーちゃん先輩が外に飛び出して、佳奈多さんと僕を外に放り出しちゃった。そのあと謙吾と三枝さんも放り出されたから、仕方なく山を降りた。以上、かな」

「結局謙吾少年が言っていたこととほとんど変わらんな」

「でも実際、その通りなんです」

落ち着きを取り戻した佳奈多が、目を閉じがちにしながら言った。

「敢えて私から補足するなら…。このまま終わるのはつまらないから、ひっくり返してしまおう。どうもそういう意図みたいです」

「で、ひっくり返されたと」

「ええ。ものの見事に」

「大魔王は？」

「さあ。無事だといひんですけど」

「それは、大魔王が勇者に身の安否を心配されるような状況という事なのか」

「ええ。もう、なにがなにやら」

佳奈多はまた黙ってしまった。他の3人も、特に葉留佳はそれに同意だとでも言うように同じく黙ってしまった。

「葉留佳君にもわからないのか」

「わからないという程でもないですよケド。ただ、なんか放り出されて仲間外れみたいにされたのがムカつくといいますカ」

「それは、君はお姉さんと一緒にいなさいというせめてもの情けではないのか」

「そういう話なら姉を困らせて楽しむ方もやってみたかったですヨ！」

「葉留佳…」

「あ、いや…とにかくですネ、私らの希望も意志も訊かずに、勝手にこういう事されたのがなんか納得行かないというかですネ」

「そうだし」

謙吾が声を張り上げた。

「話が違う...最初に聞いてたのと話が違うんだ...！」

「最初に聞いてた...？」

佳奈多が訝しげな顔をし、葉留佳と理樹は慌てて腕を振ったりして佳奈多の気を惹こうとした。その間も謙吾は吠え続け、椅子から滑り落ち、地べたに這い蹲るような格好になっていた。

「俺だってあの秘密基地でずっと遊んでいたかった...！」

「いや、今こんな所でそういう事言われるのはさすがに...」

みんな何も言えなくなってしまった。

「君たちは結局...」

唯湖が、少し呆れたように言った。

「佳奈多君よりも恭介氏の元にいたかった、と。結局はそういうことか？」

「いや、そういうわけじゃない...と思うよ」

「そもそも私ら追い出したの恭介さんじゃなくてあーちゃん先輩デスシ」

「どっちでもいい。佳奈多君よりも、大魔王...いや今は違うのか、ええと今あちらさんはなんと名乗っているんだ？」

「最高権力者」

「あー、そうか。その、佳奈多君よりも最高権力者の側にいたかったと。そういうことを言いたいのか？」

「そういうことではなくてデスネ...」

「俺はただ、俺の意志が踏みにじられた事に怒っているだけなんだ！」

「人の意志も希望も訊かずに勝手にやらかしてくれた、そういう話か。だがな...まあ私が言えた口ではないが、恭介氏も、佳奈多君も、どちらかというところそういう人間だぞ。そんな人間に君たちはずっとつき従ってきたではないか」

「...私、そんな人間だったんですか？」

「うむ。自覚した前」

佳奈多はかなり凹んだ。

「大丈夫だよ佳奈多さん、恭介だってやってることだよ」

「あなたの大丈夫の根拠、この場合なんだかすごく腹立たしいわ...」

「ええっ、どうして!？」

「嫉妬でしょ」

「嫉妬に決まってるじゃない」

「直枝さんはそろそろ嫉妬心というものを理解するといいと思います」

「そうなの、佳奈多さん？」

佳奈多は理樹の問いかけには答えず、代わりに顔を赤くしながら肩を震わせていた。

「直枝君はそういう事直接本人に訊いちゃう人啊」

その場にいる殆どが呆れ果てた。反応しなかったのは二人だけだった。謙吾はまだ地べたに這いつくばったままで、葉留佳は不満そうに足をぷらぷらさせていた。

「三枝さんは結局何が不満なんですか？」

葉留佳は佳奈多の方をちらりと見て、目線を戻してぼそりと呟いた。

「...なんか姉が、当初の目的を見失ってるんじゃないかなー、とか...」

「当初の目的？」

佳奈多は顔を上げて葉留佳を見た。暫し考えて、そして理樹の方を見ながら言った。

「大魔王棗恭介を倒して直枝を救出する事...よね。でも、直枝はこうして救出出来てるわけだし...大魔王棗恭介もある意味倒されたわけだし...。そう、だから、目的は達成出来てるはずなのよ」

「お給料は？ お給料はちゃんと貰ったのですか？」

初が突然前に出てきて佳奈多に詰め寄った。

「え？」

「壺の代金を弁償するから勇者の仕事を引き受けたのでは無かったのですか？」

「あ、ああ、そうね、そうだったわ。でもそれは、クドリャフカが向こう側にいるし...ちょっとよくわからないわ」

「貰える当てが無いと言う事ですか!？」

「そうかも...。でもどのみちこの仕事だけで壺の代金は払えそうに無いし。それにお金が目的っていうのもなんだか」

「何を言ってるんですかッ！」

初が声を張り上げた。

「お金を甘く見ないで下さい！ あぶく銭ならいざ知らず、真っ当な労働の対価として得た報酬なら、たとえ1円でもきちんと請求して受け取るべきです！」

「え？ え、ええ、そうね、ごめんなさい」

「それで？ お仕事がちゃんと終わったのに、お給料を受け取る当てが無いと」

「それは問題だな」

一人の男子生徒が歩み出て初の隣に立った。

「ユニオン山本！」

「労働問題ではこの学校で彼の右に出る者はいないという、あのユニオン山本か！」

「右では無い、奴は伝説の左だ！」

「サウスポーか！ 三枝とどっちが強いんだ」

周囲は騒がしくなった。ユニオン山本と呼ばれた男子生徒はそれを意に介さず、佳奈多に話しかけ始めた。

「給与の未払いは契約不履行にあたりますが、裁判となれば、そもそも相手方に支払う意志が無いのか、意志はあるが支払い能力が無いのか、とかそういった論争になります。後者だと事前交渉もせず裁判に持ち込めば却って不利になりますが、一人で交渉に望むのは難しいですし、労働組合に加入した上で団体交渉というのが一番確実です。弁護士を代理人に立ててもいいのですが、その場合相手方から交渉を拒否される可能性もあります。ですが労働組合との交渉を拒否すれば不当労働行為になり、最終的に訴訟になっても俄然有利になります。あとよく勘違いしてる人がいますが、労働基準監督署は行政警察であって相談所ではないので、行政命令が出るような重大案件でないと取り合ってもらえません。職業安定所ならなおさらです」

「...うん、知ってる」

「二木さんは弁護士志望だったか。これは失礼した」

ユニオン山本はあっさり引き下がった。

「それで、お金はどうするんです？」

初は引き下がらなかった。佳奈多は一度深呼吸して、初に答えた。

「今は受け取れない。クドリャフカがあっちにいるし。あーちゃん先輩に捕まってるのか。自分の意志で残ってるのかはわからないけど、どちらにせよ戻ってこないのならこっちから聞きに行くわ。あの秘密基地...魔宮？ 最高権力者の公邸？ 今は何になるのかしら。なんであれ、あれもちゃんと撤去する。やっぱり有耶無耶にはしておけないもの」

「あーちゃん先輩が邪魔するかもしれませんよ？」

「邪魔するのなら排除します」

「...だ、そうですよ。三枝さん」

話を振られた葉留佳は、一瞬きょとんとしたが、すぐに初の意図を理解した。

「う、うん。そうだね、ありがと」

「謙吾少年はこれでいいのか...？」

「あ、ああ...」

謙吾は一瞬惚けていたが、立ち上がって胴着の裾を払いながらいつもの引き締まった顔に戻って、言った。

「あの人に文句を付けに行くという話なら喜んで乗る。俺もちょっと言ってやりたい事があるからな」

「邪魔するのなら排除するとは言ったけど文句を付けに行くわけじゃ無いわよ？」

「そうなのか？ まあいいか、二木がそういうつもりなら。今のリーダーは...」

謙吾はちらりと理樹を見た。

「二木でいいんだよな...？」

「うん。佳奈多さんが、今の僕たちのリーダーだよ」

「顔ぶれが違うだけで、なんだか最初に戻ってしまったような気がするわ...」

佳奈多は軽く溜息をついた。

「初心を取り戻したという事でいいのではなくて？」

「初心ねえ...勇者の敵が大魔王じゃ無くて最高権力者になってるけど、いいのかしら」

「ふむ。では君たちに旗印を授けるとするか」

唯湖はルーズリーフを1枚取り出して、そこに一言書き込んだ。

「君たちはこれを名乗るといい」

「...はあ」

「東の魔王からのプレゼントだ」

「そうだね、あの人に対抗するならこれくらいなのってもいいかもね」

理樹が苦笑しつつも替同し。葉留佳と謙吾も同意した。佳奈多はやれやれといった表情でルー

勇者佳奈多と百万円の壺

第9話

『姉妹』の結束

あの坂を登れば海が見える。そんなことを言ったのは一体誰だろうか。裏山の坂を上りながら、佳奈多はそんなことを考えていた。魔王討伐というしょうもない任務の為に上るのは、そろそろ終わりにしたい。そうも考えていた。そして坂を登り切った棗恭介言うところの魔王の館のある場所に辿り着いたとき、佳奈多の目に飛び込んだのは彼女が予想だにできなかった光景だった。

魔王の館の入り口の前で、自称大魔王であるところの棗恭介が、四つん這いになって地面に這いつくばっていた。何かから逃げたくて、しかし逃げられない、そんな苦悶の表情を浮かべていた。ズボンが何かに引っかかって動けない、佳奈多の目には一瞬そう映った。正確にはそれは違った。恭介のズボンは引っかかっていたのでは無く、人の手によってしっかりと掴まされていた。あーちゃん先輩の右手が恭介のズボンの裾をしっかりと掴んでいた。恭介のズボンを守るはずのベルトは、原因はわからないが外れていて、ズボンは後ろにずれて恭介の肌は露出していた。あと少し、ほんの少しだけあーちゃん先輩が右手に力を入れれば、恭介のズボンは脱ぎ降ろされてしまう。まさにそんな状況だった。

佳奈多はその状況を前にして、何も言葉を発することが出来ず、ただ立ち尽くすことしか出来なかった。佳奈多が立ち止まってしまったので、すぐ後ろにいた理樹が軽くぶつかってしまった。

「どうしたの佳奈多さん、後ろつかえて——」

佳奈多の後ろから前方の状況をのぞき見た理樹も、また固まってしまった。

「どうしたんデスカ理樹君——あっ」

理樹の後ろを歩いていた葉留佳も、また絶句した。葉留佳の後ろを歩いていた謙吾は、背が高いため声が発する前に、前の方で何が起きているのかを見てしまった。このまま何も見なかったことにして、回れ右をして山を下りた方がいいのだろうか。謙吾はそう思った。

誰も何も言わなかった。その場にいる全員が無言で立ちすくんでいる、そんな状態が数分続いた。何か言った方がいいのだろうか、山を登ってきた4人がそんなことを考え始めたとき、あーちゃん先輩が口を開いた。

「...わざとじゃ無いのよ？」

「はあ」

佳奈多が気の抜けた声で返した。あーちゃん先輩はその返答が不服そうだった。

「信じてくれないの？」

「普段が普段ですし」

「普段の行いがあるからこそ信じて貰えると思ったんだけどなあ」

「そう言われても。私や棗先輩の前ではいつもふざけてばかりじゃ無いですか」

「一応人は選んでるつもりなんだけどねえ」

そう言った後、あーちゃん先輩ははっとしたように顔を上げた。

「あたし今何してると思われてるの？」

「この間上を脱がせてたので、今度は下なのかな、と」

「かなちゃんあなた一体何を言ってるの？」

「えっ？」

「そりゃあ、かなちゃんは普段から直枝君にそういう事してるのかもしれないけどさあ」

「はあ！？ ちょ、ちょっと一体何を言ってるんですか！」

「だってかなちゃんが言い出したことだし」

「違います！ 私、そんなことしてません！ してませんから！」

「そうだよ！」

理樹が佳奈多を弁護する為に、一步前に進み出た。

「佳奈多さん、最近は無同意無しにそういう事はしないよ！」

「昔はしてたのか……」

「最近でも同意があればするんデスカ...」
「直枝君...かなちゃんをかばったつもりなんだろうけど、ううん、だからこそ、その発言は無いと思うわあ」
「えっ？ えっ？ あれ？」
自分の弁護が裏目に出て、理樹は戸惑っていた。佳奈多は肩を震わせていた。
「違うんです...違うんです...」
「うん。何が違うのか聞いてあげるから、言ってみな」
「直枝がズボンにお茶こぼして...洗濯しないとイケないし、だから脱がせたんです...それだけです...」
「うん、わかったけど.....普通はそういう事しないからね」
「あーちゃん先輩こそ！ 何してるんですか！」
「あたし？ あたしは、恭介が逃げるから捕まえてるの」
「棗先輩のズボンずれてるじゃ無いですか」
「だからわざとじゃ無いって言ってるじゃないの」
「そう言われても」
「じゃあ、中立の立場の人間に説明を求めたらどうだ？」
謙吾が仲裁するようにそう言って、あーちゃん先輩の傍らに立っている鈴を見た。鈴はその視線に気づいて顔を上げた。
「ん？ あたしか」
「ああ。何があった？」
「あたしはあー姉様の味方だから、中立というわけでは無いぞ」
「そうなのか？ まあいい、説明してくれ」
「話すすと長くなる、どこから説明したものやら」
「長くてもいいから、わかるところから説明してくれ」
「そうか。じゃあ最初から話すのだな」
鈴は状況の説明を始めた。

「鈴。あーのことを姉様と呼ぶのはやめなさい」
「いやじゃボケ」
「いやじゃじゃなくてだな、あーはお前の姉じゃ無いだろう」
「何を言うか。あー姉様はあたしが姉と認めた人だぞ。なぜ否定する」
「鈴。勝手に姉を増やしてはいけません」
「簡単に増やせないことくらいわかっている、だが兄の嫁ということにすればそれはあたしにとって姉になるじゃないか。おお、われながら素晴らしいアイデア」
「...鈴。そういうのはまずお兄ちゃんの承諾を得てからにきなさい」
「それって、いちいち兄の許可を得ないといけないものなのか？」
「当たり前だっ。お前、なに人の嫁勝手に決めてるんだっ」
「あー姉様いい人だからうちの兄とくっついたらいいなと、そう思っただけなのに...」
「いやそれは...。じゃあせめて、あーのことを姉様と呼ぶなら、俺のことも恭介お兄ちゃんと呼びなさい」
「なんでじゃボケ」
「いや...なんでじゃはこっちの台詞なんだが...」
「お兄ちゃんじゃないものをお兄ちゃんとは呼べない」
「俺はお前の実の兄だぞ？」
「認めたくないものだ、若さゆえの過ちというものを」
「過ちってなんだ...」
「愚かな兄を持ってしまった、己の人生に対する」
「鈴は俺のことをなんだと思ってるんだ」
「バカ兄貴」
「...せめてバカは取ってくれ...」
「だったらバカな行いをするのをやめてくれ」
「...確かに、己の行動の全てが賢明だとまでは、言わない、だが、俺は鈴の前でそんなに愚かな行動をしてきたか？」
「生まれてこの方十数年間、ずっと兄の背中を見ながら育ってきたが」
「そうだ。鈴はいつも俺の後ろから」

「こいつあほだなー、とずっと思ってた」

「り、鈴、お前…。そこにいるあー、お前が鈴に変な事吹き込むから、鈴がぐれたらろうがっ！

」
「あたしの所為にしないでよー。何にもしてないわよ？」

「そうだ、あー姉様の所為にするな。そもそもあたしはぐれてなどいない」

「お兄ちゃんをいじめるような子は、ぐれてるんですっ！」

「あたしお兄ちゃんいじめなんてしてない」

「...どうせまた、お兄ちゃんという生き物はいないとか言い出すつもりだろう...」

「あ、そうか。訂正する、あたしはバカ兄貴をいじめてなどいない」

「うああああああああああっっっっっ！！！！！！」

「そしてうちの兄が逃げだそうとしたから、あー姉様がとっさに捕まえた。ズボンの裾を掴んだらたらたまたまベルトの金具が壊れた。それで足がもつれて、兄は地面に四つん這いになった。あー姉様はズボンを放さなかったのだから、兄のズボンはちょっと脱がされた。だいたいそんなところだ」

「つまり鈴が原因という話か」

「あたしだってそれなりに責任は感じている。だからこうして兄の行く末を見守っている」

「むしろ鈴にこんな姿を見られたくは無かった...」

「恭介、意見していいか？ 脱がされたのならはき直せばいい話だと思うし、鈴の前でそこまで恥をかかずに済むと思うが？」

「その為にはあーの方に戻らなければならない...」

「戻るって...たかだか数Cmだろう」

「1mmたりとも戻ってはいけない、戻ったら負けなんだ...」

「なんでそこまで...」

「俺は...自由でいたいんだ...」

恭介が苦痛の表情で語り出した。

「もしここで俺が、ズボンを直す為に戻るとするだろう。そうするとあいつはきつこう言うんだ、『逃げようとしていた恭介が、立った1mmでもあたしの方に戻って来た、これは二人の関係にとって大きな進歩よね』、と」

「さすが恭介よねえ。あたしのことよくわかってくれてるわあ」

「そら見ろ...」

「こんな感じで、かれこれ小一時間こーちゃく状態が続いている」

「一時間って...」

「そろそろバッテリーが持たないと思う」

そう言って鈴は、魔王の館の入り口の方を見た。美魚や小毬たちが様子をうかがっていて、美魚は携帯で恭介の様子を撮影し続けていた。

「...最近の携帯は高画質な録画が出来るのはいいのですが、バッテリーの持ちが悪いのが難点ですね...」

「撮影だけで一時間って持たない過ぎじゃ無いですか？」

「部屋を出てから充電してませんし。それにネットで生中継しているので、たぶんその所為では無いかと」

「ネット中継って...美魚ちゃん残酷な事しますネ」

「恭介派の方たちに現状をお伝えするのが、この場にいる者としての義務だと思ったので」

「すごいんだよ、視聴者500人超えてるの」

「校外の人も大勢見てるみたいですねえ」

「恭介の背筋にみんな興味津々だからな」

「うん、それは違うと思うな」

「...括約筋ですよ」

「うん、それも違うから」

「お前ら俺を見世物にするんじゃない！」

「であれば恭介さんが変な意地張らずに戻ればいい話だと思うのです」

「私としては脱がされる方に一票入りたいですね...」

恭介は泣き出しそうな顔になり、地面に頭を埋めた。暫くそうした後、顔を上げて佳奈多の方を見ながら話し始めた。

「二木...いや勇者佳奈多。今俺は、勇者の正義感に問いかけたい。この現状を見てどう思うかと。確かに俺は大魔王などと名乗って混乱を作り出した。生徒を煽って反乱まがいのこともした。いつか勇者に討たれる、当然その覚悟はあった。だがしかし。しかしだ。こんな屈辱を与えられることは想定していなかった。大魔王としての地位も誇りも名誉も全て、最高権力者を名乗る女に奪われてしまった。見ての通り不当な屈辱まで与えられている。勇者佳奈多よ、それでもお前は、俺を敵とみなすのか。今お前が戦うべきは、そこにいる最高権力者のあーじゃないのか」

佳奈多は恭介の言葉を黙って聞いていた。そして恭介が話し終えるとそっと横を向き、口元を押さえて、肩を震わせ出した。

「お、お前、笑うなんて失礼じゃないかっ!？」

「だ、だって。こんな状況で、四つん這いであーちゃん先輩に脱がされかけてるのに、そんな決め台詞みたいな事言われても」

「イヤシカシ、うちの姉が吹き出すなんて珍しい」

「そうだよ恭介、佳奈多さんが吹き出しちゃうなんて滅多に無いことだよ。こんな状況に立たされても尚、佳奈多さんを吹き出させる事が出来るなんて。やっぱり恭介はすごいよ。さすがだよ恭介」

「理樹...お前は時々変な方向に俺のことを持ち上げてくれる...」

「ごめん恭介、僕なりに恭介を助けようとしたんだよ」

「ああ、それはわかってる」

「でも僕じゃ事態を打開できないみたいだ」

そう言って理樹は、まだ肩を震わせている佳奈多の元に歩み寄った。

「佳奈多さん。恭介のこと、助けてあげられないかな？」

理樹の言葉を聞いた佳奈多は、深呼吸をして息を整え笑いを鎮めた。

「——そうね。さすがに今のこの状況は理不尽だとは思いうし。それに妹の前で恥はかきたくないものよね」

「うん、それに関してはもう手遅れだと思うけど。僕たちが出会ったときから」

「理樹までそんなことを言うのか...」

「だって鈴がそう言ってるよ」

「あたしはずっとそれを主張してきたのに、兄が聞く耳を持ってくれなかった」

「鈴は兄という存在について何か誤解している...」

「いい加減現実を認めたらどうだ恭介」

「いやだ。俺はカッコいいお兄さんでいたいんだ...！」

「あたしはカッコいい恭介よりおもしろおかしい恭介の方が好きだなー」

「お願いですからあなたは黙ってて貰えないでしょうか...」

「えー。ひどおい」

あーちゃん先輩が不満気な顔をしたので、外野までもが恭介に野次を飛ばした。

「別にかっこ悪くてもいいじゃないか」

「恭介さん。かっこ悪くたって、恭介さんは恭介さんだよ」

「どんなにかっこ悪くたって、みんな恭介さんの味方ですよ...？」

「そう言ってお前ら俺の味方全然してくれて無いじゃないかっ！ 今、現に！」

恭介はしくしく泣き出した。そろそろ介入して止めるか、佳奈多がそう思って足を踏み出したとき、携帯を手にしたクドが駆け寄ってきた。

「佳奈多さん。来ヶ谷さんから伝言です」

「来ヶ谷さんから？」

「はい。『あの決め台詞はいつ言うつもりだ？』だそうです。」

「こっちの状況が見えてるかのよう言い方ね...」

「見えてるのでは無いでしょうか。ネット中継してますし」

「ああ、そういえばそうか」

佳奈多は携帯を手に撮影を続ける美魚の方を見た。佳奈多は一瞬考えた。

「あれ、さっきバッテリーが切れそうだった」

「最近モバイルバッテリーという便利なものがあるのですよ」

「そう。じゃあこのまま中継が続くのね」

「そうなりますね。で、決め台詞って何ですか？」

「ええ、なんだったかしら...」

佳奈多は一瞬悩み、そしてポケットに唯湖から渡された紙が入っていたことを思いだした。佳奈多は紙を取り出し開いて中身を確認した。クドも中身を覗き込んだ。

「どういう意味ですかあれ？」

「ここに訊かないで...」

クドの携帯が震え、クドは開いてメールを確認した。

「『さっさと見え』と来ヶ谷さんが言ってます」

佳奈多は再び美魚の方を見た。中継は続いていた。ああ、あの人は私に恥ずかしい事させて楽しみたいだけなんだな、と佳奈多は思った。様子を察した理樹が佳奈多に歩み寄って、佳奈多の手を取って言った。

「大丈夫だよ佳奈多さん。僕がついてる」

「うん。ありがと...」

佳奈多は一瞬頬を赤らめた。そして気合を入れるように首を振り、顔を引き締めて、あーちゃん先輩の方を向いた。

「あーちゃん先輩！」

「は、はい。なに？」

「そろそろ棗先輩...えっと大魔王棗恭介を解放してあげてください」

「えー？ やあよ」

「やあよじゃないです、放してください」

「どっちに転んでもおいしい状況なんて、滅多にあるものじゃないのよ？ それをみすみす手放せというの？」

「おいしいって...やっぱり脱がせること考えてるんじゃないですか」

「あたしが脱がせるんじゃないの。恭介が、自分の意志で、あたしと鈴ちゃんの前で、ズボンを脱ぐの」

「お前、それじゃ俺が変態みたいじゃないかっ」

「それが嫌ならもう一つの方を選べばいいじゃない。あたしとしてはそっちの方がいいし」

「だからそれは嫌だと...」

「じゃあ脱ぐの？」

「俺は鈴の前で脱ぐような変態兄貴じゃ無い...」

「確かにあたしの前で脱いだことは無いかもしれないが、しかしこいつは理樹の前ではよく脱いでいた」

「うわー」

「お前、それはたぶん、水遊びとかしてるときに着替えてただけだろう...。それに謙吾や真人も一緒にいたはずだ」

「いたっけか？」

「記憶に無いな」

「お前ら...」

佳奈多はその様子を見てはあと溜息をつき、一息置いてから改めて言い直した。

「あーちゃん先輩。もうそれくらいで放してあげてください」

「放したくないなあ」

「あーちゃん先輩。それ以上横暴を続けるようなら...その...」

佳奈多は手にしていた紙を改めて見て、そして続けた。

「私達、東リトルバスターズが許しません！」

「え。今、なんて？」

「2回も言いません」

「ほんとによく聞き取れなかったんだけど」

「私達が、許しません」

「その間が聞こえなかったんだけど」

「ひ、東リトルバスターズ、です」

「なに、それ？」

「知りません！ 来ヶ谷さんがそう言えって言うんです！」

あーちゃん先輩は恭介と理樹を交互に見た。

「あの一、あれ？ あたしの所為でリトルバスターズが東西に分裂したとか、そういう設定なの？」

「だから私に訊かれても...」

「かなちゃんが言ったんじゃないのよー」

「そうですね。じゃあそういうことにおきましよう、しておきます」

「うん、じゃあ、そういうことでいいわよ。で、西側の最高権力者であるあたしは、東側におしおきされちゃうの？」

「おしおきとまでは言いませんけど、そろそろ大魔王棗恭介を解放してあげてください」

「見返り無しに？」

「見返りって、あなた…」

「かなちゃんはいいわよねー。随分といい思いしてるみたいだし」

そう言ってあーちゃん先輩は物欲しそうに佳奈多の手元を見つめた。佳奈多は理樹の手を握ったままだった。

「えっ！？ いや、あの、これは、違うんです」

「何が違うっていうのよ」

「だからその…直枝もいつまで握ってるのっ」

「え？ あ、ごめん」

佳奈多と理樹は手を放し、ふたりとも赤くなって目を逸らしてしまった。

「ほらまた見せつけてくれちゃって。それであたしには恭介を放せて言うの？」

「そう言われても。さすがに私が勝手に、放さなくていい、なんて言うわけには行きません」

「黙って見逃してくれるだけでもいいのよ？」

「それも無理です。その、勇者の立場と言いますか…」

「ナルホド。事態を打開できずに困っておるようデスナ」

葉留佳が両手をひろげて佳奈多の前に出てきた。

「ではこのネゴシエーターはるちんが、大魔王棗恭介と交渉してこの戦乱の世を和平に導いて見せまショウ」

「あなたの称号はひーらーでは無かったのですか？」

「…美魚ちゃん今意図的に省略したよね」

「いいえ決してそんなことは…」

「まあイイデス。実力で名誉を勝ち取って新たな称号を手に入れて見せますヨ」

そう言って葉留佳は恭介の目の前に歩いて行き、目線を合わせる為にしゃがみ込んだ。恭介は一瞬目を逸らした。

「そういうわけなので、妥協して下サイ」

「俺をあーに差し出す気が…」

「まあ、なにがしかは差し出して貰わないと。そうですね、例えば世界の半分とか」

「そうか、世界か。いやそれで済むのなら」

「実は既に契約書を用意してあります」

「やけに用意がいいな」

「はるちんこう見えて出来る女ナノデ」

葉留佳は契約書を恭介が読めるように差し出した。

「えっと…。大魔王棗恭介は、世界の半分以上を最高権力者あーちゃん先輩に引き渡す。残りの半分は東リトルバスターズのものとする」

恭介は顔を上げて縋るように葉留佳を見た。

「俺の分は？」

「あんたこの状況で自分の分け前主張できると思ってるんデスカ？」

「いや…その、せめて俺の身の安全を保証しては貰えないだろうか」

「はあ。どうして欲しいと？」

「東側に行きたいです」

あーちゃん先輩がええーと言いたげな顔をしたのを、葉留佳は読み取った。

「それでは西側が納得しないデス」

「人道的見地から亡命させて下さい」

「人道的見地からあー姉様の思いを叶えて欲しい…」

「あなたの妹さんはああ言ってますケド」

「なら政治亡命を希望します」

「ただの痴話喧嘩を政治問題にされてモ」

「じゃあどうしろって言うんだっ…ッ！」

恭介は泣き顔になって両手を地面を叩きつけた。

「俺は、こんな事の為に…こんな事になるなら…これじゃ、呼びかけに応えた意味が無い…」

「なんで君たちはそういう事を言い出しますカネ」

あーちゃん先輩が恭介のズボンをつかんだまま佳奈多に話しかけた。

「かなちゃん、呼びかけってどういうこと？」

「さあ。私にも何の事だか」

葉留佳が慌てた表情になった。困惑と怒りが入り交じったまま、恭介を問い詰めるように顔を近づけた。

へっへっへ。

「恭介さ〜ん...！」

「いや...今のは確かに俺が悪かった...」

佳奈多はゆっくりと葉留佳に歩み寄っていった。

「どういうこと、葉留佳？」

葉留佳は観念した表情になった。

次回

真実を知った佳奈多。知られてしまった葉留佳。全てを知っていたつもりの恭介を横目に、あーちゃん先輩は鈴に優しく微笑みかける。信じるべき善意は結局どこにあったのか、そこに本当に悪意は無いのか。その全てを佳奈多は知ることが出来るのか。

次回 勇者佳奈多と百万円の壺、最終話「世界の中心で茶碗と叫ぶ謙吾」

勇者佳奈多と百万円の壺

最終話

世界の中心で茶碗と叫ぶ謙吾

「茶碗じゃ無くて壺ですけど」

三枝葉留佳がE組の教室に入ってきたとき、謙吾はすぐにはそれに気づかなかった。おかしい、いつもならすぐに邪念を感じ取るのに。そう思って謙吾は葉留佳を注視していた。どこかしよぼくれた表情をしていた。

「どうしたの葉留佳さん。元気ないよ？」

理樹が話しかけると、葉留佳は力なく笑った。

「お金ってどうやったら手に入れられるんだろうね」

「マイクロソフトでも買収するの？」

「うん、理樹君のそういう夢のあるところ、私、好きだな」

「ありがとう...」

「で。お金ってどうすれば手に入るのかな？」

話は振り出しに戻った。

「利息や地代を得られる資産を有さない無産階級は労働力を提供して対価を得る以外に手段が無い、らしいぞ」

スマートフォンに入っている何かの書物を参考にしながら、唯湖が答えた。

「要するに働けと」

「不満か？」

「不満というか...。私が働くならいんですケドネ。姉が働かないといけない状況になってしまったので、それを阻止したいと」

「ん？ 佳奈多君がか？ なんだそれは、売り飛ばされるとかそういう類の話か？ よし、お姉さんが身請けしてやろう」

「身請け！？ ちょっと待って来ヶ谷さん、来ヶ谷さんがそんなことするくらいなら、僕がお金を用立てるよ！」

「ちっ、金の力で佳奈多君を理樹君から奪い取れると思ったのに」

「お金で愛は買えなくても、引き裂くことは出来る...世の中にはこういう美しくない現実もあるのですね、気をつけなくては」

「あたしそーいう大人嫌いだ...」

「わふ。汚い大人にはなりたくないのです」

「うむ。おねーさんすっかり悪役だ」

「自業自得だろうが...」

話が脱線しかかっている。謙吾はそう思った。見かねて口を挟んだ。

「で。二木は何で働かないといけない状況になっているんだ？」

「それハ...」

葉留佳は視線を泳がせて誰とも合わないようにした。それを見たクドは事情を察し、おずおずと話しかけた。

「あの...もしかして校長室の前の壺の件でしょうか...？」

「壺？ ああ、あのでかい壺か。あれがどうかしたのか」

「葉留佳さんと佳奈多さんがあれで、うめぼし〜、とかやって遊んでいて、割ってしまったのだとか」

「うん、あのねクド公、うめぼしはデマだから」

「そうだったのですか。すみません。」

「まあ、話は見えてきたな。つまりあのでかい壺を割ってしまったから弁償しないといけない、だから金がある、と」

「そうなのデス」

「幾ら？」

「...百万円」

「百万...百万かあ」

理樹が困り果てた顔をしていた。もっと少額だったら立て替えるつもりだったのだろうか、と葉留佳は思った。ふと周りを見ると、程度の差はあれみんな同じような顔をしていた。自分の彼女が関係している理樹君はともかく、何であんたらまでそんな顔するの、と葉留佳は心の中で溜息をついた。

「とりあえず集められる分だけ集めて残りは分割か何かにして貰うしか無いだろう」

「まあ、それが妥当だよな」

唯湖と真人は、もうすっかりお金を集める気でいた。

「チョットチョット待って下さいヨ。何でもうみんなでお金出すみたいな話になってるんデスカ」

「だって金があるんだろう？ 百万円」

「そうですケド...いやでもホラ、実家に頼むという手だってあるわけデスシ」

「実家に頼んでどうにかなるものなのか」

「まあ確かに二木のところならどうにかならない金額では無いだろうが」

「そうなの？」

「みんなすっかり忘れてるだろうが、二木はあれでもお嬢様だぞ」

「それを言ったら葉留佳さんもなんですよけどねえ」

みんな一斉に残念そうな目で葉留佳を見た。

「ちょ、チョット何ですかその視線！」

「ううん、なんでもないの。育ちは本人の責任じゃ無いし...」

「ナンデスカソレ。いや、そりゃはるちはこんなだし、まあいろいろ言われるのはいいデスヨ。けれどもですネ、うちの姉をあれでもとか言わないで下さいヨ。ああ見えて立派なお嬢様なんデスヨ。世間知らずだし」

「そうです、佳奈多さんを悪くいわないで欲しいのです。寮でも結構動き回るからジャージの方が汚れても平気ですし、学校では制服ですし、私服を着る理由が無いのです、着ない物を買っても無駄だから持ってないだけなのです」

「私が夜中に娯楽室でTV付けてるといつの間にか後ろで食い入るように見ていることがあったのですが...最近はずっと普通に見るようになってきましたし、もう世間知らずという程でもないのでは」

「うん、もう誰が酷いこと言ってるのかわからないね」

「あたしは...かなたは偉いと思う。綺麗だし、賢いし。何であたしがあいつじゃ無かったんだとすら」

「お、鈴君は擁護派か。いや、これはむしろ、嫉妬か？」

「鈴ちゃんは鈴ちゃんのままでいいんだよ？」

「でも、あたしもああいう風になれば、もっと容赦なく愚かな兄を罵倒できたのに...」

「あー。そっちかー」

「恭介がいないときでよかったね...」

それを聞いた美魚は席を立ち、教室の後ろに歩いて行って、掃除道具入れの扉を開けた。中では恭介がすすり泣いていた。

「お前、そんなことで何やってんだ？」

「そうだぞ。そこ理樹の家じゃ無いか」

「うん、鈴はちょっと黙っててね」

「で。何やってんデスカそんなところで」

葉留佳が声をかけると、恭介は途端に泣くのをやめてきりりと引き締まった表情になった。

「三枝が困っていると聞いて、救いの手をさしのべる機会をうかがっていた」

「はあ。そりゃどうも」

「泣いている女の子には手をさしのべずにはいられない、それが棗恭介の矜持だ」

「恭介さんさっきまで泣いてたけど、私が手をさしのべた方がいいデスカ？」

「あなたのお姉さんに怒られそうだから遠慮しておきます」

「まあウチの姉は今それどころじゃ無いですよ」

「そう。その二木だ」

「みんな、話は聞いていただろう。百万円なんて、ちょっと働いたくらいで返せる金額じゃ無い。だが、ここにいる40名弱が出しあえば、一人2万5千円だ。ほら、バイトすれば出せる額になってきた。学年全員に呼びかければどうだ。一人5千円だ。小遣いでも出せる金額になってきたぞ。全校生徒ならどうだ。一人2千円にもならない。昼食代を節約すれば何とかなる。どうだ、みんながほんのちょっと我慢するだけで、二木と三枝の窮地を救うことができるんだ。実家には頼めない、三枝家がどういうところか、みんななにがしか話は聞いているだろう。だから、俺達が助けるんだ。俺達全員の力で」

教室は一瞬静まりかえった。一人の男子生徒が手を叩き始めたのをきっかけに、静寂は破られた。拍手と共に、恭介の提案は承諾された。

「そういうわけだ三枝。何も心配しなくていい」

「イエエまだ懸念が」

「まだ何かあるのか」

「姉が素直に受け取るとは思えません。そもそも当事者の私ですら、自分が何とかするから余計な事はしなくていいとか、そんなこと言われたんデスヨ」

「佳奈多さん...まだ一人で背負い込む癖治ってないんだ...」

理樹が溜息交じりに言った。

「では——働いて受け取って貰うというのはどうでしょう」

美魚の提案に、一同の視線が集まった。

「もちろん百万円分きっちり働いて貰っては却ってこちらの心理的負担が大きすぎますし、なので途中でばかばかしさに気づくようなしょうもない仕事を依頼してみてもは」

「——なるほど。で、具体的には何か案があるのか？」

「神北さん、何か無いですか？」

「え？ う～ん、そうですねー。では、恭介魔王さんにさらわれた理樹姫を二木さんが助けに行く、という依頼はどうでしょう。理樹君と二木さんは付き合ってるし、丁度いいのでは」

「恭介さんが直枝さんをさらう...本当にさらうのですか？」

「演技とはいえリアリティは大事なのでそこはちゃんとやりましょう。さらってどこか秘密の場所に連れ込んで下さい」

美魚は鼻を押さえながらうずくまってしまった。恭介始めみな苦笑しながらそれを見ていた。しかし理樹だけが真剣な表情で、意気込みを露わにしていた。

「やろう。やろうよ恭介。実際こうでもしないと、佳奈多さんお金受け取ってくれないよ」

「そうか。理樹がそう言うのなら...やるか！」

「どうせなら楽しんじゃいましょー」

「ああ。全くその通りだ」

恭介は一同を見渡した。

「みんな、協力してくれるか？」

拍手、歓声、無言の頷き。めいめいがそれぞれの方法で賛意を表した。それを確認した恭介は無言で頷いた後、右手を挙げ、いつもの台詞を言おうとした。そして、はたと動きを止め、葉留佳の方を向いた。

「三枝。この台詞は、お前が言うべきだ」

「え？ 私デスカ？」

「ああ。今回のミッションは三枝が呼びかけて始まったことだ。だから三枝、お前が今回のリーダーだ」

「そうデスカ？ まあ、そういうことなら」

葉留佳はすうと息を吸い込み、声を上げる準備をした。今だ、叫ぶならば今だ。謙吾は唐突にそう思った。欲求を抑えられなかった。

クドが訂正の言葉を入れたのは謙吾が叫んだ数秒後だった。

「あの話ですか。...そうですね、まずは座りなさい」

佳奈多は校長に勧められるまま、向かい合うように応接用のソファに腰掛けた。そしてクドから受け取った給料袋をテーブルの上に置いた。

「37万5815円入っています」

「ほう...これはまた随分集めましたね」

「ですがまだ半分にも満たないです」

「そうか、百万円という話でしたね」

「はい...」

佳奈多は暫し沈黙した。目を閉じ、深呼吸した後で、また続けた。

「これ以上はすぐには用立てするのが難しいです」

「でしょうね。社会人でも難しい」

「...どうしたらいいのでしょうか」

佳奈多の声はだんだんトーンが落ちていた。校長は一回頷いた後、佳奈多に返した。

「やっとそれを訊いてくれましたね」

「...え？」

「仲間を頼ることは出来るようになったけど、大人を頼ることはまだなのかな、と少し心配してしまいました」

佳奈多ははっと顔を上げた。

「すみません...」

「いや、謝ることは無いですよ。私も少々意地悪が過ぎたようだ」

「はあ」

「二木君は優秀だから、つい何でも出来ると思ってしまう。いや、そう思いたいのか...」

校長は暫し宙を見た後、言葉が続けた。

「壺の弁償の話だったね。あの壺は生徒からの寄贈品、ということは話したかな？」

「はい」

「割れた壺は仕方が無い。私の裁量でどうとでもなるし、反省してくれさえすれば弁償など特に不要なのです。ただ、寄贈してくれた生徒さんのことを考えると、何も無しというわけにも行かない」

「仰る通りです」

「だから、今後どうするかはその生徒さんと話し合うのが筋だと、私は思いますよ」

「わかりました。それで、その生徒さんというのは」

「ん？ まだそこまでの話にはなっていないのかな？」

校長は訝しがる顔をし、そして佳奈多の後ろの方を見た。佳奈多はつられて後ろを向いた。その場にいる、あーちゃん先輩以外の生徒たちも皆同じ方向を見た。全員の視線を浴びたあーちゃん先輩は一瞬戸惑った。そして何かに気づいたような顔になった。

「あ。あたしか寄贈した壺か！」

みんな一瞬沈黙してしまった。

「いや、だってほら訊かれなかったし...いやわかってるわよ、そんなの訊きようが無いって事は。でもねえ、あたしもほら、ど忘れしてたのよ。やあねえ、最近うっかりが多くて」

「あたし知ってる！ そういうの、こーねんきしょうが言って言」

あーちゃん先輩が鈴に無言でほほえみかけ、鈴の肩は小刻みに震え始めた。

しかしそれで周りの緊張の糸はほぐれた。佳奈多はソファから立ち上がり、あーちゃん先輩の元に歩み寄った。そして深々と頭を下げた。

「寄贈していただいた壺を割ってしまい、済みませんでした」

「え、ちょっとなに。やあねえ、あたしとかなちゃんの仲で、そんな水くさい」

「いいえ、そういう仲だからこそ、けじめはしっかり付けないと」

「そう？ じゃあけじめとして事実を言うけどね。あの壺、親の知り合いで磁器工場を営んでいる人から貰ったものなんだけどね」

「はい」

「検査で規格外になって、出荷できないからって貰ったものなのよ。うちが引き取らなければ産廃として処分するしか無かったものだし、ほら、産廃処分ってお金いるでしょう？ だから、ただどころかむしろお金貰うレベルのものなのよ？」

「...そう、ですか」

「だからそんな37万5815円差し出されても、こっちとしても困っちゃうのよねえ」

「そう言われましても」

佳奈多は理樹や葦留佳恭介ら生徒たち一同に視線を向けた。みんな複雑な顔をしていた。あ

「はい、ありがとうございます。お話を伺って、私もいろいろ考えた。でも、結局は、あーちゃん先輩も事情を察して黙り込んでしまった。」

「なるほど。だいたいの事情はわかりました」

校長が佳奈多たちに声をかけた。

「では、私から一つ提案があるのですが、よろしいですか？」

「はい」

「最近、経済的事情から学業を諦めざるをえない人が増えています。ですが、実際には一時的に学費や生活費を立て替えられれば退学までする必要の無い人が多いのです。なのでそういった人達の為の基金を作ろう、という話が出ているのです」

「なるほど。そこに寄付して欲しいと」

「いえ。まだ基金は立ち上がってはいないので、どちらかというあなた方に立ち上げて欲しい、というところですね」

「そんな大役...」

「出来ると思いますよ。ここ数日のあなた方の行動は、ちゃんと見ていましたから」

佳奈多は理樹の方を見た。理樹は無言で頷き、その周りにいる生徒たちもみな目で同意していた。佳奈多はあーちゃん先輩の方を改めて見た。

「事情はどうあれ、このお金は壺の弁償代ですし、あーちゃん先輩がどうしたいかだと思います」

「そうねえ。そういう話ならアタシは異論無いけど」

「創設者なので基金の名前を付ける権利がありますよ」

「え？ じゃあ是非付けたい名前があるんですけど」

「なんですか？」

「かなちゃん友情基金」

「...」

「な、なんですかそれ！ やめて下さいそんな名前！」

「えー。アタシが付けていいって言われたのに」

「人の名前勝手に付けないで下さい！」

「かなちゃんが仲間の友情に支えられて危機を脱したお話を記念して、という大事な意味があるのよ？」

「大事な意味があってもです。あとかなちゃんじゃないです」

「かなちゃんじゃ無いならかなちゃんって名前付けたって文句言う筋合い無いじゃないのさー」

「屁理屈言うのはやめて下さい！」

「えーと君たち、細かい話し合いは、どこか空き教室ででもやりなさい」

「...そ、そうですね。すみません。いろいろお騒がせしました」

こうして壺の話は一件落着となった。また後日、この事件を記念して友情記念基金の設立が校長から発表されたのであった。正式名称は結局「かなちゃんの名に於ける東リトルバスターズ友情記念基金」となったが、あまりに長すぎるということで校長は全てを読み上げることを拒否した。

そして生徒たちは日常に戻り、佳奈多は再び理樹との平穏な生活を取り戻したのであった。

「そして平穏な生活を取り戻したかなちゃんは、それまでいろいろあって大変ストレスが溜まっていたので、直枝君を保健室に連れ込んで100回押し倒しましたとき」

「わふ。佳奈多さんったら...」

「まったくホントしょうのない人ですねあの姉は！」

「あら、かなちゃんが来たわ」

「...あーちゃん先輩。なに葉留佳やクドリャフカにいい加減なこと吹き込んでるんですか...」

「いい加減かしら？ 現にこうして保健室で張り込んでいたら直枝君を伴って現れたわけだけど」

「...落ち着いてゆっくり話がしたかったから、それでここに来ただけです...そんないやらしい目的じゃ無いです...」

「それで保健室？ 他にもっと場所があるでしょうに」

「勝手知ったる保健室、なにしてたかなんて外からじゃわからないですよネ」

「ちょっと葉留佳あなた何を」

「前科もありません」

「前科もありますシ」

「すみません佳奈多さん、こればかりは弁護できません...」

「あなた達.....」

「うわ、なんか結構本気で怒ってるぽい。逃げるわよ！」

「わかりました、逃げるのです！」

「エスケープ！」

佳奈多は逃げ出す3人を追おうとした。が、理樹が手を握っていたのでそれ以上先に進めなかった。理樹の手の感触を感じた佳奈多は息を吐いて落ち着きを取り戻し、そしてほんのちょっとだけ優しい表情を、誰に見せるでもなくそういう表情をした。

完